

須江関ノ入遺跡

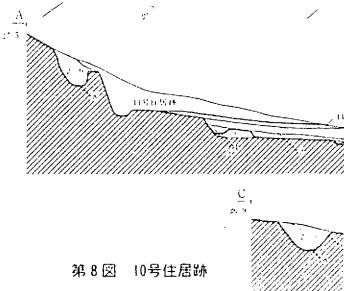
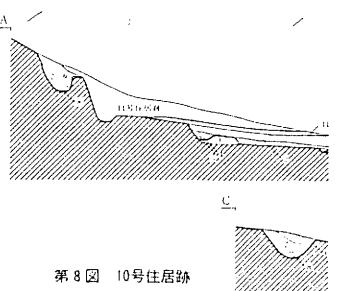
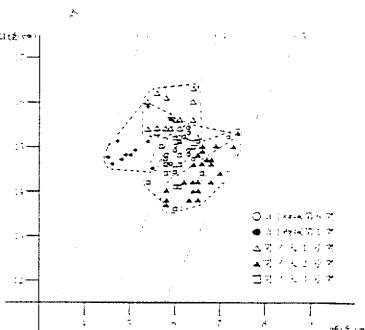
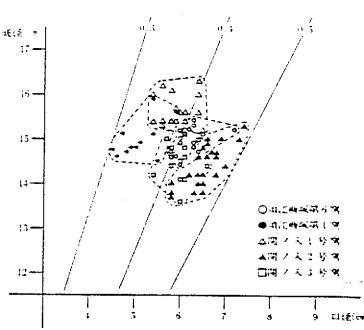
——工業団地造成に伴う発掘調査概報——



平成2年3月

宮城県 河南町教育委員会

河南町文化財調査報告書第4集 正誤表

P.—L.	正	誤
P.3	矢返遺跡	矢返遺跡
P.16・17	<p>A B C</p>  <p>第8図 10号住居跡</p>	<p>A B C</p>  <p>第8図 10号住居跡</p>
P.50—1.27	16号住居跡・17号住居跡出土土器の編年的位置と年代	16号住居跡・17号住居跡の編年的位置と年代
P.53		
P.56—1.36	瀬峰町教育委員会(1988.12)：「長者原 遺跡一昭和63年度宮城県内発掘調査成果発表会発表要旨一」	瀬峰町教育委員会(1988.12)：「長者原 遺跡一昭和63年度宮城県内発掘調査成果発表会発表要旨一」

発刊の辞

河南町須江字関ノ入の丘陵地に工業団地造成が計画され、その事前の作業として、文化財発掘調査が実施されてきました。昭和62年度、63年度の詳細分布調査については、昭和63年3月、平成元年3月にその概要を報告したところですが、今回はそれを含めて、調査終了となった今日、全体の概要を報告するものです。

昭和63年度までは県教育委員会の指導や、町内学校教師の協力などがありました
が、職員としては一人、中野裕平主事が担当し、作業員の皆様方のご協力で調査してきました。平成元年度からは職員を増員し、佐藤敏幸主事も加わり、調査の進捗を図りました。作業員延べ1,517名、総予算額約1,600万円という人員と経費を投入(職員費は別)、約190,000m²の広い面積部分を13ヶ月余の日数をかけて調査したものです。

もともと須江丘陵は陶器を焼くに良質な粘土の産地として知られ、且つ、古くから遺跡として知られてきました。調査の結果、やはり古代の住居跡や窯跡が見つかり、遺物がたくさん掘り出されました。その内容は報告書に詳しく述べられています。

近年、諸処方々で埋蔵文化財の発掘が進み、いろいろな新発見もなされています。同時に、古い時代の我々の祖先の生活の有様が浮き彫りにされ、今更ながら先人を偲ぶ絶好の贈物となっています。

未来の創造は、「歴史から学ぶ」ことから始まる、とも云われています。先人の業績から学び、文化財を大切にしていくことに、この報告書が役に立つことを祈念します。

平成2年3月

河南町教育委員会 教育長 浅野 鐵雄

例　　言

1. 本書は、関ノ入工業団地造成工事に伴う発掘調査概報である。この概報は後日発刊される正式な報告書に先んじて、速報的な性格を有するものである。

2. 調査は、次の要項で実施した。

〔遺跡名〕関ノ入遺跡

〔所在地〕宮城県桃生郡河南町須江字関ノ入・茄子川

〔調査対象面積〕190,000m²

〔調査面積〕54,200m²

〔調査期間〕昭和63年7月4日～平成元年1月31日

平成元年3月9日～平成元年10月30日

〔調査主体〕河南町教育委員会

〔調査員〕河南町教育委員会社会教育課 主事 中野裕平

同 主事 佐藤敏幸

3. 調査指導：宮城県教育庁文化財保護課

4. 発掘調査と報告書作成にあたり、次の方々から指導、協力をいただいた。

〔発掘調査〕宮城県教育庁文化財保護課：進藤秋輝、白鳥良一、真山悟、手塚均、佐藤則之、赤沢靖章

加藤明弘、菅原弘樹、近藤和夫

向陽台中学校教頭：平沢英二郎

河南高等学校：相原淳一

石巻工業高校：茂木好光

河南京中学校：岡崎徹郎、山形浩之

河南西中学校：小野寺周哉

〔報告書作成〕東北歴史資料館：藤沼邦彦

宮城県多賀城跡調査研究所：高野芳宏、丹羽茂、後藤秀一、村田晃一、柳沢和明

石巻文化センター：中村光一、岡道夫

多賀城市埋蔵文化財調査センター：高倉敏明、千葉孝弥、石川俊英、相沢清利

仙台市教育委員会：小川淳一

(財)福島市振興公社文化財調査室：西村博幸

本宮町歴史民俗資料館：鈴木雅文

5. 調査・整理参加者：阿部美栄子、伊藤ゆう子、内海誠、加藤次男、亀山信子、近藤武夫、今野はな子、

佐藤公雄、佐藤定、佐藤次男、高橋吉雄、高橋正、高橋美好、成沢伸行、橋浦たき子、

橋浦千代枝、(故)橋浦安雄、三浦真太郎

6. 土層や土器の色調表記については『新版標準土色帖』7版(小山・竹原：1987.1、日本色研事業株式会社)に

準拠し、土性区分は国際土壤学会法の基準を参考にした。

7. 本書の執筆は、河南町教育委員会 主事 中野裕平、同 主事 佐藤敏幸が行い、編集は佐藤が担当した。

8. 調査によって得られた資料は、全て、河南町教育委員会で保管している。

目 次

発 刊 の 辞

例 言

目 次

I. 調査に至る経過	1
II. 遺跡の位置と環境	1
1. 遺跡の位置と地理的環境	1
2. 遺跡の歴史的環境	2
III. 調査の方法と経過	7
IV. 基本層序	10
V. 検出された遺構と出土遺物の概要	11
1. 住居跡	11
1号住居跡・10号住居跡・16号住居跡・17号住居跡	
2. 掘立柱建物跡	27
3. 窯 跡	27
1号窯跡・2号窯跡・3号窯跡・4号窯跡・5号窯跡・8号窯跡	
4. 粘土採掘坑跡	45
5. 遺物包含層	45
6. 焼土遺構	45
7. 土 壤	46
8. 井戸跡	46
9. 溝状遺構	46
10. その他の出土遺物	46
VI. 遺構と遺物のまとめ	47
1. 遺 物	47
2. 遺 構	55
写 真 図 版	58

I. 調査に至る経過

関ノ入遺跡の所存する、通称須江丘陵の南部は石巻市の近郊にあたり、これまでに民間業者等による農用地等を転用しての小規模開発や丘陵部の土取りが行われてきた。また、石巻地方広域水道企業団による須江山浄水場の建設が行われるなど、石巻圏の都市計画による関連開発の影響がおよぶ地域もある。

関ノ入地区開発計画は、宮城県桃生郡河南町須江字関ノ入・茄子川地内に河南町による工業団地、茄子川・代官地内に關ノ入地区画整理組合による住宅団地の造成を行うものである。

昭和61年3月、河南町からこの開発計画の通知を受けた河南町教育委員会は、その開発区域内に關ノ入遺跡が含まれることから、直ちに協議に入った。同年8月、県文化財保護課の指導と協力を得て、開発区域内の踏査を行い、数地点で、遺物を採集し、遺構を確認した。

しかしながら、開発区域が約560,000m²と広範にわたること、遺跡の範囲や性格が把握されていないことから、これを把握し、遺跡の保護・保存を図るため、昭和62年度、63年度の2ヶ年間、国庫補助金の交付を得て詳細分布調査を実施した。その結果、古代の窯跡群や集落跡などが確認された。

これに基づき、河南町教育委員会は文化財の保護を目的として、町当局と協議を重ねた。その結果、種々の状況から開発計画の変更が困難であると判断された。開発計画では工業団地の着工が優先されたため、河南町では町単独事業として、本遺跡の発掘調査を河南町教育委員会に依頼した。

昭和63年7月、河南町教育委員会は県文化財保護課の指導を得て、記録保存を目的とする発掘調査を実施するための活動を開始した。

II. 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置と地理的環境

関ノ入遺跡は宮城県桃生郡河南町須江字関ノ入、茄子川、代官地内に所在し、JR石巻線佳景山駅の南方約3.5kmにある。遺跡の所在する河南町は面積69.21km²、人口18,670人（平成元年12月31日現在）の町で、宮城県の東部に位置し、石巻市の北西に隣接する。旧北上川は町の北部で江合川と合流して石巻湾に注いでおり、その南側の沖積平野となだらかな丘陵地が町域を形成している。

東に標高60～90mの、通称須江丘陵、西に笠岳丘陵から続く標高70～170mの、通称旭山丘陵、北に最高所173mの和淵山とこれに連なる丘陵を配している。町の中央には低坦地があり、

江戸時代には用水確保のため広淵沼が造られたが、大正10年から昭和3年にかけて干拓され水田地帯となっている。

須江丘陵は、小竹地区を挟んで大きく南北に二分される。本遺跡は丘陵南部の、ほぼ中央の頂部及び斜面に立地しており、頂部の標高は50～65mである。現況

第1図 河南町位置図



の大部分は杉や雑木の山林で、他にわずかの畠地がある。

本遺跡は砂岩、黒色粘板岩、縞状頁岩、花崗岩質岩の礫からなる中新統：追戸層(佳景山礫岩部層)が基盤をなし、その上に砂岩とシルト岩の互層を主体とする鮮新統：表沢層、さらに最上部には砂質シルト岩と砂岩の互層を主体として上部に陸成的な粘土質シルト岩が発達している鮮新統：俵庭層の堆積がみられる(滝沢・神戸・久保ほか：1984. 3)。

2. 遺跡の歴史的環境

町内では、関ノ入遺跡の所在する須江丘陵やその西に位置する旭山丘陵を中心に多数の遺跡が分布している。これらの遺跡について、時代別にふれてみたい。

旧石器時代の遺跡は、現在のところ発見されていない。

縄文時代の遺跡は17ヶ所確認されている。この中で、型式名のわかる土器を出土しているのは6遺跡である。桑柄貝塚はカキを中心とした鹹水産貝塚であり、前期(上川名Ⅱ式)の遺物を包含する。関ノ入遺跡では、前期(大木2式)、中期(大木8a式)、後期の遺物が出土している。朝日貝塚はヤマトシジミを中心とした汽水産貝塚であり、中期(大木7b、8a、8b式)^{註1}の遺物を包含する(藤沼・小井川ほか：1989. 3)。須江糠塚遺跡からは中期(大木9式)の遺物が出土している(高橋・阿部：1987. 3)。宝ヶ峯遺跡は縄文時代後期の土器型式「宝ヶ峯式」の標準遺跡として、学史的に有名である(伊東信雄：1957. 3、松本彦七郎：1919. 5、1919. 9)。ここでは後期(南境式、宝ヶ峯式、金剛寺式)、晚期(大洞B、B C、C 1式)の遺物が出土している。俵庭遺跡からは後期(南境式)の遺物が採集されている。他に前山遺跡、小崎遺跡、長者平遺跡等があり、

No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	須江糠塚遺跡	集落跡 窯跡	古墳、奈良・ 平安、中世	23	小崎遺跡	包含地	縄文、奈良・ 平安
2	須江瓦山窯跡	窯跡	平安	24	大田沢遺跡	包含地	縄文、古代
3	池袋畠遺跡	包含地		25	前山遺跡	包含地	縄文、奈良・ 平安
4	広瀬沼遺跡	包含地		26	黒沢A遺跡	包含地	縄文、古代
5	宝ヶ峯遺跡	包含地	縄文(中~晚)	27	黒沢B遺跡	包含地	縄文、古代
6	朝日貝塚	貝塚	縄文(中)	28	箱清水A遺跡	包含地	縄文(後)、古代
7	本鹿又遺跡	包含地	弥生	29	箱清水B遺跡	包含地	縄文、古代
8	桑柄貝塚	貝塚	縄文(前)	30	箱清水寺脇遺跡	包含地	縄文
9	塩野田城跡 (塩煮田館)	城館	中世	31	小友遺跡	包含地	古代
10	宿屋敷跡	城館	中世	32	高森山遺跡	包含地	古墳、古代
11	要害館跡 (館山館)	城館	中世	33	大沢A遺跡	包含地	縄文、古代
12	武田館跡 (武田屋敷)	城館	中世、近世	34	大沢B遺跡	包含地	縄文
13	柏木館跡	城館		35	大沢C遺跡	包含地	縄文
14	小崎館跡	城館	近世	36	夷田館跡	城館	近世
15	草田館跡	城館	中世	37	代官山遺跡	包含地	古代
16	喜多村館跡 (高地谷館)	城館	中世	38	桑柄遺跡	包含地	古代
17	木村館跡	城館	中世	39	新田A遺跡	包含地	古代
18	新庄館跡 (駒立館)	城館	中世	40	新田B遺跡	包含地	古代
19	駒場館跡	城館		41	代官山横穴古墳群	横穴古墳	古墳、古代
20	俵庭遺跡	包含地	縄文(中・後)、 弥生、古代	42	失返遺跡	包含地	古墳、古代
21	長者館跡 (長者平道跡)	包含地 城館	縄文、中世	43	奈良山遺跡	窯跡	古代、江戸
22	関ノ入遺跡	集落跡 窯跡	縄文(前・中・後) 奈良、平安、中世	44	青木館跡 (林光館)	城館	中世

第1表 遺跡地名表



第2図 河南町の遺跡

(国土地理院 1:25,000を複製)

その多くは、旭山丘陵とその麓部で平坦地と接する縁辺に立地している。しかし、その性格は、貝塚を除いては、不明といわざるをえない。

弥生時代の遺跡は2ヶ所確認されている。本鹿又遺跡では旧北上川の河床から中期(大泉式)の遺物が出土している。俵庭遺跡からは、土器は出土していないが、アメリカ式石鏃が採集されている。

古墳時代の遺跡は5ヶ所確認されている。須江糠塚遺跡では前期(塩釜式期)の住居跡が7軒検出されている。いずれも方形を基調とするもので、丘陵の尾根上平坦面に立地している。新田A遺跡からは前期(塩釜式)^{註1}の土器が採集されている。後期では代官山に横穴古墳群の存在が確認されている。他に古墳時代の遺跡として高森山遺跡、矢返遺跡がある。

奈良・平安時代になると、遺跡数が増加し、現在のところ22ヶ所確認されている。発掘調査によって内容が明らかにされた閑ノ入遺跡では、奈良時代前半と平安時代前半の堅穴住居跡31軒(国分寺下層式期4軒、表杉ノ入式期18軒、不明9軒)、9世紀後半から10世紀前半にかけての窯跡6基が検出されている。また、昭和61年度に調査された須江糠塚遺跡からは奈良時代後半から平安時代初期にかけての住居跡9軒、9世紀後半から10世紀前半にかけての窯跡6基が検出されている。須江瓦山窯跡には平安時代の瓦や須恵器を生産した窯跡群がある。瓦の一部は牡鹿郡衙、あるいは牡鹿柵跡と推定される矢本町赤井遺跡に供給されている(三宅・進藤・茂木:1987.3)。以上のように、須江丘陵は奈良・平安時代の遺跡が多く、特に、平安時代には一大土器生産地であったと推測される。

中世以降になると、旭山や、須江の丘陵上など14ヶ所に城館が築造されている。長者館跡(長者平遺跡)は金壳吉次の仮屋敷跡(藩政期には小島嘉右衛門の除屋敷跡とも言われる)の言い伝えがある。糠塚館跡(須江糠塚遺跡)は、古代の「中山柵跡」に擬定されたこともあり(鈴木省三:1924.12、清水東四郎:1924.12)、「仙台領内古城書上」によれば、東西20間、南北16間の規模で、館主は須藤勘解由左衛門であるとされている(仙台叢書:1971)。塩野田城跡は東西21間、南北27間、館主は須藤勘解由左衛門(一説には矢代斎三郎)と伝えられている(「安永風土記」)。夷田館跡は葛西家家臣夷田氏の居館と伝えられている(「風土記御用書上」)。多くの館跡は年代、館主共に不明である。

また、鹿又地区、須江地区を中心として、町内には、現在のところ85基の板碑が確認されている。紀年銘の判別できるものの中で最古は弘安元年(1278年)、最新は文明10年(1478年)のものである(佐藤雄一:1986.11)。残念ながら、多くの板碑は原位置を保っていない。

江戸時代になると、新田開発や旧北上川を利用しての舟運が盛んになる。この時代の遺跡としては、陶器を生産したと考えられる奈良山遺跡がある。

註1. 採集された遺物の一部は、町教委が保管している。

III. 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、関ノ入地区開発計画区域内に『宮城県遺跡地図』(宮城県教育委員会：1988.

1)登載の周知の遺跡である関ノ入遺跡が所在するため、遺跡の立地する丘陵頂部平坦面及び斜面を対象として実施したものである。

昭和62、63年度に実施した詳細分布調査によって、調査区内の遺構の分布が把握され、遺構が点在することがわかった(中野裕平：1988.3、1989.3)。調査区は、分布調査時と同様に、A区、B区、C区、D区、E区に区分した。また、グリッドの設定及び表記についても、分布調査時の原点を基に3m単位で設定し、東西方向をアルファベット、南北方向をアラビア数字で表し、両者の組合せでグリッド名を表した。

効率的に調査を進めるため、重機を用いて表土を除去し遺構を確認した。遺構の検出は、分



第3図 調査範囲と周辺の地形

第4図 関ノ入遺跡遺構配置図

布調査で確認されている地点とその周囲を調査する方法を採り、その範囲を徐々に広げた。調査はD区、B区、C区、E区、A区の順で進めた。その結果、堅穴住居跡31軒、掘立柱建物跡2棟、窯跡9基、粘土採掘坑跡6基、井戸跡1基、焼土遺構50基、土壙75基、溝状遺構26条、遺物包含層1枚を検出した。このうち、堅穴住居跡8軒は未調査のまま埋め戻して保存することにした。

検出した遺構の実測図は、基本的に $1/20$ 図で作成し、広範囲にわたるものについては $1/50$ 図、 $1/100$ 図を併用して作成した。

発掘調査は昭和63年7月4日から始め、一部調査の完了した平成元年6月3日に現地での説明会を開き、同年10月30日までに遺構の各種実測図、写真、及び文章記録等の記録化を全て完了し、調査を終えた。

なお、本概報では、報告に際し煩雑さを避けるため、分割したA区、B区、C区、D区、E区の区分を取り払い調査区全体について記載した。

IV. 基 本 層 序

調査区は大きく丘陵頂部平坦面、緩斜面、及び急斜面に分けられる。これらの各面の層序には多少の相違はあるものの、基本的には同一の層準を示している。

〔I層〕褐(10YR $\frac{4}{4}$)色のシルトである。本遺跡の表土で、全域にみられる。粘性はなく、しまりに欠ける。層厚は丘陵頂部平坦面では5~15cm、緩斜面では30~40cm、急斜面では10~30cmである。現況の大部分は山林であるが、畠地となっているところでは搅乱を受けている。少量の土師器、須恵器を含む。

〔II層〕にぶい黄褐(10YR $\frac{5}{4}$ ~10YR $\frac{1}{3}$)色のシルトである。丘陵頂部平坦面や調査区東側の南に面する斜面を除く、ほぼ全域にみられる。I層より粘性があり、しまりに欠け、礫をまばらに含んでいる。層厚は緩斜面では25~35cm、急斜面では5~25cmである。少量の石器、縄文土器、土師器、須恵器を含む。

〔III層〕暗褐(10YR $\frac{3}{3}$ ~7.5YR $\frac{3}{4}$)色の砂質シルトである。調査区の北側を沢に沿って走る町道「茄子川・関ノ入線」より北西の東に面する斜面と1号窯跡灰原の周囲にみられる。粘性が強く、かたくしまった土である。層厚は10~50cmである。少量の縄文土器、土師器を含む。

〔IV層〕黄褐(10YR $\frac{5}{6}$)色、またはにぶい黄橙(10YR $\frac{6}{4}$)色のシルト質粘土である。本調査区の地山で、全域にみられる。ほとんどの遺構は本層上面で確認されている。

〔V層〕明赤褐(5YR $\frac{5}{8}$)色のシルト質粘土である。

〔VI層〕灰黄(2.5YR $\frac{7}{2}$)色の粘土である。調査区東側から検出された粘土採掘坑跡の壁面で確認されている。

V. 検出された遺構と出土遺物の概要

関ノ入遺跡の発掘調査によって竪穴住居跡31軒、掘立柱建物跡2棟、窯跡9基、粘土採掘坑跡6基、遺物包含層1枚、焼土遺構50基、土壙75基、井戸跡1基、溝状遺構26条が検出された。これらの遺構にともなって、土器や石製品など多数の遺物が出土した。ここでは各種の遺構の概要を記述し、さらに、その中から代表される遺構を抽出して詳細を報告する。

なお、検出された遺構と出土遺物に関するデータには、図や表を多く用いることに努めた。

1. 住居跡

竪穴住居跡は31軒検出された(第2表)。そのうち8軒(20、21、24、25、26、27、28、29号住居跡)が保存措置に計画変更されたため、完掘したのは23軒である。平面形はいずれも方形を基調とするものである。また、住居跡の大半が斜面に立地しているため、長い年月の間に自然によって削平をうけ、その全容を知り得るものは少ない。

1、2号住居跡は調査区西側の丘陵頂部付近に位置し、南西に面した緩斜面に立地している。

区分 遺構名	平面形	見 採(m) 長軸×短軸	柱 穴	カマド	周溝の 有無	灰白色 火山灰	備 考	時 期
1号住居跡	正方形又は長方形	— × —	2個検出	北壁	有	未検出	火災焼失住居。貯蔵穴状ビット。壁柱穴。	表杉／入式期
2号住居跡	長 方 形	5.1 × 4.7	4個検出	北壁	無	有		表杉／入式期
3号住居跡	正 方 形	4.5 × 4.2	1個検出	東壁	無	未検出	貯蔵穴状ビット。床溝。	表杉／入式期
4号住居跡	正方形又は長方形	6.7 × —	未検出	有	未検出			表杉／入式期
5号住居跡	正 方 形	5.6 × 5.4	1個検出	北壁	有	有	貯蔵穴状ビット。壁柱穴。外延溝。	表杉／入式期
6号住居跡	正 方 形	3.6 × 3.5	未検出	未検出	有	未検出		不 明
7号住居跡	正方形又は長方形	4.2 × —	2個検出	北東壁	有	未検出	貯蔵穴状ビット。床溝。	表杉／入式期
8号住居跡	正方形又は長方形	3.0 × —	未検出	南壁	有	有	貯蔵穴状ビット。	表杉／入式期
9号住居跡	正方形又は長方形	4.1 × —	1個検出	未検出	有	未検出	貯蔵穴状ビット。	表杉／入式期
10号住居跡	(古)ほぼ正方形 (新)長方形	古4.5 × 4.2 新4.1 × 3.6	3個検出	東壁?	有	未検出	床溝。壁柱穴。外延溝。外周溝。	表杉／入式期
11号住居跡	正方形又は長方形	5.3 × —	未検出	東壁	有	未検出	10号住居跡上面を整地して構築。	表杉／入式期
12号住居跡	正方形又は長方形	2.9 × —	2個検出	北西壁	有	未検出	貯蔵穴状ビット。	国分寺下層式期?
13号住居跡	正方形又は長方形	— × —	未検出	未検出	有	未検出	貯蔵穴状ビット。	表杉／入式期
14号住居跡	正方形又は長方形	— × —	2個検出	未検出	有	未検出		表杉／入式期
15号住居跡	正 方 形	4.8 × 4.7	6個検出	未検出	有	未検出	貯蔵穴状ビット。床溝。壁柱穴。外延溝。	表杉／入式期
16号住居跡	正方形又は長方形	6.8 × —	2個検出	北西壁	有	未検出	貯蔵穴状ビット。	国分寺下階式期
17号住居跡	正方形又は長方形	6.0 × —	6個検出	北壁	有	未検出	貯蔵穴状ビット。床溝。	国分寺下階式期
18号住居跡	正方形又は長方形	— × —	4個検出	未検出	有	未検出	火災焼失住居?。壁柱穴。	表杉／入式期
19号住居跡	正方形又は長方形	— × —	未検出	北壁	有	未検出		国分寺下解式期
20号住居跡	正方形又は長方形	— × —	—	—	—	—		—
21号住居跡	正方形又は長方形	— × —	—	—	—	—		—
22号住居跡	正方形又は長方形	5.6 × —	1個検出	未検出	有	未検出		表杉／入式期
23号住居跡	正方形又は長方形	3.6 × —	未検出	北東隅	有	未検出		表杉／入式期
24号住居跡	正方形又は長方形	— × —	—	—	—	—		—
25号住居跡	正方形又は長方形	— × —	—	—	—	—		—
26号住居跡	正方形又は長方形	— × —	—	—	—	—		—
27号住居跡	正方形又は長方形	— × —	—	—	—	—		—
28号住居跡	正方形又は長方形	— × —	—	—	—	—		—
29号住居跡	正方形又は長方形	— × —	—	—	—	—		—
30号住居跡	正方形又は長方形	4.5 × —	2個検出	東壁?	有	有	貯蔵穴状ビット。床溝。壁柱穴。	表杉／入式期
31号住居跡	正方形又は長方形	5.6 × 3.8	4個検出	南東壁	有	有	貯蔵穴状ビット。床溝。壁柱穴。	表杉／入式期

第2表 関ノ入遺跡から検出された住居跡

1辺6m前後の方形を基調とするもので、どちらも北壁にカマドを有する。1号住居床面の南半部には広範囲に強い火熱の痕跡が認められ、火災に遭ったものと思われる。3、4、5号住居跡は調査区中央を東西に分ける沢の西側に位置し、3、8号窓跡等と共に東に面する比較的急な斜面に立地する。1辺5m前後の方形を基調とするものである。カマドは3号住居跡では東壁に、5号住居跡では北壁に付設されていたが、4号住居跡からは、削平のためか、検出されなかった。前述の沢を挟んで、調査区東側からは、24軒の住居跡が検出された。7~29号住居跡は南に面する急斜面に群在し、その南側の平坦面に6号住居跡が立地している。平面形はいずれも方形を基調としているが、規模は1辺約3~7mで、均一ではない。カマドは12、16、17、19号住居跡では北側に、7、10、11、22、26号住居跡では東側に、8号住居跡では南側に位置している。30、31号住居跡は調査区北側を沢に沿って走る町道「茄子川・閑ノ入線」の北西に位置し、7号窓跡等と共に南に面する斜面に立地する。平面形は1辺約5mの方形を基調とするもので、カマドは東側に付設してある。

これらの住居跡の中には、住居内の周溝や周溝から続く貯蔵穴状ピットに接続し、住居外の斜面下方に延びる溝(外延溝)^{註1}が付設してあるもの(5、10、15号住居跡)や、住居の3辺を囲むように「へ」状に巡らされた溝(外周溝)^{註2}が検出されたもの(10号住居跡)がある。

今回の概報では、特徴ある施設を持つ10号住居跡、豊富な遺物を出土した1、16、17号住居跡の詳細を報告する。なお、ピットや土器の破片資料に関するデータは割愛した。

1号住居跡

〔確認面〕基本層序Ⅳ層から確認された。

〔重複・増改築〕北壁の一部で8号焼土遺構に切られている。

〔規模・平面形〕北西隅を除いた北壁と東壁の一部が検出されたが、その他の部分については削平のため検出されなかった。残存する北壁と東壁の幅はそれぞれ5.76m、4.82mである。1辺が6m前後の正方形、または長方形であると推定される。

〔竪穴層位〕竪穴層位は2層に大別されるが、いずれも自然堆積層である。

〔壁〕基本層序Ⅳ層からなり、最も保存の良い北壁下では(崩落部分も含める)45cmの高さで残存

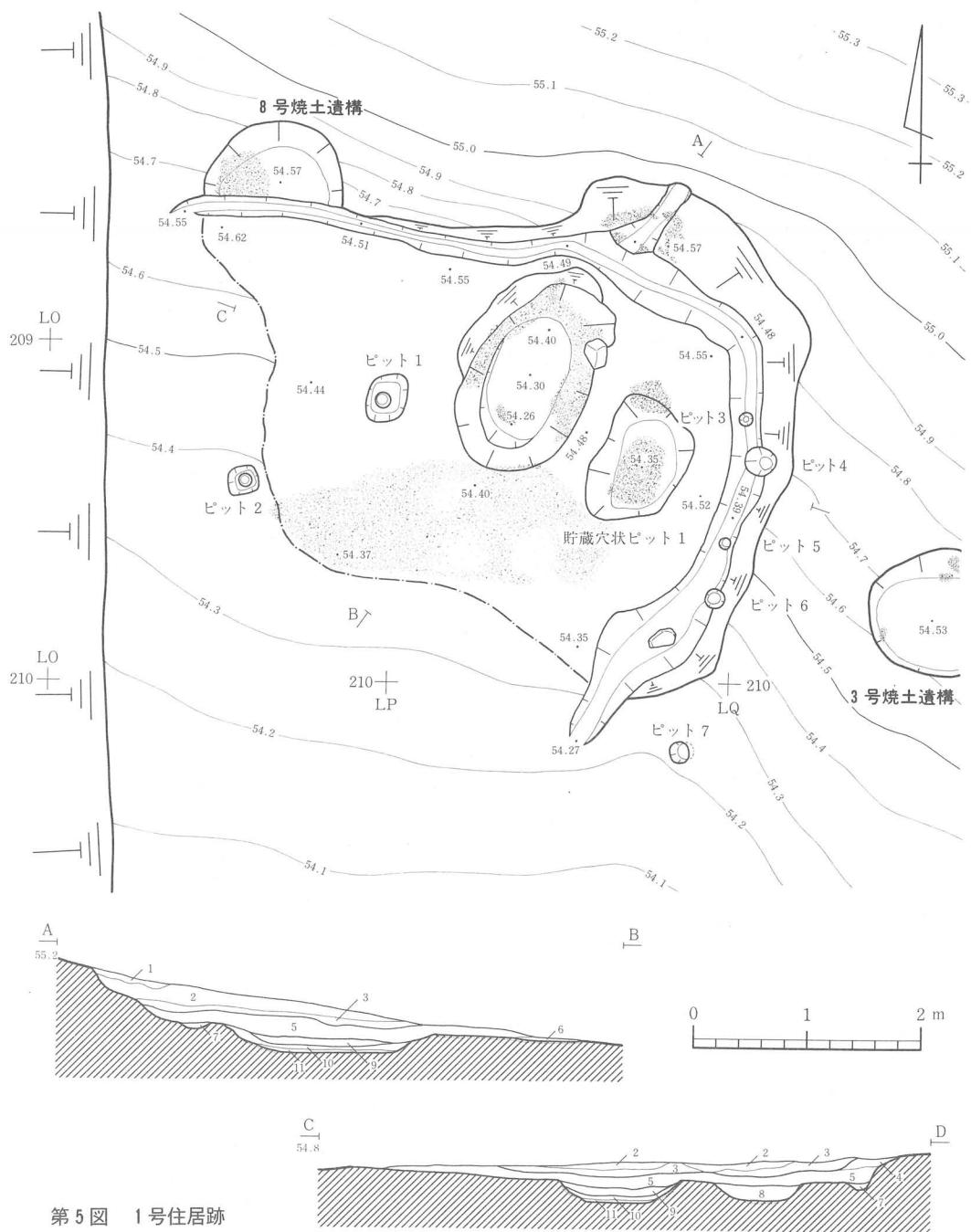
No.	土色	土性	筛	考	堆積範囲
1	にぶい黄褐色10YR ^{4.5}	シルト	少量の炭化物を含。	竪穴層位 第1層	
2	褐10YR ^{4.5}	シルト	少量の炭化物、焼土を含。		
3	にぶい黄褐色10YR ^{4.5}	シルト	黄褐色10YR ^{5.5} 粘土質シルトを斑状に含。炭化物を含。	竪穴層位 第2層	
4	褐10YR ^{4.5}	粘土質シルト	にぶい黄褐色10YR ^{5.5} シルトを斑状に含。炭化物を含。		
5	褐10YR ^{4.5}	粘土質シルト	炭化物、焼土を多量に含。黄褐色10YR ^{7.5} 粘土をブロック状に含。		
6	にぶい黄褐色10YR ^{4.5}	粘土質シルト	多量の焼土を含。		
7	褐10YR ^{4.5}	砂質シルト	少量の炭化物、焼土を含。	周溝	
8	褐10YR ^{4.5}	砂質シルト	炭化物、焼土を含。		
9	にぶい黄褐色10YR ^{4.5}	シルト	多量の炭化物、焼土を含。	カマド	
10	にぶい黄褐色10YR ^{6.5}	粘土質シルト	少量の炭化物、焼土を含。		
11	黒褐10YR ^{2.5}	シルト	多量の炭化物、少量の焼土を含。黄褐色10YR ^{7.5} 粘土をブロック状に含。		

している。床面から急な

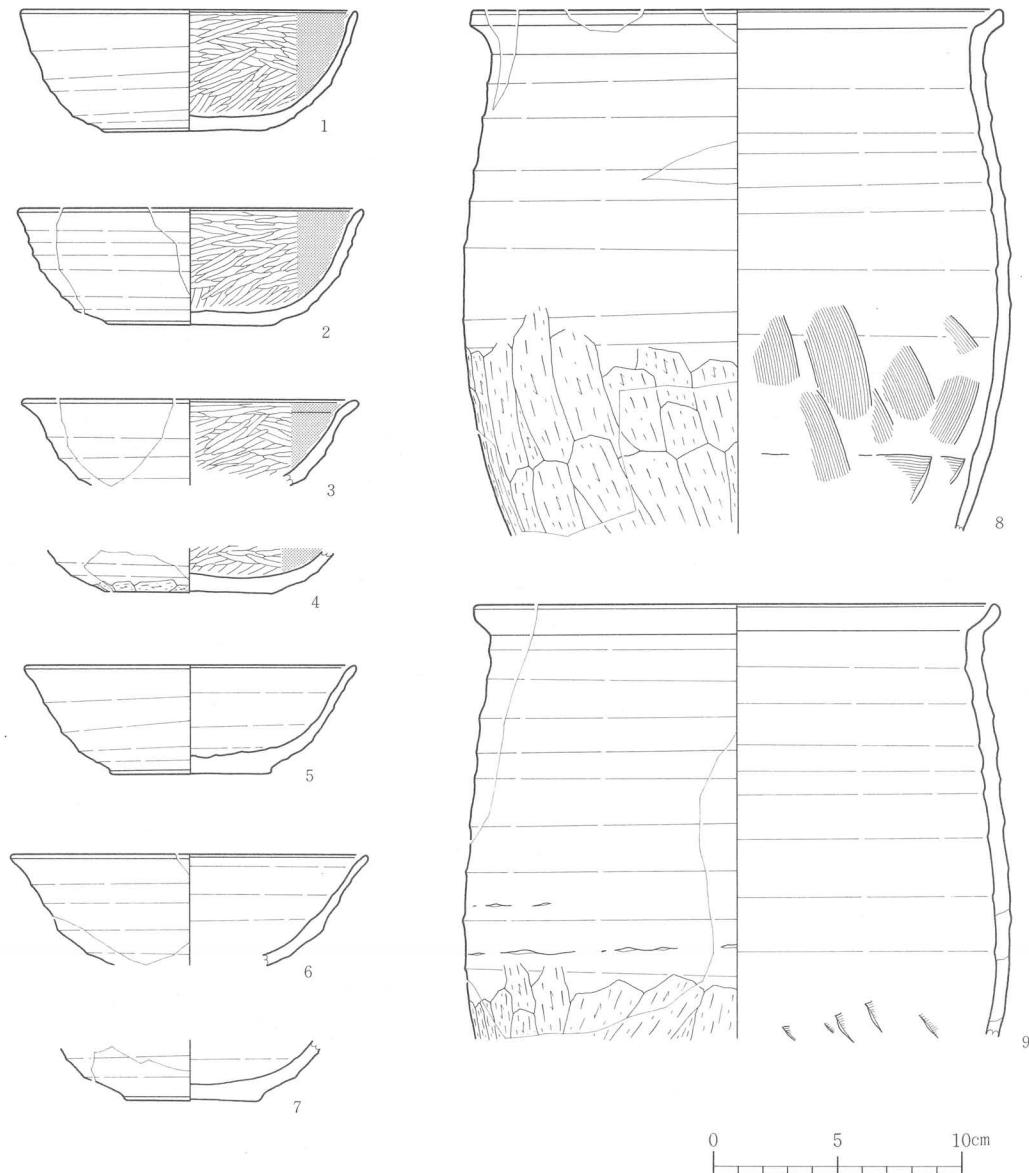
第3表 1号住居跡堆積土

角度で立ち上がるが、ほとんどの壁の上半部に崩落の痕跡が認められた。

〔床面〕基本層序Ⅳ層を床面としており、凹凸はない。床面レベルは北西隅が最も高く、南東になるにつれて、徐々に低くなる。全体的にややかたい。床面南半に強い火熱の痕跡が認められた。

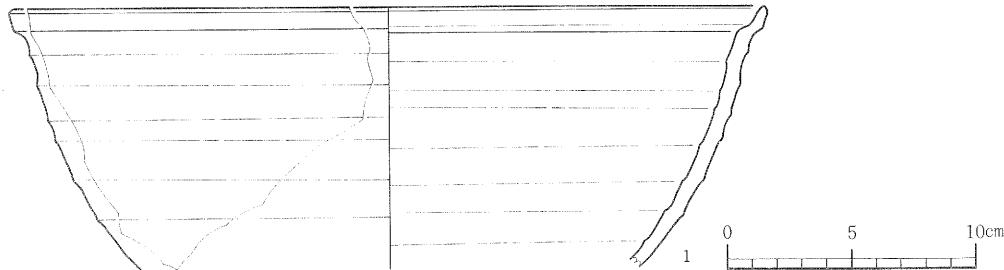


第5図 1号住居跡



No.	種別	層位	外面	底部	内面	備考
1	土師器坏	周溝	ロクロナデ、橙7.5YR ⁷ ₆	削り	磨キ・黒色処理、黒10YR ^{1.7} ₁	図版2-1
2	土師器坏	周溝	ロクロナデ、橙7.5YR ⁷ ₆	削り	磨キ・黒色処理、黒10YR ^{1.7} ₁	
3	土師器坏	床面	ロクロナデ、明赤褐5YR ⁵ ₆	——	磨キ・黒色処理、黒10YR ^{2.7} ₁	
4	土師器坏	周溝	ロクロナデ・削り、橙7.5YR ⁷ ₆	回転糸切り	磨キ・黒色処理、黒10YR ^{1.7} ₁	
5	赤焼き土器坏	周溝	ロクロナデ、明黄褐10YR ⁷ ₆	回転糸切	ロクロナデ、橙7.5YR ⁶ ₆	図版2-2
6	赤焼き土器坏	層No.8	ロクロナデ、にぶい黄橙10YR ⁷ ₄	——	ロクロナデ、橙7.5YR ⁷ ₆	
7	赤焼き土器坏	層No.5	ロクロナデ、橙5YR ⁶ ₆	回転糸切り	ロクロナデ、にぶい黄橙10YR ⁷ ₄	
8	土師器甕	周溝	ロクロナデ・削り、明黄褐10YR ⁷ ₆	——	ロクロナデ・箆ナデ、色調外面と同じ	
9	土師器甕	周溝	ロクロナデ・削り、橙5YR ⁶ ₆	——	ロクロナデ・箆ナデ、色調外面と同じ	

第6図 1号住居跡出土遺物(1)



第7図 1号住居跡出土遺物(2)

No.	種別	層位	外面	底部	内面
1	土師器鉢	周溝	ロクロナデ、捲7.5YR ⁷ ₆	-	ロクロナデ、浅黄緑7.5YR ⁸ ₄

〔柱穴〕7個のピットが検出された。ピット1、2は柱穴と考えられる。また、西壁とその付近から検出されたピット3、4、5、6はその配置から壁柱穴と考えられる。ピット7は柱穴とは考えられない。

〔カマド〕北壁に位置しており、燃焼部底面と煙道の一部が検出されたが、その他は検出されなかった。燃焼部は長さ1.80m、幅1.06mの長円形で深さ19cmに掘りくぼめられている。煙道部は一部が検出されたのみで、その規模は不明である。燃焼部底面と残存する煙道部の一部は火熱によって赤変していた。

〔貯蔵穴状ピット〕1個検出された。長軸1.10m、短軸0.82mの不整円形を呈する。堆積土は単層(層No.8)である。底面には火熱をうけた痕跡が認められた。

〔周溝〕壁と同様に全部は検出されなかつたが、壁沿いに一周すると推定される。幅12~75cm、深さ4~11cm、断面は「U」形である。底面レベルは北西隅が最も高く、南東隅に近づくにつれて低くなる。

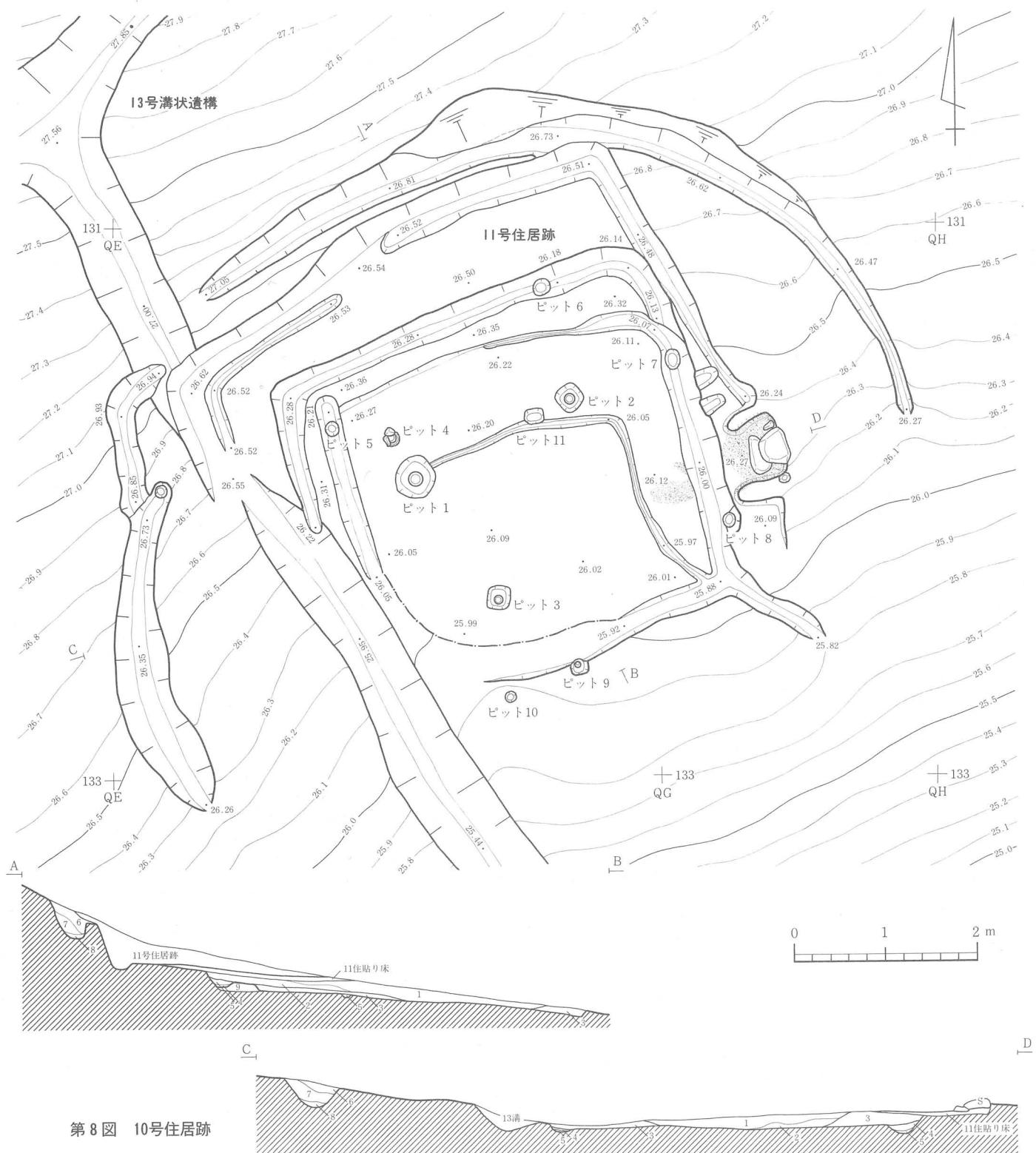
〔出土遺物〕床面、周溝を中心に土器の一括資料が出土した(第6、7図)

10号住居跡

〔確認面〕11号住居跡貼床下面および基本層序Ⅳ層から確認された。

〔重複・増改築〕11号住居跡、13号溝状遺構と重複している。11号住居跡の床面は本住居跡の覆土上面を整地して形成していることから、本住居跡の方が古い。また、北壁と西壁の直下、およびその内側に各々1こずつの周溝が検出された(北壁の内側では一部が段状に検出された)。各々の周溝の間には人為的に粘土を貼り、高さ5~12cmの段状に構築している(層No.9)ことから、当初の住居の範囲は外側の周溝までで、その後、内側の周溝まで縮小した可能性がある。しかし、外側の周溝の堆積土は内側のそれと同一で、さらに、新旧関係も認められないことから、外側の周溝は縮小された時点でも機能していたと考えられる。

〔規模・平面形〕縮小以前の住居跡は南北4.16m、東西4.48mのはば正方形、縮小後のものは



第8図 10号住居跡

南北3.58m、東西4.12mの長方形である。いずれも南西隅だけが検出されなかった。

〔堅穴層位〕 2層に大別されるが、1層は粘土ブロック(黄橙10YR^{7.8})を多く含んだ人為堆積層と考えられる。2層は自然堆積層である。

〔壁〕 基本層序Ⅳ層からなり、最も保存の良い北東隅下では35cmの高さで残存している。床面から急な角度で立ち上がる。

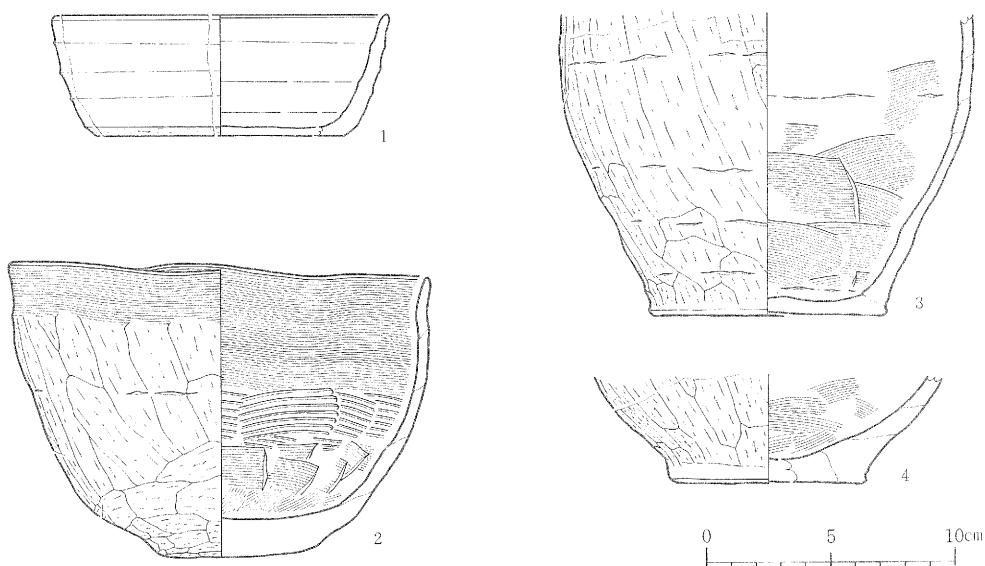
〔床面〕 基本層序Ⅳ層を床面としており、凹凸はない。床面レベルは北西隅が最も高く、南東隅になるにつれて、徐々に低くなる。全体的にかたい。なお、床面にはピット1からのびる溝が認められた。幅7~12cm、深さ4~6cm、断面は「U」形である。この溝はピット1から離れるにつれて徐々に底面レベルを減じながら、南東隅で周溝に接続する。

〔柱穴〕 12個のピットが検出された。ピット1、2、3、4は柱穴と考えられる。ピット5、6、7、8、9、10はその配置から壁柱穴と考えられる。ピット11は柱穴とは考えられない。

〔カマド〕 明確にカマドと認め

No.	土色	土性	備考	堆積範囲
1	褐7.5YR ^{4.3}	砂質シルト	多量の黄橙10YR ^{7.8} 粘土をブロック状に含。炭化物、焼土を含。	堅穴1層
2	暗褐7.5YR ^{3.3}	砂質シルト	多量の黄橙10YR ^{7.8} 粘土をブロック状に含。炭化物、焼土を含。	堅穴2層
3	明黄褐10YR ^{6.6}	粘土	少量の暗褐7.5YR ^{7.4} 砂質シルトを斑状に含。	周溝
4	褐7.5YR ^{4.3}	砂質シルト	明黄褐10YR ^{6.6} 粘土をブロック状に含。	周溝
5	明黄褐10YR ^{6.6}	粘土		
6	褐7.5YR ^{4.3}	砂質シルト	褐7.5YR ^{7.8} 粘土を細かいブロック状に含。	
7	褐7.5YR ^{4.6}	粘土		外周溝
8	褐7.5YR ^{4.9}	シルト質砂	褐7.5YR ^{7.8} 粘土を細かいブロック状に含。微量の炭化物を含。	
9	淡黄2.5Y ^{8.4}	粘土	褐7.5YR ^{7.8} 粘土をブロック状に含。	掘り方埋土

第4表 10号住居跡堆積土

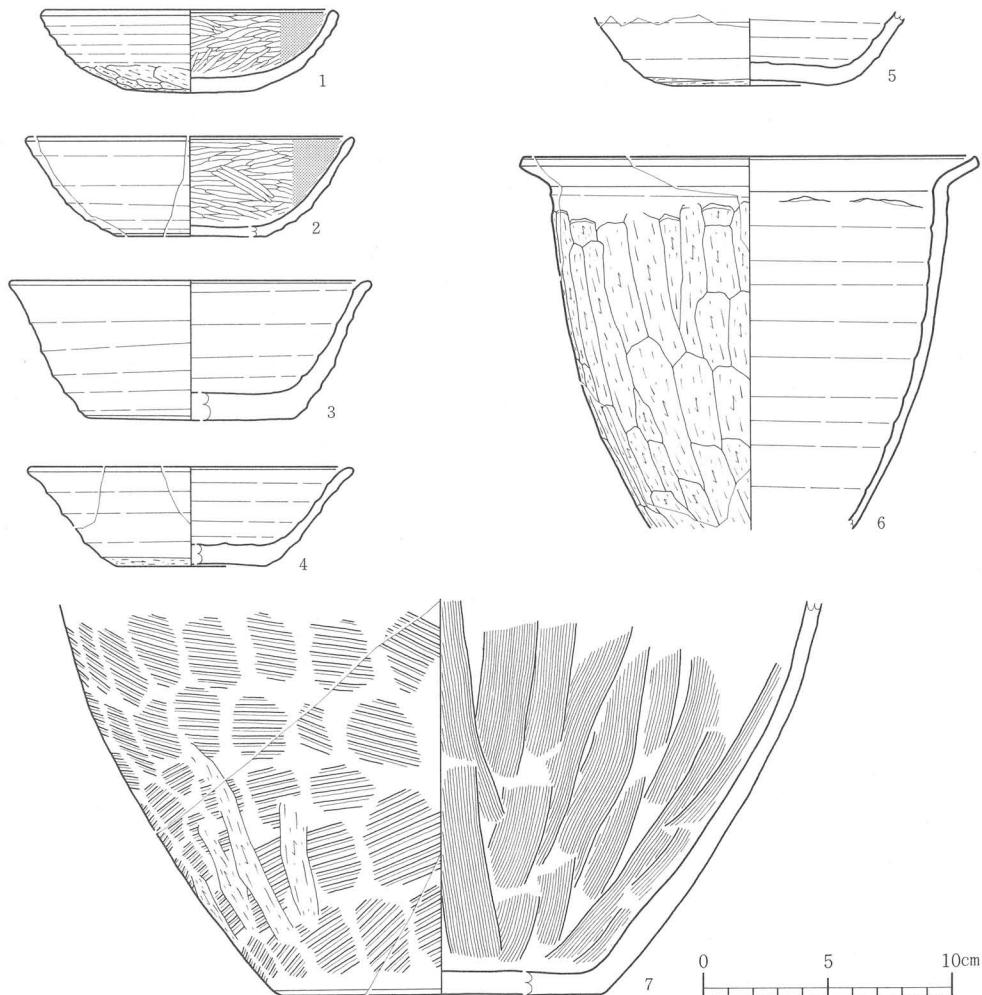


No.	種別	層位	外 面	底 部	内 面
1	須恵器坏	床面	ロクロナデ・回転削り、灰白10YR ^{8.1}	回転削り	ロクロナデ、色調外面と同じ
2	土師器鉢	床面	横ナデ・削り、灰白2.5Y ^{8.2}	削り	横ナデ・窓ナデ・ハケメナデ、色調外面と同じ
3	土師器甕	床面	削り、明赤褐5YR ^{5.8}	木葉痕	窓ナデ・窓赤7.5YR ^{5.1}
4	土師器甕	床面	削り、暗赤褐5YR ^{3.6}	木葉痕	ナデ、にぶい褐7.5YR ^{5.4}

第9図 10号住居跡出土遺物(1)

られる施設は検出されなかったが、東壁中央下に強い火熱をうけた焼面が検出された。その位置にカマドが付されていた可能性が強い。

〔周溝〕全部は検出されなかったが、縮小前の周溝(外側の周溝)は全周するものと推定される。縮小後の周溝は北壁の約半分を除いて巡らされたものと思われる。両周溝とも幅7~42cm、深さ5~11cm、断面は「U」形である。縮小前の底面レベルは相対的に10cm程高い。縮小前、縮小



No.	種別	層位	外 面	底 部	内 面
1	土師器坏	外周溝底面	ロクロナデ・削り、にぶい、橙7.5YR ⁷ ₄	削り	磨キ・黒色処理、黒10YR ^{1.7} ₁
2	土師器坏	層No.7	ロクロナデ、浅黄橙7.5YR ⁸ ₄	不明	磨キ・黒色処理、黒10YR ^{1.7} ₁
3	須恵器坏	外周溝底面	ロクロナデ、灰白10Y ⁸ ₂	回転削り	ロクロナデ、色調外面と同じ
4	須恵器坏	外周溝底面	ロクロナデ・回転削り、灰白10Y ⁸ ₁	回転削り	ロクロナデ、色調外面と同じ
5	須恵器坏	外周溝底面	ロクロナデ・回転削り、オリーブ灰2.5G Y ⁶ ₁	回転糸切り・回転削り	ロクロナデ、色調外面と同じ
6	土師器甕	外周溝底面	ロクロナデ・削り、明赤褐5YR ⁵ ₈	——	ロクロナデ、色調外面と同じ
7	須恵器甕	外周溝底面	叩目・削り、灰白10Y ⁸ ₁	削り	笠ナデ・ナデ、色調外面と同じ

第10図 10号住居跡出土遺物(2)

後における周溝の底面レベルはいずれも北西隅が最も高く、南西隅に近づくにつれて低くなる。

〔その他の施設〕 周溝の南東隅から住居外急斜面(南東)に向かってのびる溝(外延溝)が検出された。長さ1.22m、幅26cm、断面は「U」形である。住居から離れるにつれて底面レベルは低くなる。また、南西～北東の幅9.30mにわたって、住居の3方を囲む溝(外周溝)が検出された。この溝は丘陵斜面(南東)に対して開口しており、平面形は「匁」形を呈している。北西部で一部途切れる部分も認められたが、削平によるものと考えられ、基本的には連結するものと考えられる。なお、溝の西側ではピットが1個検出され、ピット以南の部分とそれ以外の部分の接続部では、底面レベルで12cmの比高差が認められた。溝の最大幅78cm(壁崩落部分を含む)、最も保存の良い中央部では52cmの深さで残存している。断面は「U」形を基調としている。底面レベルは北西壁下が最も高く、開口部に近づくにつれて低くなる。

〔出土遺物〕 床面、および外周溝底面を中心に土器の一括資料が出土した(第9、10図)。

16号住居跡

〔確認面〕 基本層序Ⅳ層から確認された。

〔重複・増改築〕 認められない。

〔規模・平面形〕 北西壁全部と北東壁、南西壁の各一部が検出されたが、その他の部分については削平のため検出されなかった。北西壁の幅は6.84m、残存する北東壁と南西壁の幅はそれぞれ3.74m、1.68mである。6.84m×6m前後の正方形、または長方形であると推定される。

〔竪穴層位〕 竪穴層位は2層に大別されるが、いずれも自然堆積層である。

〔壁〕 基本層序Ⅳ層からなり、最も保存の良い西隅では37cmの高さで残存している。床面から急な角度で立ち上がる。

〔床面〕 基本層序Ⅳ層を床面としており、凹凸はない。床面レベルは西隅が最も高く、南東になるにつれて、徐々に低くなる。全体的にかたい。

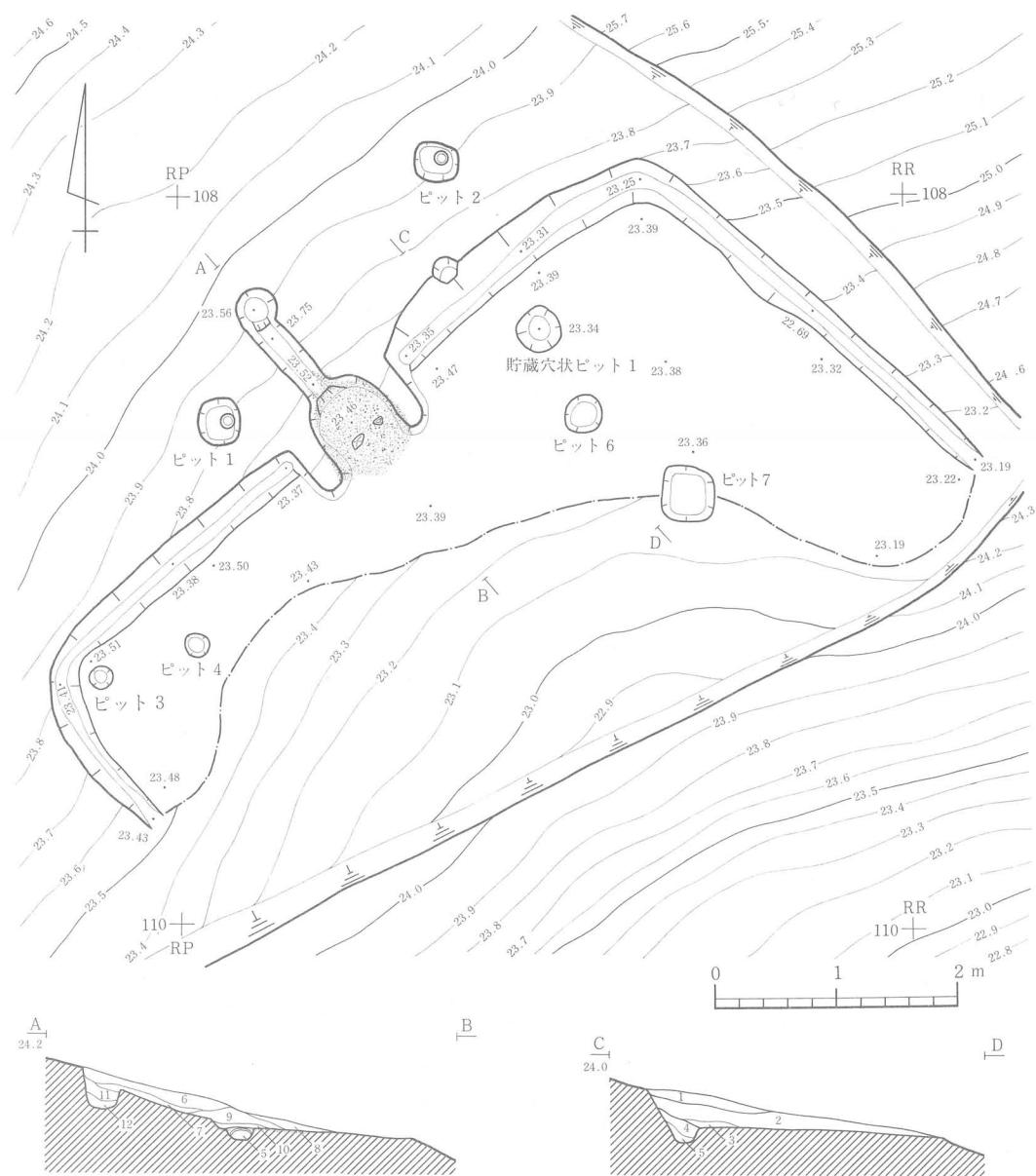
〔柱穴〕 7個のピットが検出された。ピット1、2は住居外に位置するが、掘り方、柱痕跡が認められ柱穴と考えられる。また、北西壁から検出されたピット5はその位置から壁柱穴と考えられる。その他は柱穴とは考えられない。

〔カマド〕 北西壁に位置しており、燃焼部と煙道部が

検出された。燃焼部は奥行

No.	土色	土性	備考	採取層名	堆積範囲
1	黒褐5 YR 2/2	砂質シルト	炭化物、焼土を多量に含。	1層	竪穴1層
2	褐7.5 YR 4/3	粘土	径5mmの明黄褐10 YR 6/8粘土をブロック状に多量に含。	2層	竪穴2層
3	暗褐7.5 YR 3/3	粘土	少量の明黄褐10 YR 6/8粘土を細かいブロック状に含。		
4	黒褐7.5 YR 3/2	砂質粘土	微量の明黄褐10 YR 6/8粘土をブロック状に含。	周溝	周溝
5	極暗褐7.5 YR 2/3	砂質粘土	少量の明黄褐10 YR 6/8粘土をブロック状に含。		
6	褐7.5 YR 4/3	粘土			
7	暗褐7.5 YR 3/3	砂質シルト	微量の炭化物、焼土を含。		
8	暗褐7.5 YR 3/4	シルト	少量の焼土を含。		
9	褐7.5 YR 4/4	粘土	明黄褐10 YR 6/8粘土をブロック状に含。	カマド	カマド
10	暗赤褐5 YR 3/6	粘土	多量の焼土を含。	堆積土	
11	暗赤褐2.5 YR 3/6	粘土	微量の炭化物、焼土を含。		
12	極暗褐7.5 YR 2/3	砂質粘土	微量の炭化物、焼土を含。		

第5表 16号住居跡堆積土

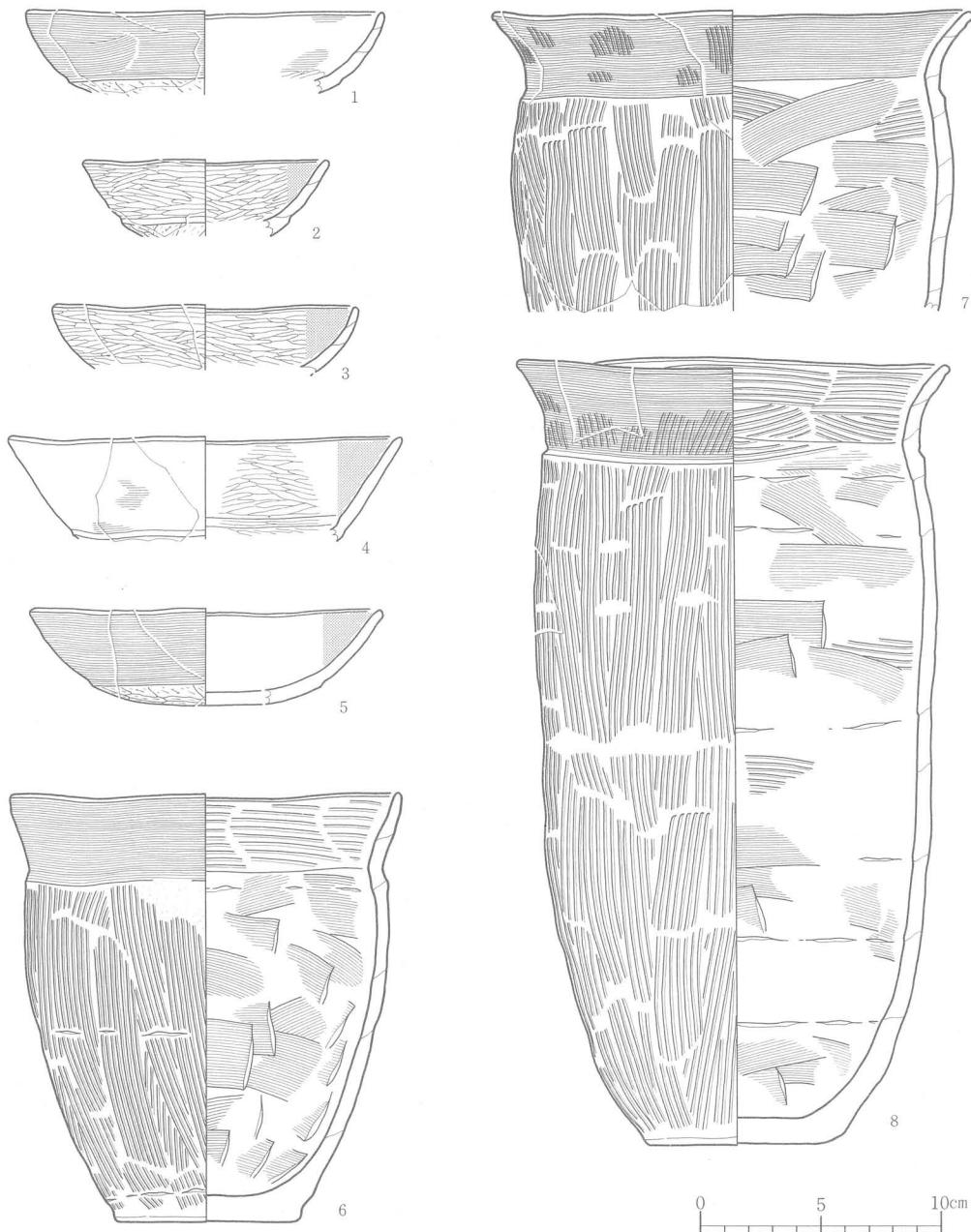


第11図 16号住居跡

き0.84m、幅1.22mである。煙道部は長さ1.06m、幅26cm、底面は先端に近づくにつれて高くなる。先端からは煙出しピットが検出された。なお、燃焼部内部は火熱によって赤変しており、支脚と考えられる石が2個、燃焼部底面に据えてあった。

〔貯蔵穴状ピット〕 1個検出された。層No.3が堆積するもので、直径36cm、深さ10cmの円形を呈する。

〔周溝〕 壁と同様に全部は検出されなかつたが、壁沿いに一周すると推定される。幅16~40cm、深さ7~15cm、断面は「U」形である。底面レベルは西隅が最も高く、東隅に近づくにつれて低



No	種別	層位	外 面	底 部	内 面
1	土師器坏	床 面	横ナデ・削り、にぶい黄橙10YR ^{7/4}	——	横ナデ・磨キ、色調外面と同じ
2	土師器坏	床 面	磨キ・削り、にぶい黄橙10YR ^{7/3}	——	磨キ・黑色処理、黒10YR ¹⁻⁷ ₁
3	土師器坏	周溝	磨キ、橙5YR ^{6/6}	——	磨キ・黑色処理、赤黒2.5YR ¹⁻⁷ ₁
4	土師器坏	床 面	横ナデ・マメツ、にぶい黄橙10YR ^{6/4}	——	磨キ・黑色処理、黒7.5YR ¹⁻⁷ ₁
5	土師器坏	層No.2	横ナデ・削り、橙7.5YR ^{6/6}	削り	マメツ・黑色処理、黒7.5YR ¹⁻⁷ ₁
6	土師器甕	床 面	横ナデ・ハケメ、褐7.5YR ^{4/6}	木葉痕	箆ナデ・ハケメ、色調外面と同じ
7	土師器甕	層No.10	横ナデ・ハケメ、明赤褐5YR ^{3/8}	——	横ナデ・箆ナデ・ハケメ、色調外面と同じ
8	土師器甕	床 面	横ナデ・ハケメ、褐7.5YR ^{4/6}	木葉痕	箆ナデ・ハケメ、明赤褐5YR ^{5/6}

第12図 16号住居跡出土遺物(1)



第13図 16号住居跡出土遺物(2)

くなる。なお、カマドの下は半截した土師器甕を天井にしてトンネル状に構築してある。

〔出土遺物〕床面を中心に土器の一括資料が出土した(第12、13図)。

17号住居跡

〔確認面〕基本層序Ⅳ層から確認された。

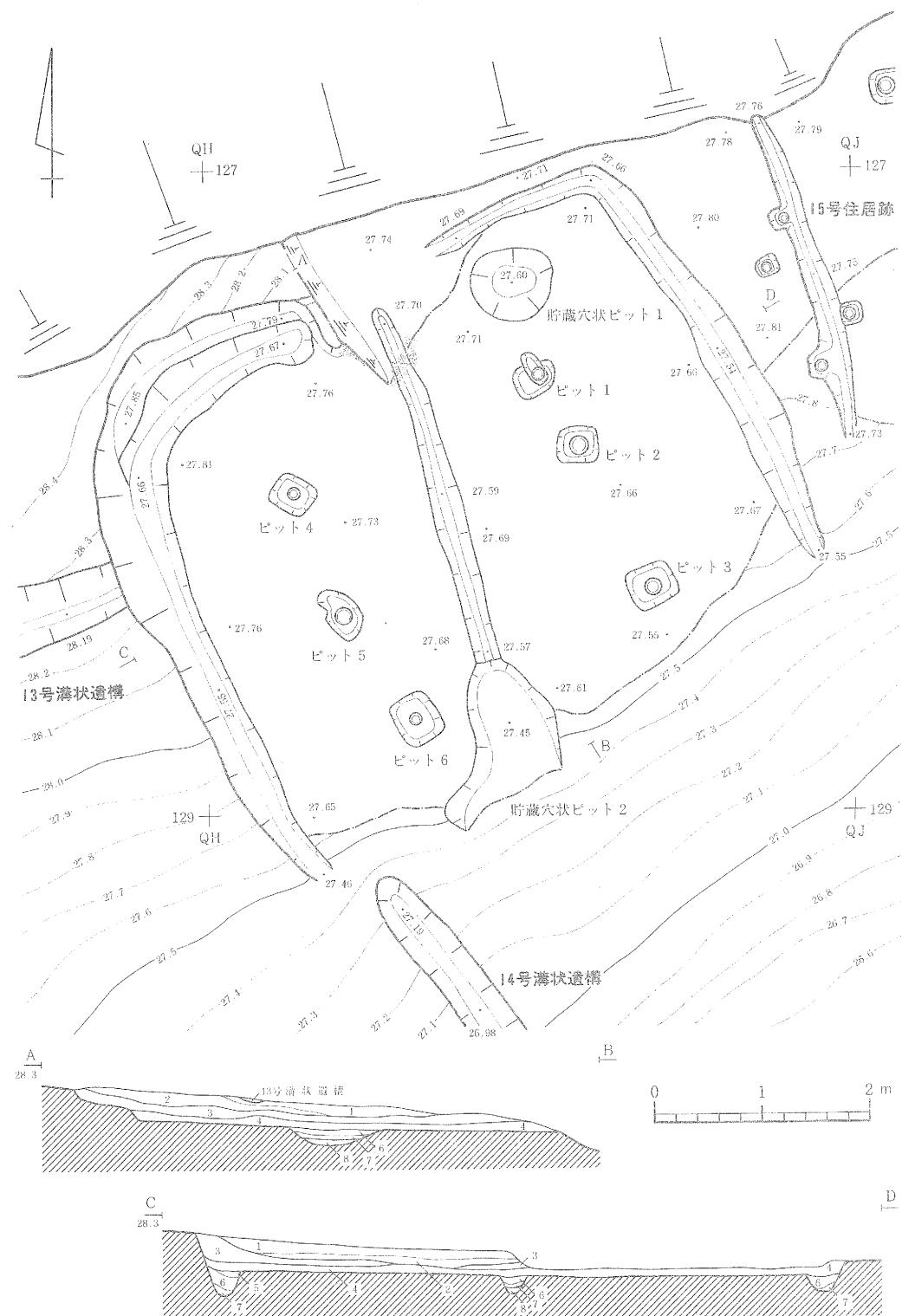
〔重複・増改築〕13号溝状遺構が本住居の覆土上層を切っている。

〔規模・平面形〕カマドを除いた北壁と東壁、西壁の各一部が検出されたが、その他の部分については削平のため検出されなかった。東西6.00m、残存する東壁、西壁の幅はそれぞれ4.20m、5.14mである。東西6.00m、南北6m前後の正方形、または長方形であると推定される。

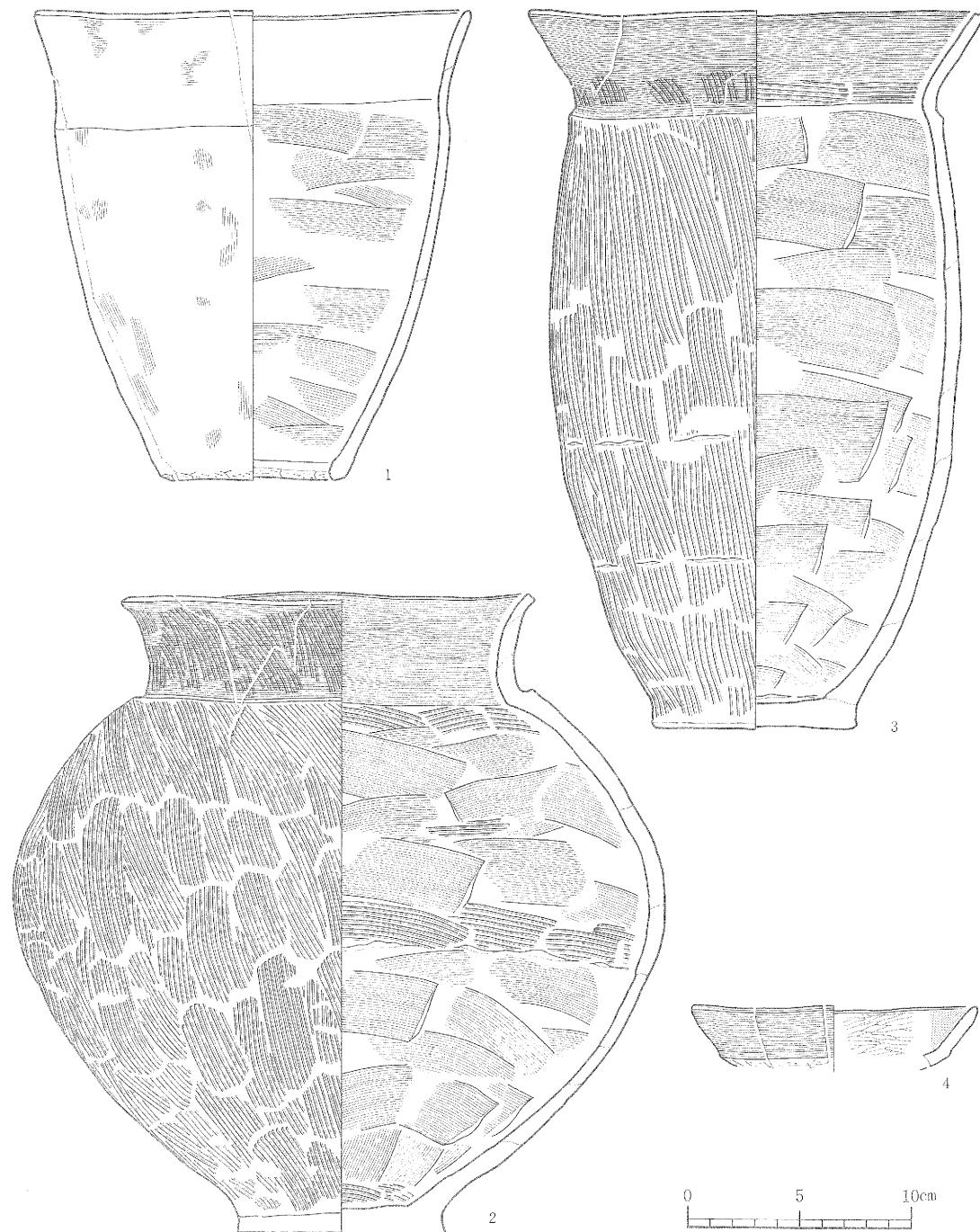
〔堅穴層位〕堅穴層位は3層に大別されるが、いずれも自然堆積層である。

〔壁〕基本層序Ⅳ層からなり、最も保存の良い北西隅では54cmの高さで残存している。床面から急な角度で立ち上がる。

〔床面〕基本層序Ⅳ層を床面としており、凹凸はない。床面レベルは北西隅が最も高く南東に



第14図 17号住居跡



No.	種別	位置	外 面	底 部	内 面
1	土瓶點器	貯藏穴ヒット1底面	横ナデ・チヂ・削り・マヌク、明黄褐10YR ^{7.6}	-----	笠ナデ・削り・マヌク、色調外面と同じ
2	土瓶器壺	周溝底面	横ナデ・ハケス、橙7.5YR ^{7.6}	木葉模	横ナデ・藻ナデ・ハケス、橙7.5YR ^{6.6}
3	土瓶器壺	床溝底面	横ナデ・ハケス、褐7.5YR ^{4.3}	削り	横ナデ・藻ナデ・ハケス、灰褐7.5YR ^{4.2}
4	土師器環	輪No.3	横ナデ・削り、黒褐10YR ^{3.5}	-----	磨キ・黑色処理、黑10YR ^{1.5}

第15図 17号住居跡出土遺物

なるにつれて、徐々に低くなる。全体的にかたい。なお、床面にはカマドから南にのびる溝(床溝)が検出された。幅14~30cm、深さ8~12cmで、底面下には、さらに、深さ6cm前後の掘り方が認められた。この溝はカマドから離れるにつれて徐々に底面レベルを減じながら、貯蔵穴状ピット2に接続する。

〔柱穴〕6個のピットが検出された。ピット1、2、3、4、5、6は柱穴と考えられる。ピット1には柱のぬき取り痕が認められた。

〔カマド〕北壁中央に位置するが、そのほとんどが削平されており、検出されたのは西側袖のみである。

〔貯蔵穴状ピット〕2個検出された。貯蔵穴状ピット1は長軸76cm、短軸68cm、深さ12cmのほぼ円形である。堆積土は2層に区分される。第1層は暗褐色(7.5YR^{3/3})色、シルトで、炭化物を含む。層厚10cmで、層No.4に近似する。第2層は褐(7.5YR^{4/3})色、砂質シルトである。層厚2cmで、底面全体に薄く堆積している。貯蔵穴状ピット2は南半が削平されているため、全容は不明である。残存する長軸1.21m、短軸0.81m、深さ20cmの不整形である。堆積土は層厚に違いはあるものの、床溝の堆積土(層No.6、7)と同一である。

〔周溝〕壁と同様に全部は検出されなかつたが、カマド部分を除いて壁沿いに一周すると推定される。北壁下の周溝は、カマド部分から西側では、壁から10cm前後離れて並行している。壁直下から周溝までの間は周溝の掘り方を埋めて築かれている。幅36~66cm、深さ11~22cm、断面は「U」形である。底面レベルはカマドの両脇が最も高く、南になるにつれて低くなる。

〔出土遺物〕周溝、床溝、貯蔵穴状ピット1を中心に土器の一括資料が出土した(第17図)。

No	上 色	上 性	備 考	採取場所	堆積範囲
1	暗褐色7.5YR ^{3/3}	シルト	橙7.5YR ^{6/8} 粘土をブロック状に含む。	1 層	壁下
2	褐7.5YR ^{6/8}	粘 土	暗褐色7.5YR ^{3/3} シルトを斑状に含む。	2 層	壁下
3	褐7.5YR ^{3/3}	砂質シルト	多量の暗褐色7.5YR ^{6/8} 粘土を織かいシロッケ状に含む。	3 层	壁下
4	黒暗褐色7.5YR ^{2/3}	シルト	多量の炭化物を含む。	4 层	壁下
5	暗褐色7.5YR ^{3/3}	シルト			
6	黄褐色10YR ^{5/8}	粘 土	暗褐色7.5YR ^{3/3} 砂質シルトを斑状に含む。	周 溝	周溝
7	暗褐色7.5YR ^{3/3}	砂質シルト	橙7.5YR ^{6/8} 砂を織かいシロッケ状に含む。		
8	黄褐色10YR ^{5/8}	粘 土	暗褐色7.5YR ^{3/3} シルトをブロック状に含む。		床溝より

第6表 17号住居跡堆積土

註1：同様な施設をもつ住居跡は、宮城県内では、瀬峰町大境山遺跡(阿部・赤沢：1983.3)、岩石王遺跡(三宅・佐藤ほか：1977.3)、下藤沢Ⅱ遺跡(阿部・赤沢・佐藤：1988.3)、長者原Ⅱ遺跡(瀬峰町教育委員会：1988.12)、古川市藤屋敷遺跡(加藤・佐藤：1980.3)、宮沢遺跡(斎藤・後藤：1985.3)、金成町佐野遺跡(平沢・手塚：1980.3)、田尻町天狗堂遺跡(佐藤・手塚：1978.3)、松山町次橋窯跡(渡辺・山田ほか：1983.3)、大和町中峯A遺跡(菊地逸夫：1985.3)、河南町須江糠塚遺跡(高橋・阿部：1987.3)、松島町山下遺跡(菊地逸夫：1982.10)、利府町八幡崎B遺跡(庄子敦：1988.3)、郷楽遺跡(菊地逸夫：1988.12)、多賀城市多賀城跡(宮城県多賀城跡調査研究所：1974.3)、仙台市舟江遺跡(渡辺・結城ほか：1980.3)、土手内遺跡(熊谷幹男：1989.12)、七ヶ宿町小梁川遺跡(新庄屋・真山：1985.3)、亘理町宮前遺跡(丹羽茂：1983.3)、二十三間堂遺跡(佐藤則之：1988.3)などで検出されており、近年、その調査例も増加している。その機能は堆積土や底面の傾斜など、検出状況の検討から、排水施設と考えられている。

この種の施設に瀬峰町大境山遺跡では便宜上「外延溝」の名称を用いて報告しており、以後、下藤沢Ⅱ遺跡、古川市宮沢遺跡、利府町八幡崎B遺跡の報文でも用いられている。関ノ入遺跡から検出された施設も同様の性格をもつものと考えられる。なお、報告に際し記述の煩雑さを避けるため、本概報でも「外延溝」という名称を用いることとした。

註2：この様な施設は、宮城県内では、瀬峰町大境山遺跡、古川市宮沢遺跡、松島町山下遺跡などから検出されており、前二者の報文では「外周溝」という名称が用いられている。本遺跡から検出された同形態の施設について、本概報では詳細な検討を加えないが、「外延溝」同様、便宜上、この名称を用いることとした。

2. 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は調査区東側、標高22~28mの丘陵斜面から、2棟検出された(第4図)。

1号掘立柱建物跡は1辺が、概ね、3m前後、2間×2間の規模である。方向は西側柱列において、N-6°-Wに偏している。柱の掘り方は隅丸方形を基調としており、大きさは1辺約50cmである。北側柱列の外側には比高差約7cmの豊穴状の浅い掘り方が認められ、建物跡構築時に地面を整えたと考えられる。また、建物跡の周囲を「匁」形に囲むように、幅80~130cm、深さ20~55cmの溝が巡らされていた。建物跡に伴う遺物は出土していない。

2号掘立柱建物跡は東西約6m、南北約8m、1間×1間の規模である。方向は西側柱列において、N-3°-Wに偏している。柱の掘り方は隅丸方形を基調とするもので、大きさは約30cmである。建物跡に伴う遺物は出土しなかった。

3. 窯跡

窯跡は須恵器窯6基(1、2、3、4、5、6号窯跡)、木炭窯3基(7、8、9号窯跡)の合計9基検出された。

須恵器窯(第6表)は樹枝状に入りくむ沢に面した、標高22~43mの緩・急斜面に散在する。いずれも、概ね、全長4~7m、焼成部の幅1.0~1.7mの半地下式の窯である。1、3、4号窯跡の斜面下方からは灰原が検出された。3号窯跡の灰原は堆積範囲も広く、多数の遺物を包含していた。4号窯跡の灰原では、灰層下から灰白色火山灰層が検出されている。また、3号窯跡は周囲に溝を巡らせており、さらに、前庭部には作業場と考えられる整地面や、ピットが確認された。

木炭窯は標高28~43mの緩斜面に散在する。規模は、概ね、全長6~8m、焼成部の幅2~

項目 遺跡名	構造	煙道 平面形	焼成部 平面形	燃焼部 平面形	全 体 長×深m	煙道 径m	焼成部 長×幅m	燃焼部 長×幅m	灰原の 有無	灰白色火山灰	備 考
1号窯跡	平地下	円 形	胸張型	U字形	7.2×0.8	0.7	3.6×1.6	3.6×1.3	有	天井崩落土上	前庭部。
2号窯跡	半地下	円 形	長円形	U字形	6.2×0.7	0.4	3.2×1.0	3.0×1.0	無	天井崩落土上	焼成部から燃焼部にかけて天井構築材の痕跡。
3号窯跡	半地下	…	長円形	U字形	6.5×0.8	—	4.3×1.2	2.2×1.1	有	天井崩落土上	焚口石組。三方に溝が巡る。作業場。広い灰原。
4号窯跡	半地下	円 形	胸張型	U字形	6.5×0.6	0.4	4.5×1.6	2.0×1.0	有	灰原の灰層下	
5号窯跡	半地下	円 形	胸張型	U字形	5.4×0.7	0.4	3.5×1.7	1.9×1.0	無	天井崩落土上	床面に溝。
6号窯跡	半地下	…	胸張型	U字形	4.0×0.6	—	3.0×1.6	1.0×0.7	無	窯内堆積土中	使用前陥落。

第7表 関ノ入遺跡から検出された須恵器窯跡

3 mである。7、8号窯跡は縦に長い逆三角形の焼成部に煙出しが付く、地下式の窯である。焚口から斜面下方にのびる溝が付設されている。焼成部の断面形はドーム形で、底面は平坦である。9号窯跡は長胴形をした焼成部とその先端左右に楕円形の副室、中央に円形の煙出しが付設されたものである。焼成部の底面は平坦である。焚口から斜面下方にのびる溝が接続している。

ここでは、須恵器窯5基(1、2、3、4、5号窯跡)と木炭窯1基(8号窯跡)の内容を報告する。なお、記述は窯跡のみとし、灰原や付属施設、破片資料に関するデータは割愛した。

■ 1号窯跡 ■

〔確認面〕基本層序Ⅳ層上面で、Ⅱ層が楕円形に堆積するくぼみとして確認された。

〔形態〕煙道部、焼成部、燃焼部からなる半地下式の窯窯である。

〔煙道部〕先端に位置し、平面形は歪んだ円形をしている。平坦な底面から急な角度で立ち上がる。

〔焼成部〕底面の平面形は煙道部に近づくにつれて、緩やかな丸みをもって徐々に狭くなり、煙道部との境でくびれています。底面は、概ね平坦であるが、壁沿いの部分は丸みをもっている。燃焼部から煙道部にかけて徐々に傾斜を強めている。傾斜角は15°～40°ほどである。使用された底面は3面確認された(確認順に、上から第1、第2、第3床面)。第3床面は窯跡掘り方底面である。第2床面は第3床面上の崩落土に砂を敷いて整地している。第1床面は第2床面と同様に構築している。側壁は内湾気味に立ち上がり天井へと続く。側壁と天井の境は明瞭ではない。全体に還元し、硬化している。

〔燃焼部〕焼成部からくびれて狭くなるところから下方が燃焼部である。底面は、概ね平坦で、側壁は急な角度で立ち上がる。底面、側壁とも火熱をうけている。

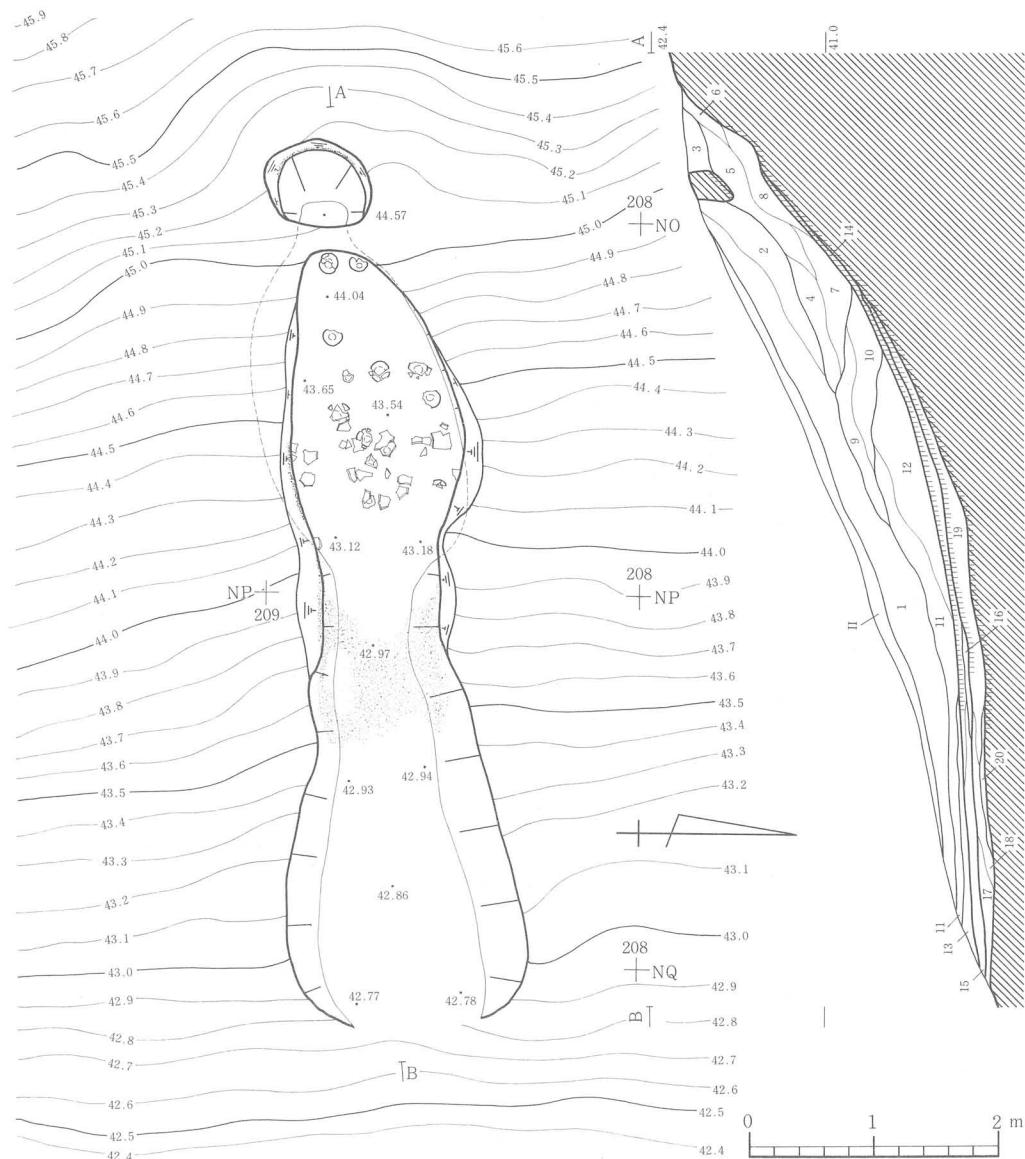
〔前庭部〕燃焼部の下方に位置するが、燃焼部との明瞭な境はない。壁は開き気味に立ち上がり、底面は平坦である。

〔堆積土〕堆積土は4層に大別される。1層(層No.1、2、3)は自然堆積層である。2層、3層、4層は天井、側壁の崩落土である。天井、側壁は段階を追って崩落したと考えられる。

3層の上部(層No.9)は灰白色火山灰

No.	土 色	土 性	備 考	大 別
1	にぶい黄褐色10YR ⁵ 4	砂質シルト	明黄褐色10YR ⁶ 6粘土を細かいブロック状に含。	自然堆積層
2	褐10YR ⁴ 6	砂質シルト	明黄褐色10YR ⁶ 6粘土を細かいブロック状に含。	
3	灰10YR ⁴ 4	砂質シルト		
4	暗赤褐色5YR ³ 6	粘 土		天井崩落土と自然堆積層の互層
5	にぶい赤褐色5YR ³ 4	砂質シルト	暗青灰10BG ⁴ 1粘土を少量含。	
6	暗青灰10BG ⁴ 1	粘 土		
7	褐7.5YR ⁴ 4	砂質シルト	明黄褐色10YR ⁶ 6粘土をブロック状に含。	天井崩落土
8	黄褐色10YR ⁵ 6	砂 質 粘 土	明黄褐色10YR ⁶ 6粘土を細かいブロック状に含。	
9	褐10YR ⁴ 6	シ ル ト	灰白色火山灰を層状に含。	
10	暗赤褐色5YR ³ 6	粘 土		天井崩落土
11	明褐色7.5YR ⁵ 6	砂 質 粘 土	褐10YR ⁴ 6砂質シルトを斑状に含。	
12	暗青灰10BG ⁴ 1	粘 土	暗赤褐色5YR ³ 6粘土をブロック状に含。	
13	褐7.5YR ⁴ 4	シ ル ト	炭化物を含。	灰 層
14	暗青灰10BG ⁴ 1	砂	層上部還元、下部酸化。	床面構築土
15	褐7.5YR ⁴ 4	粘 土	燒土をブロック状に含。	
16	暗褐色10YR ³ 3	シ ル ト	炭化物を多量に含。	
17	暗青灰10BG ⁴ 1	砂	層上部還元、下部酸化。	床面構築土
18	明褐色7.5YR ⁵ 6	粘 土	燒土をブロック状に含。	
19	褐7.5YR ⁴ 4	粘 土	燒土をブロック状に含。	
20	暗褐色10YR ³ 3	シ ル ト	炭化物を多量に含。	灰 層

第8表 1号窯跡堆積土



第16図 1号窯跡

層である。

〔中軸線の方向〕 S-84°-W

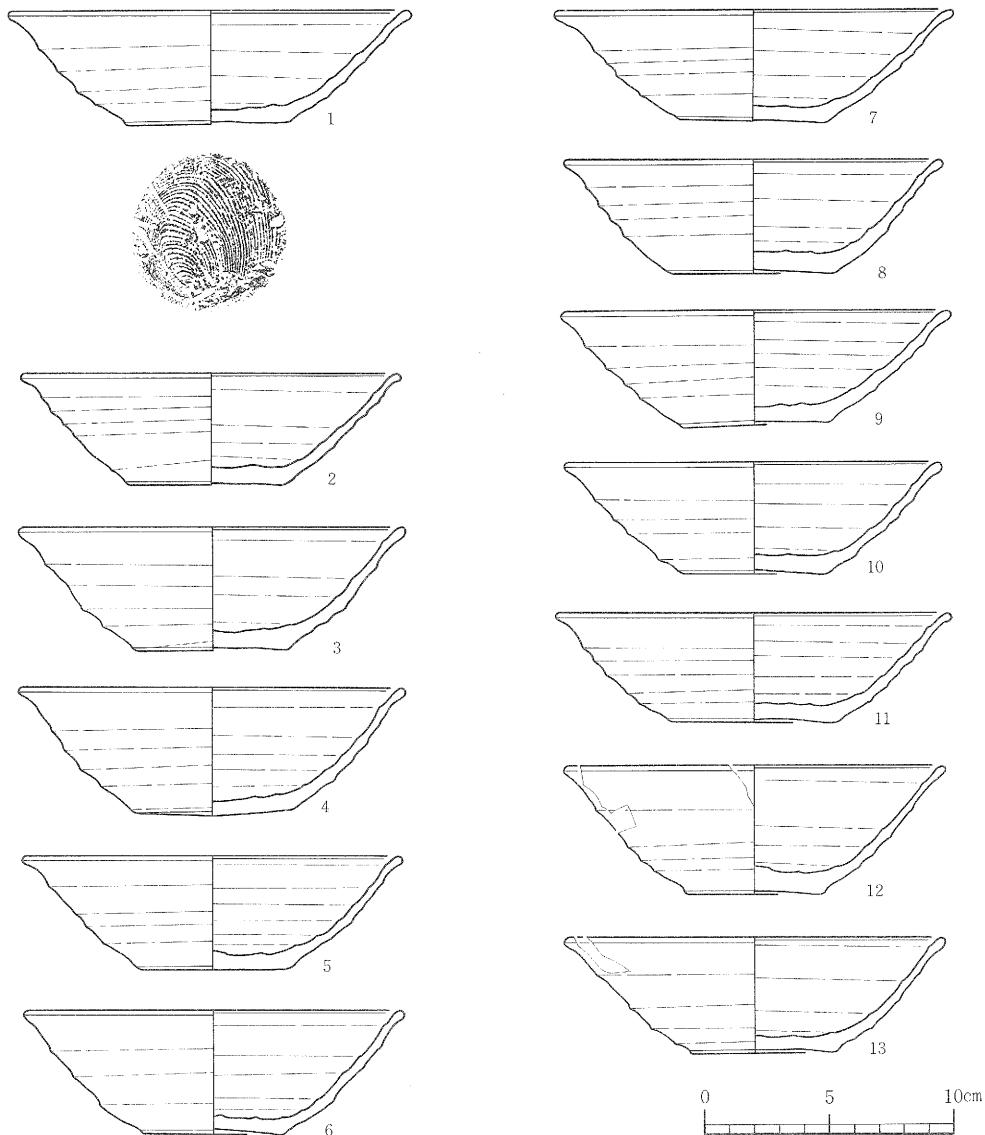
〔残存規模〕 全体——長さ7.2m、 最大幅1.9m、 最大深0.9m

煙道部——長さ0.7m、 底面幅0.3~0.4m、 残存高0.6m

焼成部——長さ3.2m、 底面幅0.5~1.6m、 残存高0.9m

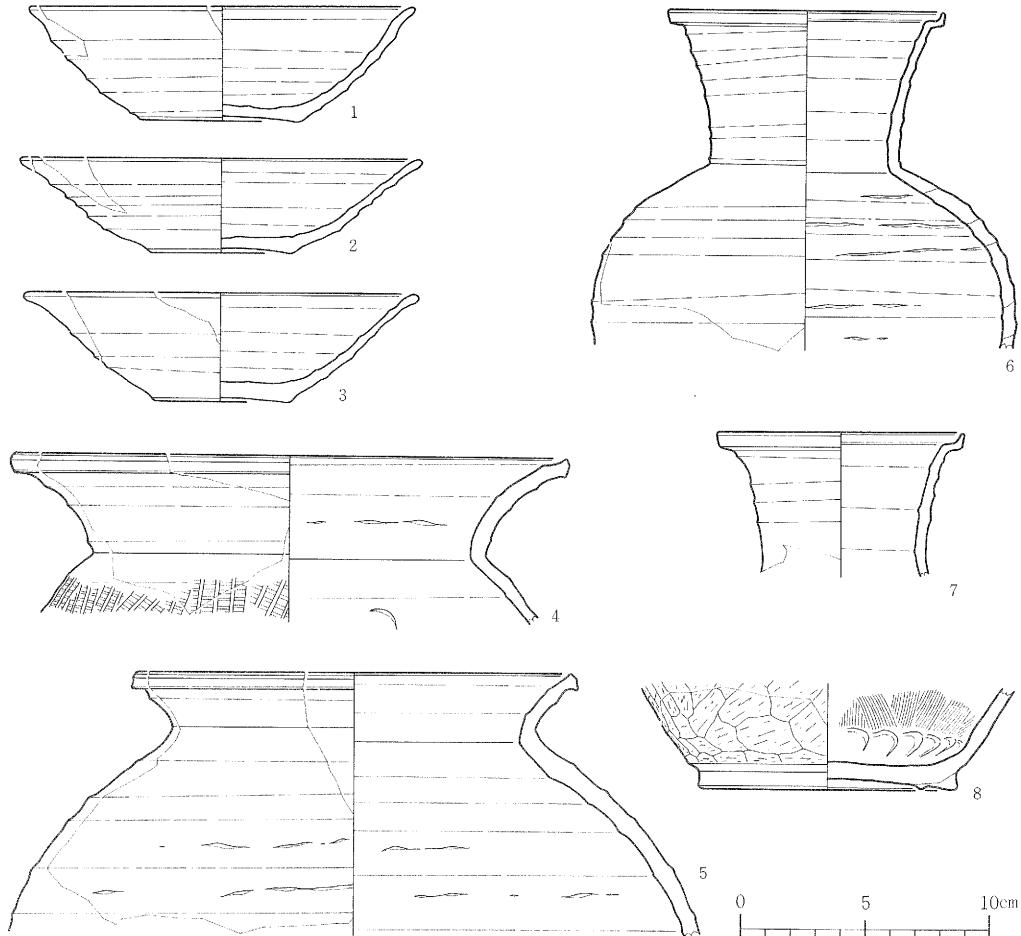
燃焼部——長さ0.8m、 底面幅0.5~0.7m、 残存高0.5m

前庭部——長さ2.5m、 底面幅0.7~1.2m、 残存高0.4m



No.	種別	層位	外面	底部	内面	口径・底径・器高(cm)	備考
1	須恵器坏	第1床面	ロクロナデ、黒褐10YR ³ ₂	回転糸切り	ロクロナデ、にぶい赤褐5YR ⁴ ₁	16.3・6.4・4.6	図版4-1
2	須恵器坏	第1床面	ロクロナデ、青灰10BG ² ₁	回転糸切り	ロクロナデ、色調外面と同じ	15.4・6.1・4.5	図版4-3
3	須恵器坏	第1床面	ロクロナデ、灰N ⁵ ₀	回転糸切り	ロクロナデ、緑灰10GY ⁵ ₁	15.6・6.0・5.0	図版4-4
4	須恵器坏	第1床面	ロクロナデ、暗青灰5B ¹ ₁	回転糸切り	ロクロナデ、赤灰2.5YR ⁴ ₁	15.6・6.1・5.2	
5	須恵器坏	第1床面	ロクロナデ、オリーブ灰2.5GY ⁵ ₁	回転糸切り	ロクロナデ、暗灰黄2.5Y ⁵ ₂	15.4・5.9・4.6	内面に火禪痕。
6	須恵器坏	第1床面	ロクロナデ、オリーブ灰2.5GY ⁵ ₁	回転糸切り	ロクロナデ、暗灰黄2.5Y ⁵ ₂	15.4・5.6・5.0	内面に火禪痕。
7	須恵器坏	第1床面	ロクロナデ、灰N ⁴ ₀	回転糸切り	ロクロナデ、にぶい赤褐5YR ⁵ ₄	16.1・5.8・4.5	図版4-2
8	須恵器坏	第1床面	ロクロナデ、灰N ⁴ ₀	回転糸切り	ロクロナデ、にぶい赤褐5YR ⁵ ₄	12.5・6.5・4.6	
9	須恵器坏	第1床面	ロクロナデ、暗青灰5B ³ ₁	回転糸切り	ロクロナデ、赤褐10R ⁴ ₃	15.7・5.9・4.6	
10	須恵器坏	第1床面	ロクロナデ、赤灰2.5YR ⁴ ₂	回転糸切り	ロクロナデ、色調外面と同じ	15.3・5.6・4.5	
11	須恵器坏	第1床面	ロクロナデ、暗青灰5PB ⁴ ₁	回転糸切り	ロクロナデ、明紫灰5RP ⁵ ₁	16.0・6.4・4.4	
12	須恵器坏	第1床面	ロクロナデ、灰N ⁴ ₀	回転糸切り	ロクロナデ、紫灰5RP ⁵ ₁	15.4・5.4・5.2	
13	須恵器坏	第1床面	ロクロナデ、暗青灰10BG ⁴ ₁	回転糸切り	ロクロナデ、にぶい赤褐2.5YR ⁵ ₄	15.4・5.8・4.7	

第17図 1号窯跡出土遺物(1)



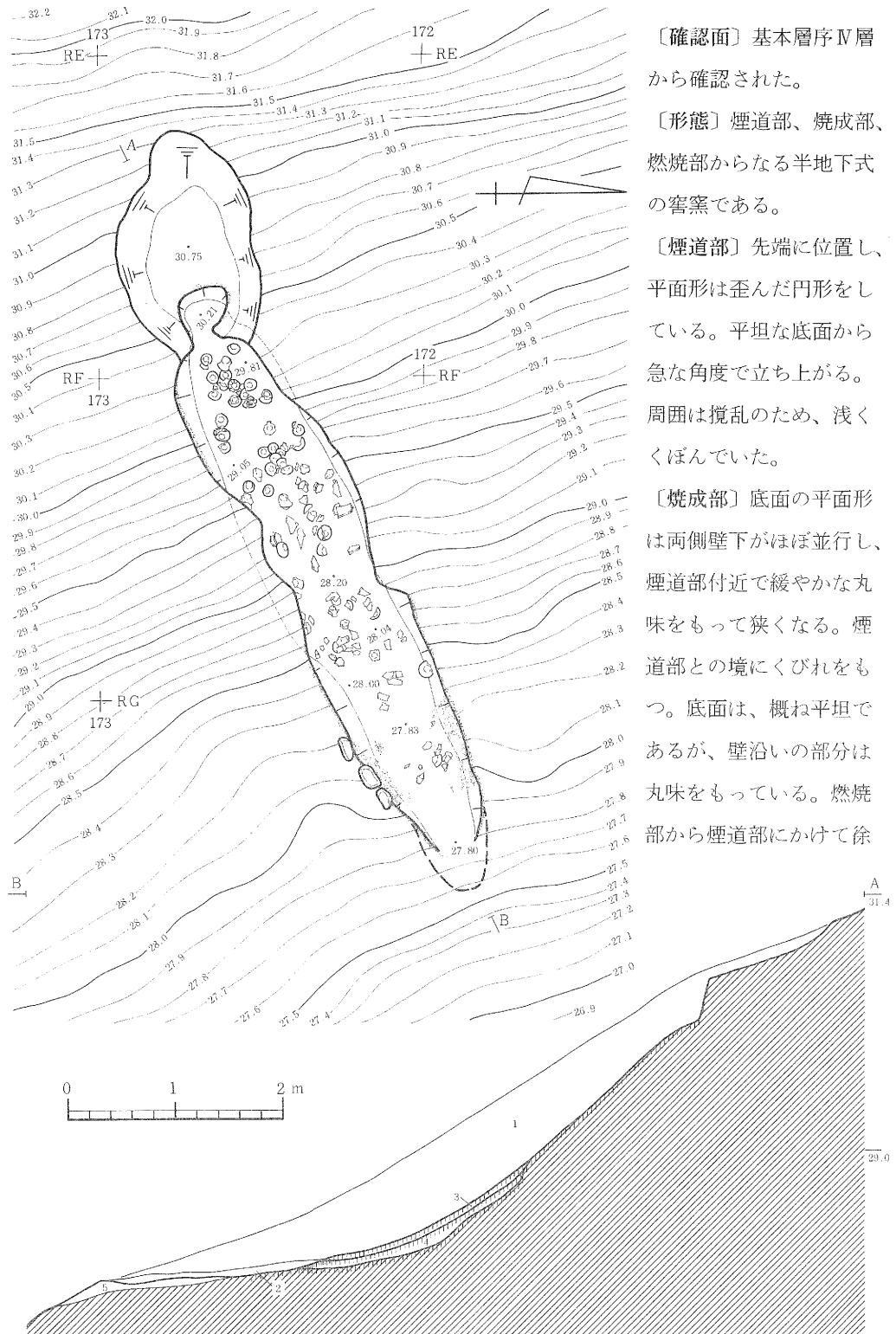
No.	種別	層位	外 面	底 部	内 面	口径・底径・器高(cm)	備 考
1	須恵器坏	第1床面	ロクロナデ、灰N ⁴ ₀	回転糸切り	ロクロナデ、灰10YR ⁵ ₁	15.6・6.4・4.6	
2	須恵器坏	第1床面	ロクロナデ、灰7.5Y ⁴ ₀	回転糸切り	ロクロナデ、にい赤褐2.5YR ⁵ ₄	16.2・5.6・3.8	
3	須恵器坏	第1床面	ロクロナデ、暗灰N ³ ₀	回転糸切り	ロクロナデ、にい赤褐2.5YR ⁵ ₃	16.0・5.4・4.4	
4	須恵器壺	灰原1層	ロクロナデ・印目、灰N ⁵ ₀	——	ロクロナデ、色調外面と同じ	22.6・——・——	焼台か?
5	須恵器壺	第1床面	ロクロナデ、灰N ⁵ ₀	——	ロクロナデ、灰赤2.5YR ⁴ ₂	18.0・——・——	
6	須恵器壺	灰原1層	ロクロナデ、灰N ⁵ ₀	——	ロクロナデ、灰N ⁴ ₀	11.2・——・——	図版4-5
7	須恵器壺	灰原1層	ロクロナデ、灰N ⁵ ₀	——	ロクロナデ、灰N ⁴ ₀	10.0・——・——	
8	須恵器壺	灰原1層	ロクロナデ・削り、灰N ⁶ ₀	削 り	ナデ・印目、灰N ⁶ ₀	*10.4・——	

第18図 1号窯跡出土遺物(2)

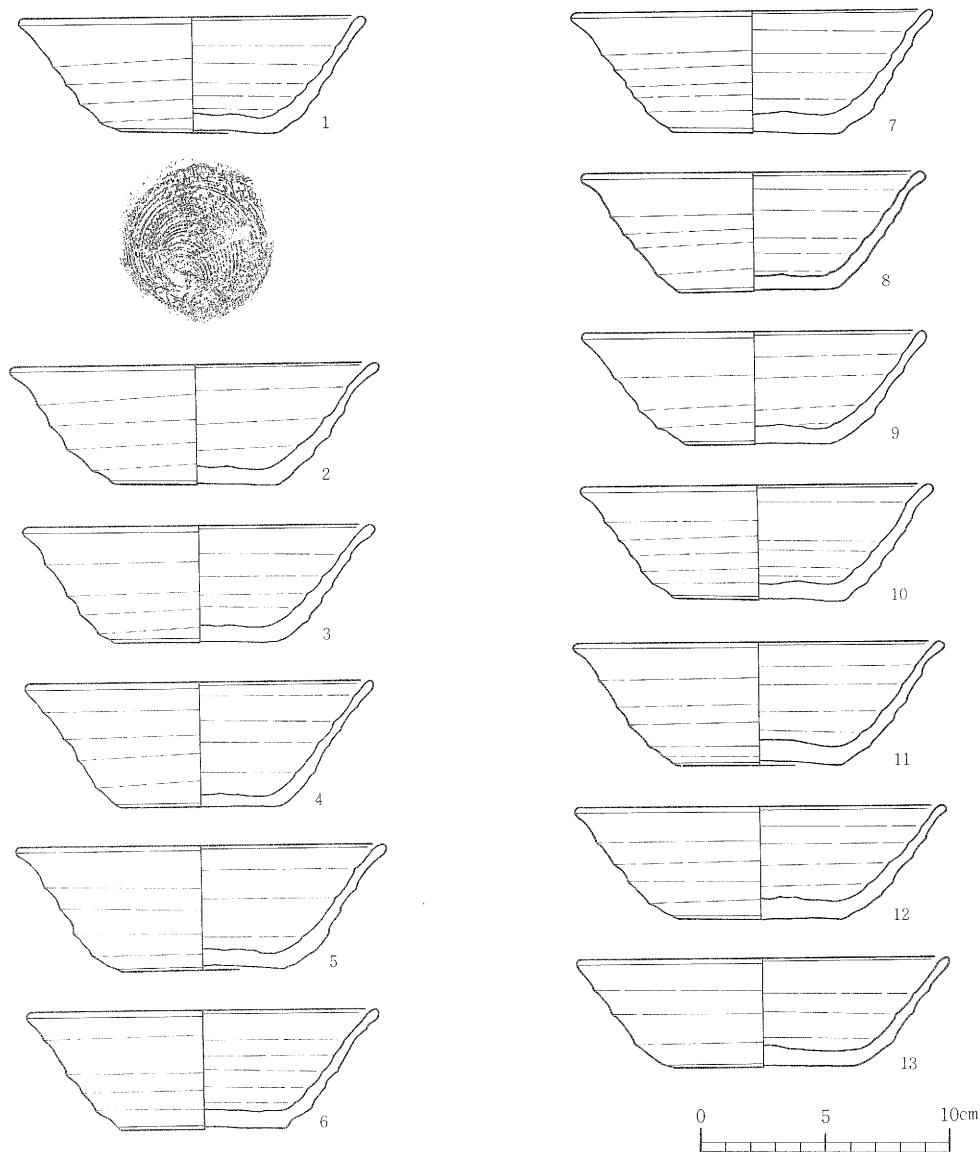
〔灰原〕窯跡の斜面下方から検出された。灰層は1層で、その上面から灰白色火山灰が検出された。

〔出土遺物〕焼成部各底面から須恵器坏、甕が、灰原から須恵器坏、甕、壺が出土した。焼成部から出土した坏は、そのほとんどが伏せた状態で検出された。

2号窯跡

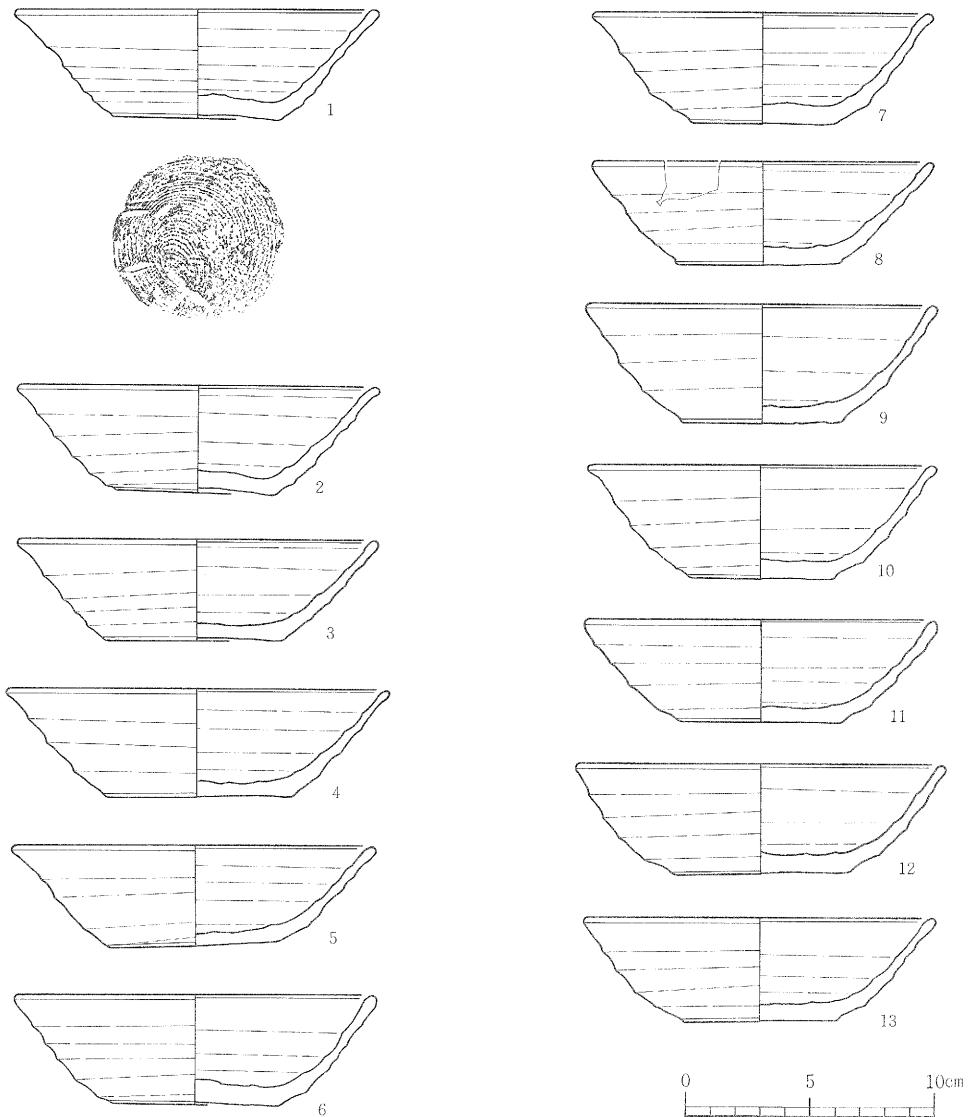


第19図 2号窯跡



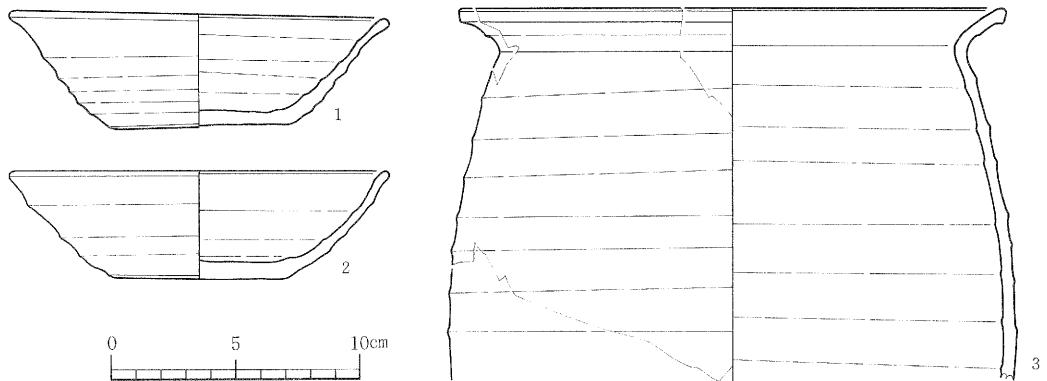
No.	種別	層位	外面	底部	内面	口径・底径・器高(cm)	備考
1	須恵器坏	第1床面	ロクロナデ、灰白10Y ⁷ 1	回転糸切り	ロクロナデ、色調外面と同じ	14.0・6.4・4.7	図版5-3
2	須恵器坏	第1床面	ロクロナデ、灰7.5Y ⁷ 1	回転糸切り	ロクロナデ、灰7.5Y ⁶ 1	14.8・6.5・4.8	
3	須恵器坏	第1床面	ロクロナデ、灰N ⁵ 0	回転糸切り	ロクロナデ、灰10Y ⁶ 1	14.2・6.5・4.7	
4	須恵器坏	第1床面	ロクロナデ、灰N ⁵ 0	回転糸切り	ロクロナデ、色調外面と同じ	14.0・6.5・5.0	
5	須恵器坏	第1床面	ロクロナデ、灰赤10Y ⁷ 1	回転糸切り	ロクロナデ、色調外面と同じ	14.9・6.6・5.0	
6	須恵器坏	第1床面	ロクロナデ、灰赤2.5YR ⁴ 2	回転糸切り	ロクロナデ、赤灰2.5YR ⁴ 1	14.2・6.4・4.8	
7	須恵器坏	第1床面	ロクロナデ、灰白10Y ⁷ 1	回転糸切り	ロクロナデ、色調外面と同じ	14.6・6.8・4.9	図版5-1
8	須恵器坏	第1床面	ロクロナデ、灰白N ⁵ 0	回転糸切り	ロクロナデ、灰N ⁵ 0	13.8・6.3・4.8	図版5-6
9	須恵器坏	第1床面	ロクロナデ、灰白N ⁷ 0	回転糸切り	ロクロナデ、色調外面と同じ	13.8・5.8・4.5	
10	須恵器坏	第1床面	ロクロナデ、灰白10Y ⁷ 1	回転糸切り	ロクロナデ、色調外面と同じ	14.2・6.8・4.7	図版5-2
11	須恵器坏	第1床面	ロクロナデ、灰10Y ³ 1	回転糸切り	ロクロナデ、灰白10Y ⁷ 1	15.0・6.6・5.0	
12	須恵器坏	第1床面	ロクロナデ、暗緑灰10G Y ³ 1	回転糸切り	ロクロナデ、色調外面と同じ	15.0・6.6・4.5	
13	須恵器坏	第1床面	ロクロナデ、灰10Y ³ 1	回転糸切り	ロクロナデ、灰7.5Y ³ 1	15.0・7.3・4.4	図版5-4

第20図 2号窯跡出土遺物(1)



No.	種別	層位	外 面	底 部	内 面	口径・底径・器高(cm)	備 考
1	須恵器環	第1床面	ロクロナデ、明青灰5B ² ₁	回転糸切り	ロクロナデ、青灰5B ³ ₁	14.7・6.8・4.4	
2	須恵器環	第1床面	ロクロナデ、灰N ⁵ ₀	回転糸切り	ロクロナデ、暗紺灰10G Y ³ ₁	14.6・6.4・4.3	内面に火葬痕。
3	須恵器環	第1床面	ロクロナデ、灰10Y ⁴ ₁	回転糸切り	ロクロナデ、灰110Y ⁷ ₁	14.4・7.0・4.1	外面に火葬痕。
4	須恵器環	第1床面	ロクロナデ、灰白10Y ⁷ ₁	回転糸切り	ロクロナデ、色調外面と同じ	13.3・7.4・4.4	
5	須恵器環	第1床面	ロクロナデ、灰N ⁵ ₀	回転糸切り	ロクロナデ、色調外面と同じ	14.7・6.7・4.1	
6	須恵器環	第1床面	ロクロナデ、灰10Y ⁴ ₁	回転糸切り	ロクロナデ、灰白10Y ⁷ ₁	14.6・6.6・4.5	
7	須恵器環	第1床面	ロクロナデ、綠灰7.5G Y ⁵ ₁	回転糸切り	ロクロナデ、灰白N ⁷ ₀	13.8・6.5・4.2	
8	須恵器環	第1床面	ロクロナデ、灰白N ⁷ ₀	回転糸切り	ロクロナデ、色調外面と同じ	13.7・5.8・4.5	
9	須恵器環	第1床面	ロクロナデ、灰10Y ³ ₁	回転糸切り	ロクロナデ、灰白10Y ⁷ ₁	14.2・6.4・4.8	
10	須恵器環	第1床面	ロクロナデ、灰N ⁵ ₀	回転糸切り	ロクロナデ、灰N ⁴ ₀	14.0・5.8・4.6	図版3-5
11	須恵器環	第1床面	ロクロナデ、灰10Y ⁴ ₁	回転糸切り	ロクロナデ、灰110Y ⁷ ₁	14.2・6.5・4.2	
12	須恵器環	第1床面	ロクロナデ、明オリーフ灰5G Y ³ ₁	回転糸切り	ロクロナデ、色調外面と同じ	15.0・6.9・4.5	
13	須恵器環	第1床面	ロクロナデ、暗紺灰10G Y ³ ₁	回転糸切り	ロクロナデ、灰10Y ⁴ ₁	14.2・6.2・4.2	

第21図 2号窯跡出土遺物(2)



No.	種別	層位	外 面	底 部	内 面	口径・底径・器高(cm)
1	須恵器坏	第2床面	ロクロナデ、灰10Y ⁵ 1	回転系切り	ロクロナデ、灰10Y ⁴ 1	15.4・7.1・4.6
2	須恵器坏	第3床面	ロクロナデ、明緑灰10G Y ⁸ 1	回転系切り	ロクロナデ、灰10Y ⁵ 1	15.4・7.0・4.4
3	須恵器甕	第3床面	ロクロナデ、明緑灰10G Y ⁸ 1	——	ロクロナデ、灰10Y ⁵ 1	22.0・——・——

第22図 2号窯跡出土遺物(3)

No.	土 色	土 性	備 考	大 別
1	——	——	天井崩落土上面に灰白色火山灰が堆積している。	窯内堆積土
2	暗褐色10YR ³ 3	シルト	炭化物を多量に含む。	灰 層
3	灰N ⁵ 0	粘 土	層上部灰N ⁵ 0粘土の還元、下部暗赤褐5YR ⁴ 4砂質ノルトの酸化。	床面構築土
4	灰N ⁵ 0	砂	層上部灰N ⁵ 0砂の還元、下部暗赤褐5YR ³ 4砂の酸化。	床面構築土
5	暗褐色10YR ³ 4	シルト	炭化物を多量に含む。	灰 層

第9表 2号窯跡堆積土

床面)。第3床面は窯跡掘り方底面である。第2床面は第3床面上の崩落土に砂を敷いて整地している。第1床面は第2床面と同様に構築している。側壁は内湾気味に立ち上がり天井へと続く。側壁と天井の境は明確ではない。焼成部から燃焼部にかけて、両側壁にスサ入り粘土が貼られている。また、その上部から、天井構築材の痕跡と考えられる径2cm前後の穴が7個確認された。全体に還元し、硬化している。

〔燃焼部〕 焼成部から緩くくびれて、わずかに狭くなるところから下方が燃焼部である。底面は、概ね平坦で、側壁は急な角度で立ち上がる。底面、側壁とも火熱をうけている。

〔堆積土〕 堆積土は2層に大別される。1層は自然堆積層である。2層は天井、側壁の崩落土である。2層の上面には灰白色火山灰が堆積している。

〔中軸線の方向〕 S-65°-W

〔残存規模〕 全 体——長さ 5.7m、 最大幅 1.1m、 最大深 0.8m

煙道部——長さ 0.4m、 底面幅 0.3~0.4m、 残存高 0.4m

焼成部——長さ 3.8m、 底面幅 0.5~1.1m、 残存高 0.8m

燃焼部——長さ 1.5m、 底面幅 0.4~0.8m、 残存高 0.4m

〔灰原〕 検出されなかった。

徐に傾斜を強めている。傾斜角は27°~42°ほどである。使用された底面は3面確認された(確

認順に、上から第1、第2、第3

〔出土遺物〕焼成部各底面から須恵器坏、甕が出土した。そのほとんどは坏である。出土した坏は、逆さに伏せた状態で検出された。

3号窯跡

〔確認面〕基本層序Ⅳ層から確認された。

〔形態〕焼成部、燃焼部、前庭部が残存する半地下式の窯跡である。

〔焼成部〕底面の平面形は両側壁下がほぼ並行し、煙道部付近で緩やかな丸味をもって狭くなる。底面は、概ね平坦であるが、壁沿いの部分は丸味をもっている。燃焼部から煙道部にかけて徐々に傾斜を強めている。傾斜角は $20^{\circ} \sim 30^{\circ}$ ほどである。使用された底面は3面確認された(確認順に、上から第1、第2、第3床面)。第3床面は窯跡掘り方底面である。第2床面

は第3床面上の崩落土に砂と粘土を敷いて整地している。第1床面は第2床面と同様に構築している。側壁は内湾気味に立ち上がり天井へと続く。側壁と天井の境は明瞭ではない。全体に還元し、硬化している。

〔燃焼部〕平面形は焼成部からそのまま移行し、両側壁が並行する長方形である。底面は、概ね平坦で、側壁は急な角度で立ち上がる。焚口には両側壁に石を組み、粘土で貼り付け、壁面を強化している。底面、側壁とも火熱をうけている。

〔前庭部〕燃焼部の下方に位置する。燃焼部との境は25cm前後の比高差をもって分けられる。底面は平坦に整地されており、溝やピットが検出されている。

〔堆積土〕堆積土は2層に大別される。1層は自然堆積層である。2層は天井、側壁の崩落土である。2層の上部には灰白色火山灰を含むシルト層が堆積している。

〔中軸線の方向〕N-44°-W

〔残存規模〕全 体——長さ 6.5m、 最大幅 1.7m、 最大深 0.8m

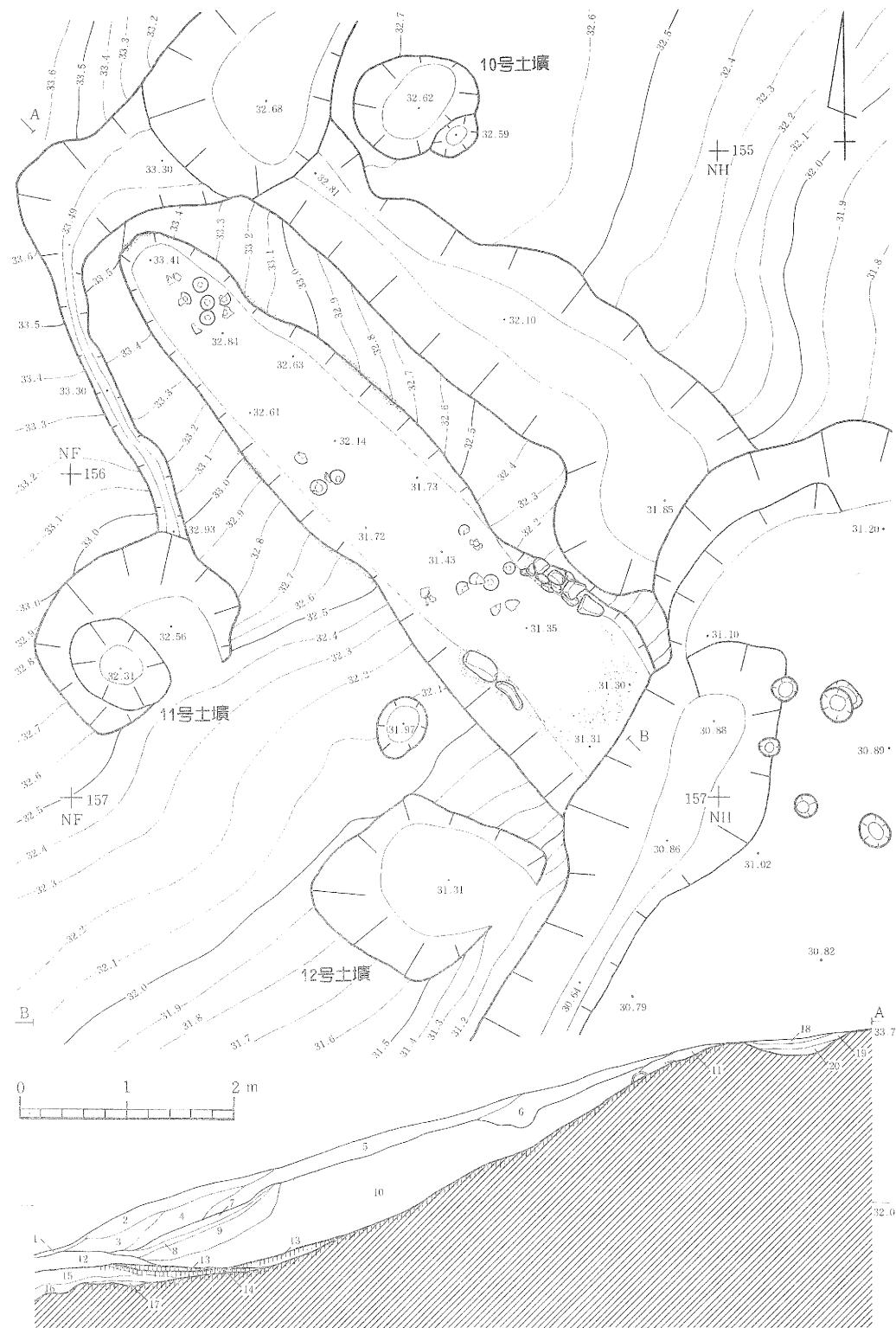
 焼成部——長さ 5.2m、 底面幅 0.4~1.0m、 残存高 0.8m

 燃焼部——長さ 1.3m、 底面幅 0.8~1.0m、 残存高 0.7m

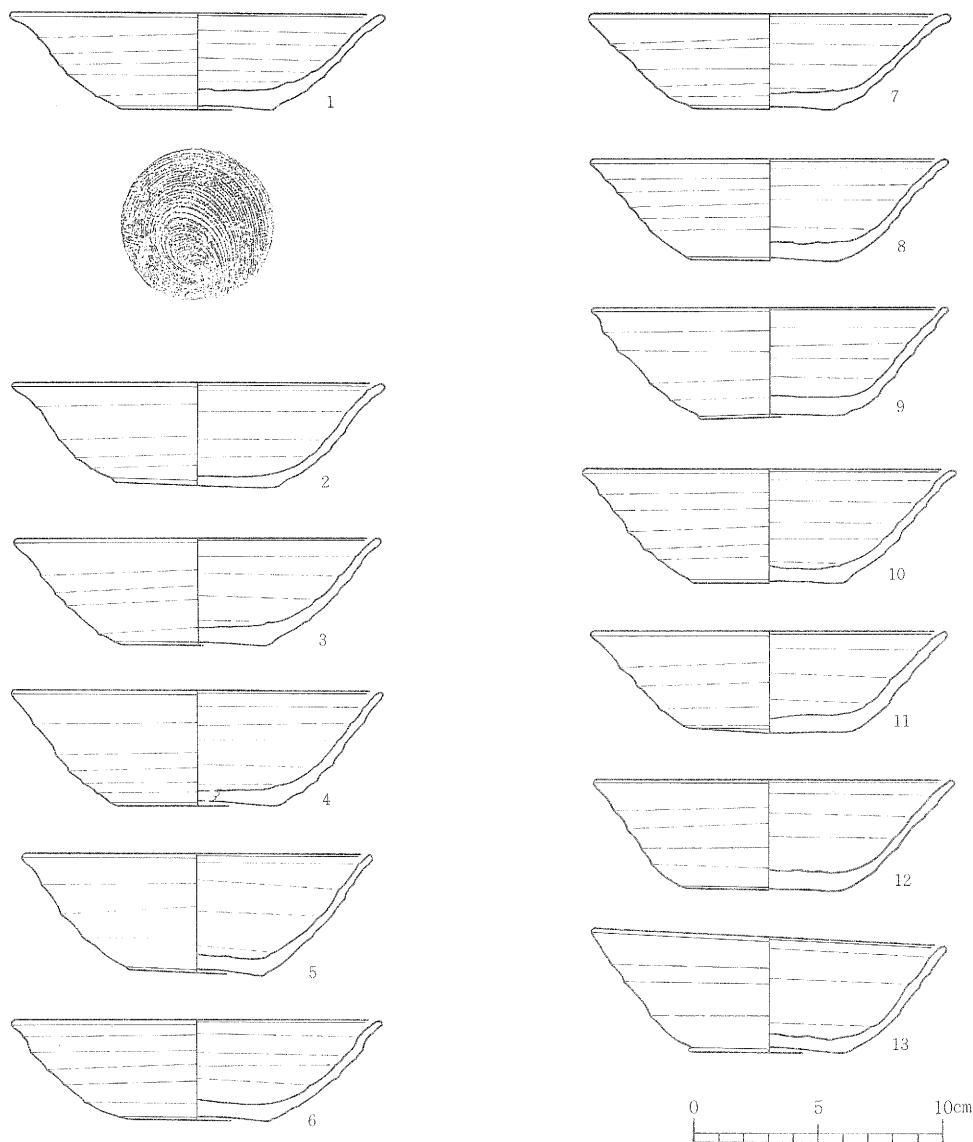
〔灰原〕窯跡の斜面下方から検出された。堆積範囲は極めて広く、3層に大別される。3層とも多量の遺物を包含していた。

No.	土 色	土 性	備 考	大 別
1	黒10YR ^{1.7} 1	シ ル ト	炭化物、粘土化した灰白色火山灰を少量含。	自然堆積層
2	黒褐10YR ² 2	シ ル ト	少量の炭化物を含。	
3	黒10YR ^{1.7} 1	シ ル ト	少量の炭化物を含。	
4	暗褐10YR ³ 3	シ ル ト	少量の炭化物を含。	
5	明黄褐10YR ⁶ 6	シ ル ト	少量の鐵土を含。	
6	暗赤褐2.5YR ³ 4	シ ル ト	壁、天井の崩落土を含。	
7	灰白2.5YR ³ 4	シ ル ト	灰白色火山灰(二次堆積)。	
8	灰黃褐10YR ⁴ 2	シ ル ト		
9	黃褐10YR ⁵ 8	粘 土	多量の燒土を含。	
10	褐7.5YR ⁴ 6	粘 土	暗青灰10BG ⁴ 1粘土を多量に含。	天井崩落土
11	褐10YR ⁴ 6	砂質シルト	少量の炭化物を含。	
12	黒10YR ² 1	シ ル ト	多量の炭化物を含。	
13	褐7.5YR ⁴ 6	砂	暗青灰10BG ⁴ 1粘土を含。	床面整地層
14	褐10YR ³ 4	粘 土		床面整地層
15	黒10YR ² 1	シ ル ト	多量の炭化物、燒土を含。	灰 層
16	黒10YR ^{1.7} 1	シ ル ト	多量の炭化物を含。	
17	褐10YR ⁴ 4	砂		自然堆積層
18	褐10YR ⁴ 4	シ ル ト		
19	暗褐10YR ³ 3	砂質シルト	微量の炭化物、燒土を含。	
20	暗褐10YR ³ 4	砂質シルト	微量の炭化物、燒土を含。	

第10表 3号窯跡堆積土

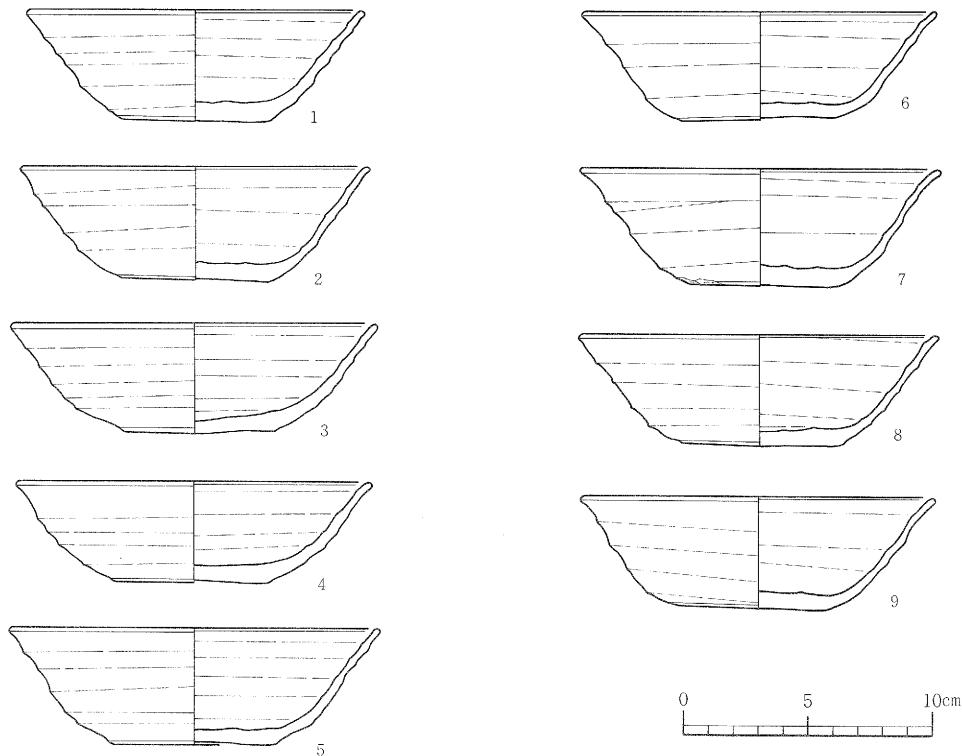


第23図 3号窯跡



No.	種別	脚位	外 面	底 部	内 面	口徑・底径・器高(cm)	備 考
1	須恵器环	層No.8	ロクロナゲ、灰N ⁶ ₀	回転糸切り	ロクロナゲ、色調外面と同じ	15.1×6.6×4.2	
2	須恵器环	層No.8	ロクロナゲ、灰N ⁶ ₀	回転糸切り	ロクロナゲ、灰白10G Y ⁸ ₁	15.1×6.1×3.9	
3	須恵器环	層No.8	ロクロナゲ、灰N ⁵ ₀	回転糸切り	ロクロナゲ、色調外面と同じ	14.8×5.8×4.4	
4	須恵器环	層No.8	ロクロナゲ、灰白10Y ⁸ ₁	回転糸切り	ロクロナゲ、色調外面と同じ	15.0×6.4×4.7	
5	須恵器环	層No.8	ロクロナゲ、灰N ⁴ ₀	回転糸切り	ロクロナゲ、緑灰10G Y ⁵ ₁	14.2×5.4×4.9	
6	須恵器环	第1床面	ロクロナゲ、灰白N ⁷ ₀	回転糸切り	ロクロナゲ、色調外面と同じ	15.0×5.7×4.1	図版6-4
7	須恵器环	第1床面	ロクロナゲ、灰白7.5Y ⁷ ₁	回転糸切り	ロクロナゲ、色調外面と同じ	14.6×5.8×3.9	
8	須恵器环	第1床面	ロクロナゲ、灰N ⁴ ₀	回転糸切り	ロクロナゲ、緑灰10G Y ⁵ ₁	14.5×6.0×4.1	
9	須恵器环	第1床面	ロクロナゲ、灰N ⁴ ₀	回転糸切り	ロクロナゲ、青灰10B G ⁵ ₁	14.4×5.8×4.5	図版6-3
10	須恵器环	第1床面	ロクロナゲ、緑灰7.5G Y ⁸ ₁	回転糸切り	ロクロナゲ、灰白N ⁷ ₀	15.2×6.0×4.6	
11	須恵器环	第1床面	ロクロナゲ、緑灰10G Y ⁵ ₁	回転糸切り	ロクロナゲ、緑灰10G Y ⁶ ₁	14.4×6.6×4.2	図版6-6
12	須恵器环	第1床面	ロクロナゲ、灰N ⁵ ₀	回転糸切り	ロクロナゲ、青灰10B G ⁵ ₁	14.6×6.1×4.4	
13	須恵器环	第1床面	ロクロナゲ、灰N ⁶ ₀	回転糸切り	ロクロナゲ、色調外面と同じ	14.4×6.1×4.7	図版6-3

第24図 3号窯跡出土遺物(1)



No.	種別	層位	外 面	底 部	内 面	口徑・底径・器高(cm)	備 考
1	須恵器坏	第1床面	ロクロナデ、緑灰10G ⁵ 1	回転糸切り	ロクロナデ、色調外面と同じ	13.6・6.0・4.5	
2	須恵器坏	第1床面	ロクロナデ、緑灰10G Y ⁵ 1	回転糸切り	ロクロナデ、緑灰10G Y ⁶ 1	14.1・6.0・4.6	図版6-2
3	須恵器坏	第1床面	ロクロナデ、灰N ⁵ 0	回転糸切り	ロクロナデ、色調外面と同じ	14.8・6.1・4.5	
4	須恵器坏	第2床面	ロクロナデ、暗青灰3B ⁴ 1	回転糸切り	ロクロナデ、赤灰2.5YR ⁵ 1	14.4・6.1・4.1	
5	須恵器坏	第2床面	ロクロナデ、暗緑灰10G Y ⁴ 1	回転糸切り	ロクロナデ、青灰10BG ⁵ 1	15.0・6.7・5.7	
6	須恵器坏	第2床面	ロクロナデ、暗緑灰10G Y ⁴ 1	回転糸切り	ロクロナデ、色調外面と同じ	14.3・6.2・4.3	
7	須恵器坏	第2床面	ロクロナデ・削り、灰N ⁵ 0	回転糸切り	ロクロナデ、青灰5BG ⁵ 1	14.6・5.9・4.7	
8	須恵器坏	第3床面	ロクロナデ、黒褐5YR ³ 1	回転糸切り	ロクロナデ、赤褐10R ⁴ 3	14.5・6.3・4.5	図版6-1
9	須恵器坏	第3床面	ロクロナデ、暗緑灰10G Y ⁴ 1	回転糸切り	ロクロナデ、色調外面と同じ	14.4・5.8・4.5	

第25図 3号窯跡出土遺物(2)

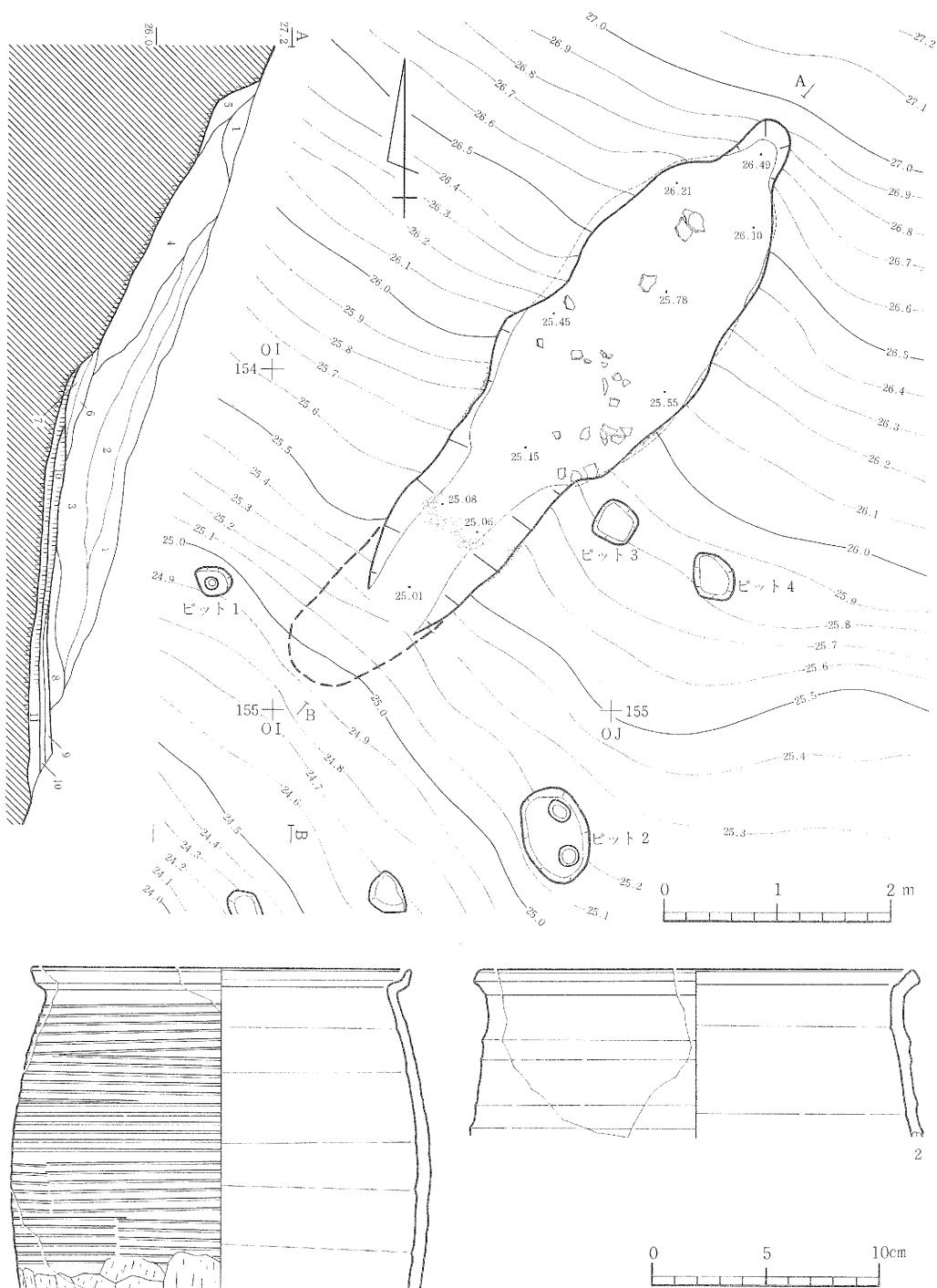
〔周囲の状況〕 窯跡を「ㄣ」形に囲む溝が検出された。幅2.00~0.22m、深さ5~50cmで、断面は「ㄣ」形である。

〔出土遺物〕 焼成部各底面から須恵器坏、甕が、灰原から須恵器坏、甕、壺、土師器坏、甕が出土した。焼成部から出土した遺物は、そのほとんどが坏である。坏は逆さまに伏せた状態で検出された。

三 4号窯跡

〔確認面〕 基本層序Ⅳ層から確認された。

〔形態〕 煙道部、焼成部、燃焼部からなる半地下式の窯窓である。



No.	種別	層位	外 面	低部	内 面	備 考
1	須恵器窯	第1床面	ロクロナデ、回転ハゲメ・割り、灰7.5Y6/1	---	ロクロナデ、色調外面と同じ。	焼台に使用
2	須恵器窯	第1床面	ロクロナデ、灰白7.5Y7/1	---	ロクロナデ、色調外面と同上。	

第26図 4号窯跡と出土遺物

〔煙道部〕先端に位置し、平面形は「へ」形をしている。平坦な底面から急な角度で立ち上がる。

〔焼成部〕底面の平面形は煙道部に近づくにつれて、緩やかな丸味をもって徐々に狭くなり、煙道部との境でくびれている。底面は、概ね平坦であるが、壁沿いの部分は丸味をもっている。燃焼部から煙道部にかけて徐々に傾斜を強めている。傾斜角は $12^\circ \sim 33^\circ$ ほどである。使用された底面は3面確認された(確認順に、上から第1、第2、第3床面)。第3床面は窯跡掘り方底面である。底面には地山に含まれている礫が露出している。第2床面は第3床面上の崩落土に砂を敷いて整地している。第1床面は第2床面と同様に構築している。側壁は内湾気味に立ち上がり天井へと続く。側壁と天井の境は明瞭ではない。全体に還元し、硬化している。

〔燃焼部〕焼成部からくびれて狭くなるところから下方が燃焼部である。底面は、概ね平坦で、側壁は急な角度で立ち上がる。底面、側壁とも火熱を受けている。

〔堆積土〕堆積土は3層に大別される。1層(層No.1、2、3)は自然堆積層である。2層(層No.4)は天井、側壁の崩落土である。3層(層No.5、6、7)は天井崩落前の自然流入土である。1号、2号、3号、5号、6号窯跡の堆積土中にみられた灰白色火山灰は、本窯跡堆積土中には認められなかった。

〔中軸線の方向〕N-39°-E

〔残存規模〕全 体——長さ 5.6m、 最大幅 1.6m、 最大深 0.7m

煙道部——長さ 0.5m、 底面幅 0.2~0.4m、 残存高 0.3m

焼成部——長さ 3.3m、 底面幅 0.5~1.6m、 残存高 0.7m

燃焼部——長さ 1.8m、 底面幅 0.5~0.6m、 残存高 0.5m

〔灰原〕窯跡の斜面下方から検出された。灰原は3層に分けられる。1層は灰層で遺物を含む。2層は黄褐色砂質粘土で、基本層序IV層に近似する。3層は褐色のシルト層で、上部に灰白色火山灰層が認められる。

〔周囲の状況〕4個のピットが検出された。

〔出土遺物〕焼成部各底面、および灰原1層から須恵器甕が出土した。

No.	土 色	土 性	備 考	大 別
1	褐10YR ⁴ ₄	シ ル ト	少量の炭化物、焼土を含。	
2	に ぶ い 黄褐10YR ⁴ ₃	シ ル ト	微量の炭化物、少量の焼土を含。	自然堆積層
3	暗褐10YR ³ ₃	シ ル ト	少量の炭化物、焼土を含。	
4	に ぶ い 赤褐5YR ⁴ ₄	粘 土	暗青灰10BG ⁴ ₁ 粘土をプロック状に含。	天井崩落土
5	褐10YR ⁴ ₄	シ ル ト	少量の炭化物を含。	
6	褐7.5YR ⁴ ₄	シ ル ト	に ぶ い 赤褐5YR ⁴ ₄ 砂を細かいプロック状に含。	自然堆積層
7	に ぶ い 黄褐10YR ⁴ ₃	粘土質シルト	に ぶ い 赤褐5YR ⁴ ₄ 砂をプロック状に含。少量の炭化物を含。	
8	黄褐10YR ⁵ ₆	粘土質シルト	炭化物を含。	灰 層
9	黑褐10YR ³ ₂	シルト質粘土	炭化物を含。に ぶ い 黄褐10YR ⁴ ₃ 粘土を細かい、プロック状に含。	床面構築土
10	暗青灰10BG ⁴ ₁	砂	層上部還元、下部酸化。	
11	青灰10BG ⁵ ₁	砂	層上部還元、下部酸化。	床面構築土

第11表 4号窯跡堆積土

5号窯跡

〔確認面〕基本層序IV層から確認された。

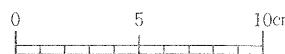
〔形態〕煙道部、焼成部、燃焼部からなる半地下式の窯窓である。

〔煙道部〕先端に位置し、平面形は「へ」形をしている。上部に径44cm、深さ12cmの円形のくぼ

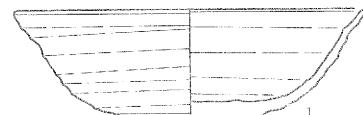
みが確認された。平坦な底面から急な角度で立ち上がる。

〔焼成部〕底面の平面形は煙道部に近づくにつれて、緩やかな丸味をもって徐々に狭くなり、煙道部との境でくびれている。底面は、概ね平坦であるが、壁沿いの部分は丸味をもっている。燃焼部から煙道部にかけて徐々に傾斜を強めている。傾斜角は $14^{\circ} \sim 31^{\circ}$ ほどである。使用された底面は3面確認された(確認順に、上から第1、第2、第3床面)。第3床面は窯跡掘り方底面である。第2床面は第3床面上の崩落土に砂を敷いて整地している。第1床面は第2床面と同様に構築している。第1床面の焼成部下半に、壁に沿って溝が検出された。溝は幅14~22cm、深さ2~6cmである。側壁は内湾

気味に立ち上がり天井へと続く。

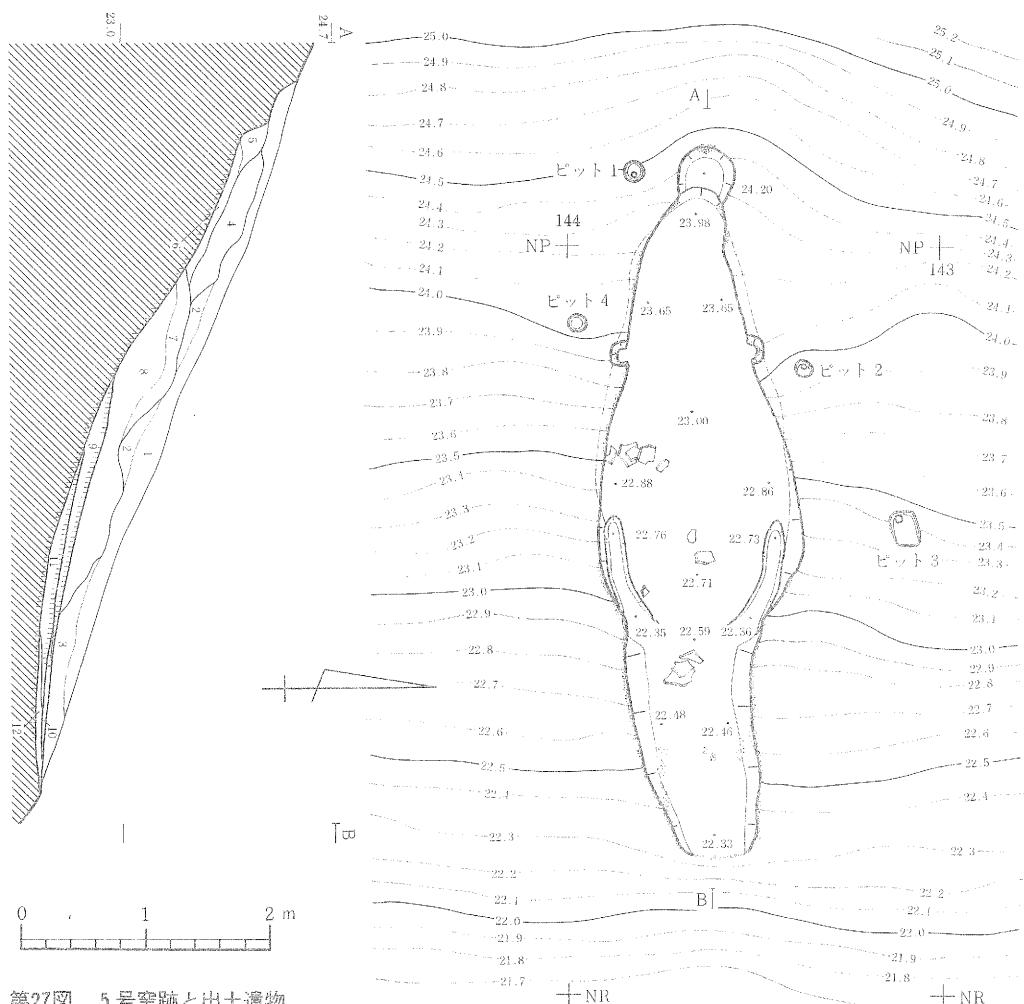


側壁と天井の境は明瞭ではない。



全体に還元し、硬化している。

No.	種別	部位	外 面	底 部	内 面
1	須恵器外 確認面		ロクロナゲ、灰X ⁵ g	回転条切り	ロクロナゲ、オリーブK2.5G Y ⁵ g



第27図 5号窯跡と出土遺物

No.	土色	土性	備考	大別
1	にぶい、黄褐10YR ⁵ ₄	粘土質シルト	微量の炭化物、焼土を含。	
2	にぶい、黄褐10YR ⁵ ₃	シルト	明黄褐10YR ⁶ ₆ 粘土を細かいブロック状に含。	自然堆積層
3	褐7.5YR ⁴ ₄	砂質シルト		
4	明黄褐10YR ⁶ ₆	粘土	多量の焼土をブロック状に含。	
5	黄褐10YR ⁵ ₆	砂質シルト	少量の炭化物、焼土を含。	天井崩落土
6	にぶい、赤褐5YR ⁴ ₄	砂質シルト	暗赤褐5YR ³ ₆ の焼土、焼石、青灰10BG51粘土を含。	
7	灰白10YR ⁸ ₂	粘土質シルト	灰白色火山灰を斑状に含。	
8	にぶい、赤褐5YR ⁴ ₄	粘土	焼土、焼石、青灰10BG ⁵ ₁ 粘土を多量に含。	天井崩落土
9	暗青灰10BG ⁴ ₁	砂	層上部還元、下部酸化	床面構築土
10	暗褐10YR ³ ₃	シルト	炭化物、明黄褐10YR ⁶ ₆ 粘土を含。	灰層
11	暗青灰10BG ⁴ ₁	砂	層上部還元、下部酸化。	床面構築土
12	暗褐10YR ³ ₃	シルト	炭化物、明黄褐10YR ⁶ ₆ 粘土を含。	灰層

第12表 5号窯跡堆積土

平坦で、側壁は急な角度で立ち上がる。底面、側壁とも火熱を受けている。

〔堆積土〕 堆積土は4層に大別される。1層(層No.1、2、3)は自然堆積層である。2層(層No.4)、4層(層No.7、8)は天井、側壁の崩落土である。3層(層No.5、6)は天井崩落前の自然流入土である。天井、側壁は段階を追って崩落したと考えられる。4層の上部(層No.7)は灰白色火山灰層である。

〔中軸線の方向〕 S-89°-W

〔残存規模〕 全体——長さ 5.7m、 最大幅 1.6m、 最大深 0.6m

煙道部——長さ 0.5m、 底面幅 0.2~0.4m、 残存高 0.3m

焼成部——長さ 3.5m、 底面幅 0.4~1.5m、 残存高 0.6m

燃焼部——長さ 1.7m、 底面幅 0.4~0.7m、 残存高 0.3m

〔灰原〕 検出されなかった。

〔周囲の状況〕 4個のピットが検出された。

〔出土遺物〕 焼成部各底面から須恵器甕が、確認面から須恵器壺が出土した。

8号窯跡

〔確認面〕 基本層序Ⅱ層から確認された。

〔形態〕 煙道部、焼成部、燃焼部からなる地下式窯である。

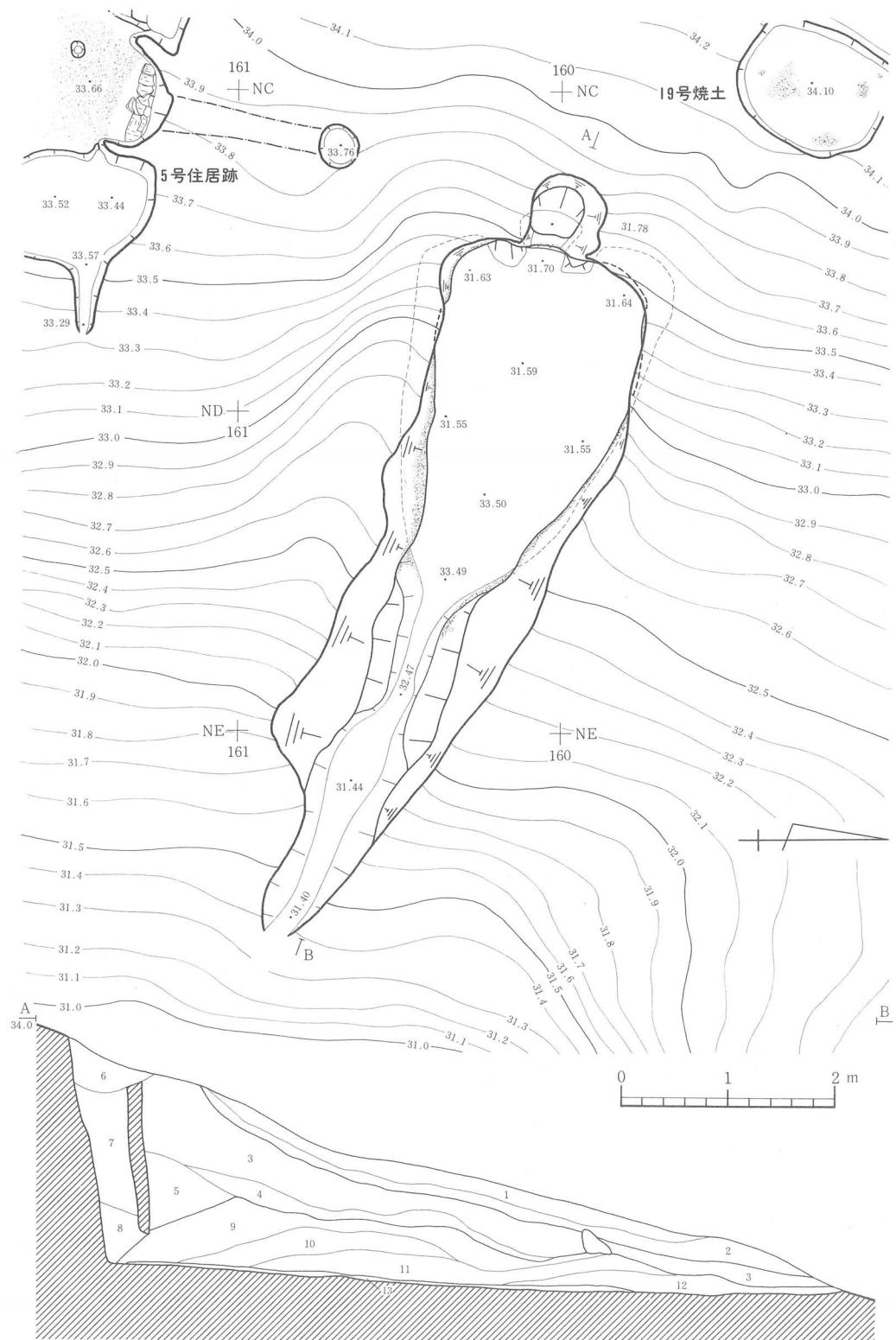
〔煙道部〕 先端に位置し、径49cmの円形である。平坦な底面から急な角度で立ち上がる。上部は崩落している。

また、本窯跡の確認面で、焼成部中央の両側壁上部に1対のピットが検出された。ピットは1辺約20cmの隅丸方形で、焼成部内部に貫通している。

〔燃焼部〕 焼成部からくびれて狭くなるところから下方が燃焼部である。底面は、概ね

No.	土色	土性	備考	堆積範囲
1	にぶい、黄褐10YR ⁵ ₃	シルト	黄褐10YR ⁵ ₆ 粘土質シルトを塊状に含。多量の炭化物を含。	1層
2	褐10YR ⁴ ₄	粘土質シルト	少量の炭化物を含。	
3	にぶい、黄褐10YR ⁵ ₃	粘土質シルト	褐10YR ⁴ ₄ 粘土質シルトを粒状に含。少量の炭化物を含。	
4	にぶい、黄褐10YR ⁵ ₄	粘土質シルト	少量の炭化物、焼土を含。	
5	にぶい、黄褐10YR ⁵ ₄	粘土質シルト	層No.4にくらべ粘性がやや弱い。少量の炭化物、焼土を含。	2層
6	暗褐10YR ³ ₃	シルト	板状の礫(250×200×50mm前後)を含。	(天井崩落土)
7	暗褐10YR ³ ₃	シルト	少量の炭化物を含。	
8	にぶい、赤褐5YR ⁴ ₄	シルト	多量の焼土粒、炭化物を含。	
9	褐10YR ⁴ ₄	粘土質シルト	黄褐10YR ⁵ ₆ 粘土質粘土を粒状に含。多量の炭化物、焼土を含。	
10	にぶい、黄褐10YR ⁵ ₄	シルト	灰黄褐10YR ⁵ ₂ 砂質シルトを斑状に含。少量の炭化物、焼土を含。	3層 (天井崩落土)
11	にぶい、赤褐5YR ⁴ ₄	シルト	灰黄褐10YR ⁵ ₂ 砂質シルトを斑状に含。多量の炭化物を含。	
12	黒褐10YR ² ₃	シルト質粘土	明黄褐10YR ⁶ ₆ 粘土を塊状に含。多量の炭化物、焼土を含。	
13	黒N ¹ ₅	シルト	炭化物層。	4層

第13表 8号窯跡堆積土



第28図 8号窯跡

〔焼成部〕底面の平面形は縦に長い逆三角形である。底面は平坦であるが、燃焼部から焼成部にかけてわずかに傾斜している。断面はドーム形をしている。側壁は内湾気味に立ち上がり天井へと続く。側壁と天井の境は明瞭ではない。底面、側壁とも火熱を受けている。

〔燃焼部〕焼成部からくびれて狭くなるところから下方が燃焼部である。底面は平坦で、側壁は急な角度で立ち上がる。底面、側壁とも火熱を受けている。

〔その他の施設〕燃焼部から斜面下方にのびる溝が検出された。長さ2.40m、幅36~68cmである。底面レベルは斜面下方に進むにつれて、徐々に低くなる。

〔堆積土〕堆積土は4層に大別される。1層(層No.1、2)は自然堆積層である。2層(層No.3、4、5、6、7、8)、3層(層No.9、10、11)は天井の崩落土である。4層(層No.12)、5層(層No.13)は炭化物層である。

〔中軸線の方向〕N-71°-W

〔残存規模〕全 体——長さ 5.1m、 最大幅 2.4m、 最大深 1.9m

煙道部——長さ 0.6m、 底面幅 0.4~0.6m、 残存高 1.9m

焼成部——長さ 3.3m、 底面幅 0.4~1.9m、 残存高 1.7m

燃焼部——長さ 1.2m、 底面幅 0.3~0.4m、 残存高 0.5m

〔出土遺物〕煙道部堆積土から須恵器甕の破片が1点出土している。

4. 粘土採掘坑跡

粘土採掘坑跡は調査区東側、標高23~29mの南に面する斜面に6基確認された(第4図)。それらはトンネル状に掘られたもの(1、5号粘土採掘坑跡)と地山を削り取った、土取り状のもの(2、3、4、6号粘土採掘坑跡)があり、その規模も一定していない。

最も保存の良好な5号粘土採掘坑跡は、長軸約16m、短軸約4.5mの橢円形で、深さは4m以上である。北半と南半の底面は1.5m前後の比高差があり、2段階に採掘されたものと考えられる。壁は基本層序Ⅳ層、Ⅵ層、と砂層が互層に認められた。採取したと考えられる基本層序Ⅵ層は厚さ約1mである。

5. 遺物包含層

調査区東側の、南に面する斜面から検出された。当初、隣接する2枚の包含層として検出したが、堆積土も同一で、さらに、遺物の接合関係が認められることから、1枚の包含層であると考えられる。約7m×3mの不整形の広がりをもつ。堆積土は1層に大別される。多数の土師器、須恵器が出土した。出土状況に規則性はみられない。

6. 焼土遺構

焼土遺構は50基検出された。調査区全域に分布している。平面形は隅丸方形を呈するものが多いが、規模は均一でない。火熱をうけた痕跡も全面に及ぶもの、部分的に認められるものがある。堆積土はいずれも自然堆積で、底面付近には炭化物が多い。

20号焼土遺構は8号窯跡(木炭窯)の斜面下方から検出されたもので、平面形は瓢箪形をしている。深さは5cm前後で、全面に強い火熱をうけて赤変していた。20号焼土遺構の斜面下方から数点の羽口が出土している。

7. 土 壤

土壙は75基検出された。全域に分布しているが、特に調査区東側に多い。形態、規模はともに均一ではない。合口甕棺が出土した18号土壙以外は、出土遺物も少なく、性格を推するものは少ない。

合口甕棺が出土した18号土壙は調査区を東西に分ける沢の西側で、東に面する標高39mの急斜面に位置する。平面形は長軸0.86m、短軸0.35mの長円形である。出土した甕は器高約36cmのものと器高約19cmの小型のもので、どちらも製作に際し、ロクロを使用している。2つの甕は口を合わせ、横向きに埋めてあった。

調査区東側から検出された粘土採掘坑跡の周囲から、同規模、同形態の土壙が数基検出されている(23、26、27、29、30号土壙ほか)。それらは1辺2m前後の隅丸方形で、60cmほど掘り込まれた平坦な底面から、さらに、1辺約1.5mの隅丸方形に1.1mほど掘り下げられたものである。堆積土は下から、砂層、砂質粘土層、粘土層、シルト層の順である。粘土採掘坑に近接すること、水の得やすいこと、堆積土の状況などから、粘土精製に関係する遺構である可能性がある。

8. 井 戸 跡

住居跡の集中する調査区東側、標高約30mの丘陵緩斜面に位置する。素掘りの井戸である。平面形は上端が橢円形、下端が円形である。規模は長軸1.91m、短軸1.56m、深さ1.22mである。底面は丸味をもっており、壁は急な角度で立ち上がる。堆積土は砂、砂質粘土を主体とする自然堆積である。少量の土師器、須恵器が出土している。

9. 溝 状 遺 構

溝状遺構は26条確認された。調査区全域に分布するが、特に、粘土採掘坑跡の位置する調査区東側に多い。規模は均一ではない。

10. その他の出土遺物

基本層序Ⅰ～Ⅲ層から出土した遺物や採集された遺物には、石器、縄文土器、土師器、須恵器、陶器、古銭、板碑などがある。土師器、須恵器が最も多い。

石器は、基本層序Ⅲ層から出土したもので、石鏃、スクレーパーなどがある。

縄文土器はいずれも小破片のため、時期の判別できるものは少ない。時期のわかるものとしては、縄文時代前期大木2式、中期大木8a式、後期に比定されるものである。

陶器、板碑は小片、断片で、年代は不詳である。古銭は「寛永通寶」である。

VI. 遺構と遺物のまとめ

本概報では代表される遺構・遺物を抽出して記載したため、検出されたすべての遺構・遺物について詳細な検討を加えることはできない。そこで、前述した1号、10号、16号、17号住居跡と1号、2号、3号窯跡の出土遺物、および検出された各遺構について、簡単な検討を加え、本遺跡の概要をまとめることとする。

1. 遺 物

■ 住 居 跡 ■

【1号住居跡・10号住居跡出土土器の特徴】

〈1号住居跡〉

1号住居跡の床面、および周溝からは土師器壊、甕、鉢、赤焼き土器壊が出土している(第6図1～5、8、9、第7図1)。これらはいずれも、製作に際しロクロを使用しているものである。

土師器壊は体部下半が強く内湾するもので、口縁部がそのままおさまるものと外反するものがある。器面は外面にロクロナデ、内面にミガキと黒色処理が施されている。底部は全面にケズリ再調整が施されるもの、切り離しが回転糸切りで体部下端にケズリが施されるものがある。口径に対する底径の比は1:0.47前後である。

土師器甕は体部から頸部にかけて緩やかな丸味をもって内湾し、短い口縁部が直線的に外傾するものである。体部中央に最大径をもつ。器面は内外面にロクロ調整され、体部下半には外面にケズリ、内面にヘラナデが認められる。

赤焼き土器壊は体部が緩やかな丸味をもって外傾するもので、口縁端部がわずかに外反するものである。底部の切り離しは回転糸切りで、再調整は認められない。

〈10号住居跡〉

10号住居跡の床面からは土師器甕、鉢、須恵器壊が(第9図)、外周溝底面からは土師器壊、甕、須恵器壊、甕が出土している(第10図1、3～7)。

床面から出土した土師器甕、鉢はロクロ不使用の土器である。

甕はどちらも体部上半を欠くものである。器面は外面にケズリ、内面にヘラナデあるいはナデが施されている。底部には木葉痕が認められる。

鉢は丸底風の底部から緩やかな丸味をもって外傾し、口縁部でわずかに外反するものである。器面調整は外面口縁部にヨコナデ、体部から底部にケズリが施される。内面は口縁部にヨコナデ、体部から底部にかけてハケメ、ヘラナデ、ナデが認められる。

須恵器坏は平底の底部から直線的に外傾するものである。体部下端から底部全面に回転ケズリ再調整が施されている。口径に比して底径が大きい。

外周溝底面から出土した土師器坏、甕、須恵器坏は製作に際しロクロを用いたものである。土師器坏は体部が緩やかな丸味をもって外傾するものである。外面体部中央から底部全面にケズリが施され、内面にはミガキと黒色処理が施されている。

土師器甕は体部が弱いふくらみをもって外傾し、頸部で屈曲して短い口縁部が直線的に外傾するものである。口縁部に最大径をもつ。器面は内外面にロクロ調整され、外面体部上半から下半にかけてシャープなケズリが施されている。

須恵器坏は平底の底部から体部が直線的に外傾し、口縁部で外反するものである。体部下端から底部全面に回転ケズリ再調整が施されるもの、底部全面に施されるもの、体部下端から底部にかけて施され、遅い回転の糸切り痕を残すものがある。

【1号住居跡・10号住居跡出土土器の編年的位置と年代】

製作に際しロクロを使用する土師器は、東北地方南部における土師器編年(氏家和典：1957.3)では、塩釜市表杉ノ入貝塚(加藤孝：1954.7)出土土器を標式資料として設定された表杉ノ入式とされ、平安時代に比定されている。表杉ノ入式土器は型式設定後、資料の増加に伴いその細分が試みられている(阿部義平：1986.10、桑原滋郎：1969.12、小笠原好彦：1976.10、森貢喜：1982.1ほか)。その内容を坏形土器についてみると、器形では口径に対する底径の比が大きいものから小さいものへ、技法では再調整のあるものから再調整の施されない、回転糸切り痕を残すものへ変化するというものである。具体的な研究成果も積み重ねられ、宮城県南部、北部においてそれぞれ各遺跡・各住居間での変遷が指摘されている^{註1}(丹羽茂：1983.3、森貢喜：1983.3、古川一明：1984.3)。

本遺跡1号住居跡・10号住居跡出土土器は表杉ノ入式の範疇に包括されながらも、それぞれの器種における器形や製作技法の特徴を異にしている。両者を比較すると、10号住居跡ではロクロ不使用の土師器甕、鉢が含まれること、須恵器坏に回転ケズリ再調整が施されることなど、古い要素が認められる。したがって、10号住居跡出土土器は1号住居跡出土土器に先行するものと考えられる。

^{註2}

本遺跡1号住居跡・10号住居跡出土土器は表杉ノ入式の範疇に包括されながらも、それぞれの器種における器形や製作技法の特徴を異にしている。両者を比較すると、10号住居跡ではロクロ不使用の土師器甕、鉢が含まれること、須恵器坏に回転ケズリ再調整が施されることなど、古い要素が認められる。したがって、10号住居跡出土土器は1号住居跡出土土器に先行するものと考えられる。

10号住居跡出土土器と類似する資料は亘理町宮前遺跡ⅣA群土器(丹羽茂：前掲)、色麻町上新田遺跡(小井川和夫：1981.3)、瀬峰町大境山遺跡第5土器群(阿部・赤沢：1983.3)に求めることができる。本資料との相違点をみると、前二者はそれぞれ須恵器坏、土師器甕において本資料と類似するが、前二者の土師器坏は口径・底径比が大きく、また、回転ケズリ再調整が施されるもの、底部の切り離しがヘラ切りのものが含まれ、器形や技法において古い様相を示している。大境山遺跡第5土器群はロクロ不使用の土師器甕とロクロ使用の土師器坏の組み合わせが認められ、土器組成において共通性がある。特に、ロクロ不使用の土師器鉢(大境山遺跡報文では甕)に強い類似性を認めることができる。しかし、土師器坏や須恵器坏の器形、技法は異なっている。以上のように、表杉ノ入式でも古い段階に位置付けられている上記三者と共通点は認められるものの、細部では異なる点も多い。

次に本資料の上限と下限について考えてみたい。体部下端から底部に回転ケズリ再調整の施される本住居の須恵器坏は、利府町硯沢窯跡第4群土器(宮城県教育庁文化財保護課：1987.3)に類似しているが、本資料のものは口径・底径比がやや小さく、新しい様相を示している。硯沢窯跡第4群土器は資料数が十分でないしながらも、8C.後葉に位置付けられている。また、蔵王町東山遺跡土器溜出土土器(真山悟：1981.3)はロクロ使用の土師器、須恵器から構成されるもので、須恵器坏では回転糸切り無調整のものが多く含まれることから、本資料より新しい段階のものと考えられる。東山遺跡土器溜出土土器は伴出する灰釉陶器から9C.中葉頃とされている。

以上を総合すると、関ノ入遺跡10号住居跡出土土器は表杉ノ入式でも古い段階に位置付けられ、実年代では、概ね9C.前半でも中葉まで下らない年代が考えられる。^{註3}

1号住居跡出土土器は蔵王町東山遺跡土器溜、川崎町二本松遺跡第1号住居跡(小山田正男：1985.8)、高清水町五輪C遺跡第5号住居跡(小野寺祥一郎：1979.8)、築館町佐内屋敷遺跡第33号住居跡(森貢喜：1983.3)などに類例を求めることができる。本資料と四者の相違点をみると、土師器坏において、体部下端から底部にケズリ再調整されるものが主体を占め、口径・底径比が1:0.45前後(本資料では1:0.47)と共通している。しかし、前二者では回転ケズリ再調整という古い要素をもつものが含まれており、後二者では回転糸切り痕を残し、体部下端にケズリ再調整されるものが主体を占めるという違いも認められる。

1号住居跡出土土器は資料数も少なく、土器組成も不十分であるが、類似する上記四者の年代観の範疇で捉えておきたい。実年代では、前述のように、東山遺跡土器溜の年代が9C.中葉頃とされることから、概ね9C.後半を中心とした年代が考えられる。

【16号住居跡・17号住居跡出土土器の特徴】

〈16号住居跡〉

16号住居跡の床面、周溝、およびカマドからは土師器壺、甕が出土している(第12図1~4、6~8、第13図1)。これらは製作に際しロクロを使用しないものである。

壺は、いずれも底部を欠くが、丸底で外面中位に明瞭な段をもっている。また、内面に稜をもつものもある。口縁部は、内湾するものと直線的に外傾するものがある。器面は外面口縁部にヨコナデされるもの、ミガキが施こされるものがあり、段を境に底部にはケズリが施されている。内面はほとんどのものがミガキと黒色処理が施されるが、黒色処理の認められないものもある。

甕は長胴形の体部から口縁部が緩やかに外反するもので、頸部に段をもっている。器面は外面口縁部にヨコナデ、ハケメ、頸部から体部下端までハケメが施される。内面は口縁部にヨコナデ、またはハケメが施され、体部から底部にかけてヘラナデ、ハケメが認められる。

以上の一括土器と、厳密には出土状況が異なるが、床面直上から土師器甕が出土している(第13図2)。底部から緩やかな丸味をもって立ち上がり、口縁部がわずかに外反するもので、頸部と口縁部に段をもっている。器面は外面口縁部にヨコナデ、体部上半にハケメ、下半にケズリが施されている。内面は全面にミガキが施され、下端にケズリが認められる。この甕は、本住居跡一括資料と製作技法や調整技法が近似することから、本住居跡に伴うものと考えてさしつかえないと思われる。

〈17号住居跡〉

17号住居跡の周溝、床溝、貯蔵穴状ピット底面から土師器甕、壺、甕が出土している(第15図1~3)。これらはいずれもロクロ不使用の土器である。

甕は長胴形の体部から口縁部が直線的に外傾するもので、頸部に段をもっている。口唇部には沈線が認められる。

壺は球形をした体部から口縁部が緩く外反するもので、頸部に段が認められる。

甕、壺は、共に、外面口縁部にヨコナデ、ハケメ、頸部から体部下端までハケメが施されている。内面は口縁部にヨコナデ、体部から底部にかけてヘラナデ、ハケメが施されている。

甕は極く弱い丸味をもった体部から、口縁部が外反するものである。器面はマメツしているが、外面にヨコナデ、ナデ、内面にヘラナデが観察される。

【16号住居跡・17号住居跡の編年的位置と年代】

16号住居跡一括土器と17号住居跡一括土器は、器形、製作技法や細部の調整技法において近似しており、同じ雰囲気をもった1つの様式として捉えることができる。

この様な特徴をもつ土器群は、陸奥国分寺僧房西建物基壇南側溝から出土した壺をもとに設定された国分寺下層式(氏家和典:1961.3、1967.9)と考えられる。国分寺下層式は型式設定後、多くの遺跡から出土し、土器組成も把握され、細分も検討されている。本土器群は多賀城市多

賀城跡 S I 1971堅穴住居跡(丹羽茂ほか:1989.7)、宮崎町東山遺跡 S I 133住居跡(高野・村田ほか:1989.7)、高清水町觀音沢遺跡(加藤・阿部:1980.9)などに類例がみられる。細部についてみると、土師器壺では器形は類似するものの、本資料には外面口縁部にミガキ調整されるものが含まれるという違いがある。また、本資料の土師器甕、壺、甌の器形や調整技法には、前型式である栗団式から引きつがれる古い要素が認められる。

須恵器が出土していないため、その検討はできないが、国分寺下層式でも古い段階のものと考えられる。上記三者は8C.前葉、あるいは8C.前半頃とされ、本資料も、概ね8C.前半頃に位置付けられる。

窯跡

【須恵器窯跡出土土器の特徴】

各須恵器窯床面、および灰原からは多数の遺物が出土している。しかし、灰原や廃棄時前の遺物については整理も不十分な状況である。そこで、豊富な遺物を出土した1号、2号、3号窯の廃棄段階(第1床面)の遺物、特に壺について検討したい。

〈1号窯跡〉

壺(第17図、第18図1~3)は体部が極く弱い丸味をもって外傾し、口縁部で外反する。底部は平底で、回転糸切りで切り離されている。図化できたものでは口径15.2~16.3cm(平均15.7cm)、底径5.4~6.5cm(平均5.9cm)、器高3.8~5.2cm(平均4.6cm)である。口径と底径の比は平均で1:0.38、口径と器高の比は平均で1:0.30である。

〈2号窯跡〉

壺(第20図、第21図)は底部から体部にかけて緩やかな丸味をもって立ち上がり、口縁部にかけて直線的に外傾する。口縁部でわずかに外反するものもあるが、数は少ない。底部は回転糸切りで切り離されている。体部には粘土紐の痕跡が認められるものが多い。内外面ともに指による緩いロクロ目が観察される。図化できたものでは口径13.7~15.3cm(平均14.4cm)、底径5.8~7.4cm(平均6.5cm)、器高4.1~5.0cm(平均4.6cm)である。口径と底径の比は平均で1:0.45、口径と器高の比は平均で1:0.32である。

〈3号窯跡〉

壺(第24図、第25図1~3)は底部から口縁部にかけて緩やかな丸味をもって外傾する。口縁部で外反するものと、そのままおさまるものがある。底部は回転糸切りで切り離されている。1号、2号窯跡出土壺に比べて非常に薄手である。外面は指による緩やかなロクロナデが認められる。内面は指によるロクロナデと、コテ状工具によるロクロナデが観察され、ロクロ目が不明瞭でツルツルした感じがする。また口唇部も同様の工具によって、面取り風の鋭角なロクロ目が観

察される。図化できたものでは口径13.6~15.1cm(平均14.6cm)、底径5.4~6.6cm(平均6.0cm)、器高3.9~4.9cm(平均4.4cm)である。口径と底径の比は平均で1:0.41、口径と器高の比は平均で1:0.30である。

【須恵器窯出土土器の編年的位置と年代】

1号、2号、3号窯跡と同様の、底部切り離しが回転糸切りで無調整の須恵器坏を焼成した窯跡としては、河南町須江糠塚遺跡(高橋・阿部:1987.3)と仙台市五本松窯跡D地点(仙台市教育委員会:1986.11)がある。また、底部の切り離しが回転糸切りで、体部下端や底部にケズリ再調整の施される須恵器坏は、仙台市安養寺中畠窯跡(東北学院大学考古学研究部:1967.7、村田晃一:1988.3)から出土している。

須江糠塚遺跡、五本松窯跡D地点、安養寺中畠窯跡は須江糠塚遺跡(高橋・阿部:前掲)報文中で詳細な検討が行なわれており、

五本松D 8基群・安養寺中畠窯→五本松D 4基群・須江糠塚第6窯→須江糠塚第1窯
(9C.後半でも870年に近い時期) (前者よりやや遅れる9C.後半) (10C.前半)

という変遷が推定された。

そこで、本遺跡の北方約3.2kmに位置する須江糠塚遺跡第1窯、第6窯と比較してみたい。

須江糠塚遺跡第1窯出土坏は、体部がやや丸味をもつが体部中央から外傾するものである。
口縁部がわずかに外反するものとしないものがあるが、前者のものが圧倒的に多い。底部はあげ底気味の平底で、回転糸切りで切り離されている。器内面にはコテ状工具が使用されている。
註4
口径13.7~15.9cm(平均14.8cm)、底径4.5~5.9cm(平均5.2cm)、器高3.9~5.6cm(平均4.4cm)である。口径と底径の比は平均で1:0.35で、口径と器高の比は平均で1:0.30である。

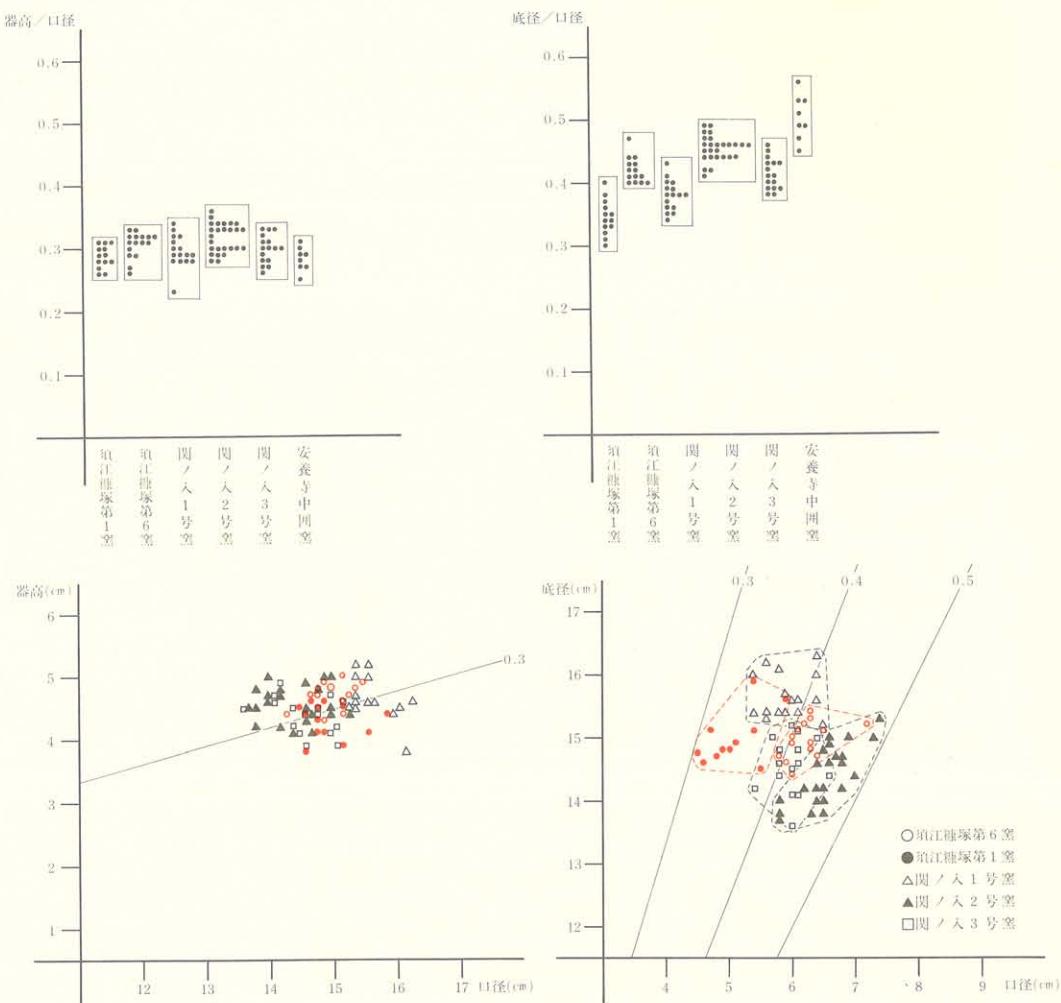
第6窯の坏は、体部から口縁部へ内湾気味に外傾するものである。底部はあげ底気味の平底で、回転糸切りで切り離されている。窯跡廃棄段階のものは内・外面共指によるロクロ目が明瞭であるが、第1次、第2次床面のものには内面にコテ状工具が使用されている。口径14.3~15.5cm(平均15.0cm)、底径5.3~7.2cm(平均6.1cm)、器高3.9~5.6cm(平均4.7cm)である。口径と底径の比は平均で1:0.41で、口径と器高の比は1:0.31である。

須江糠塚第1窯、第6窯と本遺跡1号、2号、3号窯の須恵器坏についてまとめると以下の様になる(第14表、第29図)。

上記5窯は、技法では器面が内・外両面にロクロ調整され、底部の切り離しが回転糸切りで

	器形	口径	底径	器高	口径:底径	口径:器高	内面のコテ状工具痕
関ノ入遺跡1号窯	体部が外傾。口縁部外反。	15.7cm	5.9cm	4.6cm	1:0.38	1:0.30	無
関ノ入遺跡2号窯	丸味をもって立ち上がり、口縁部にかけて外傾。	14.4cm	6.5cm	4.6cm	1:0.45	1:0.32	無
関ノ入遺跡3号窯	丸味をもって外傾。口縁部外反するものとしないものがある。	14.6cm	6.0cm	4.4cm	1:0.41	1:0.30	有
糠塚遺跡第1窯	体部が外傾。口縁部外反。	14.8cm	5.2cm	4.4cm	1:0.35	1:0.30	有
糠塚遺跡第6窯	体部から口縁部へ内湾気味に外傾。	15.0cm	6.1cm	4.7cm	1:0.41	1:0.31	廃棄前のものに有

第14表 須江丘陵検出の須恵器窯出土坏



第29図 各窯跡の法量

無調整という共通性をもっている。法量では口径と器高の比が0.30前後であり、その分布にもあまり差はみられない。口径と底径の比は1:0.3~0.5の間に、各窯ごとにまとまりを持ち、それぞれ重複する範囲を含みながらもばらつきをみせている。比の大きい順に2号窯→3号窯・須江糠塚第6窯→1号窯→須江糠塚第1窯となる。つまり、本遺跡1号、2号、3号窯は器形、技法が同様で、口径・底径比が須江糠塚遺跡第6窯とその前後になることから、概ね、須江糠塚第6窯と同様の、平安時代前半、9C.後半頃の年代が考えられる。これは、須江糠塚第6窯と本遺跡1号、2号、3号窯の堆積土中に、同時期に降下したと考えられる灰白色火山灰が含まれることからも、妥当性をもつものといえる。

ところで、本遺跡から検出された各須恵器窯については、廃棄時前の遺物や灰原の整理が十

分でないことから、詳細な検討ができなかった。そこで、本遺跡の全容を記載する正式な報告書に向けて、問題点と見通しを述べておきたい。

1号、2号、3号窯出土の須恵器坏の法量について比較すると、1号窯と3号窯は底径に差はみられないが、口径では1号窯のものが大きい。2号窯と3号窯は口径に差はみられないが、底径では2号窯のものが大きい。器形についてみると、1号窯と2号窯のものは、体部の湾曲や口縁部形態が異っており、両者は3号窯内で共存している。つまり、三者は互いに関連しており、三者間で器形や法量が変化したものと考えることができる。その変遷について考えると、これまでの研究成果である、口径・底径比の大きいものから小さいものへ変化するという傾向性に従えば、2号窯→3号窯→1号窯という順になる。器形の細部について、変遷が指摘されている須江糠塚第6窯と第1窯のものを比較すると、体部が内湾するものから湾曲の弱いものへ変化し、口縁部が外反しないものを主体とするものから外反するものを主体とするものへ移行している。このことは本遺跡三者の変遷案に妥当性をもつものといえる。しかし、極く細かい器形や法量の違いを、即、時期差を考えることには問題があるので、整理が十分に進むのを待って再検討しなければならない。

次に、製作・調整技法について述べたい。3号窯の廃棄前の床面から出土した土器には、体部下端にケズリが施こされる安養寺中畠窯のものに類似した土器が含まれている。また、同窯の灰原最下層からは、体部の湾曲が少なく、底径・口径比の大きい五本松窯D8基群に類似するものや、底部の切り離しがヘラ切りによるものが、少量含まれている。このことは、3号窯が操業期間に幅をもつと同時に、その操業期間という短い時間幅の中で、本資料が器形の異なる五本松窯D8基群類似のものや、安養寺中畠窯類似のものと、共存していることを示している。厳密にいえば、本資料は、後二者に後続し、その時間幅は短いものと考えられる。^{註5}

次に器内面に観察されるコテ状工具の使用痕について触れてみたい。工具使用痕は、本遺跡3号窯、須江糠塚第1窯、第6窯のものに認められる。五本松窯D地点では、後出するD4基群のものに認められるが、先行するとされるD8基群のものには認められない。^{註6}コテ状工具の使用は、年代的に新しい段階のものに認められるという傾向性があり、器形の変化に関わる問題を含み、土器変遷を考える上で指標になる可能性をもっている。しかし、本遺跡3号窯の変遷案の中では当てはまらず、須江糠塚第6窯内においても、廃棄前のものに認められるが、廃棄段階のものには認められないという矛盾もあるため、短い時間幅の中では十分条件とはいえないことも指摘される。

最後に、本遺跡3号窯の灰原では、廃棄された製品と共に土師器が伴出しており、それらの検討から土師器との組み合わせも捉えることが可能である。以上のような問題点を、今後再検討を行うまでの課題としたい。

註 1：宮城県南部では、宮前遺跡第ⅣA群→青木遺跡第21住→東山遺跡土器溜→家老内遺跡第2住→安久東遺跡第2住という変遷が指摘されており、宮城県北部では、上新田遺跡第1住→(西手取遺跡第3・4住、佐内屋敷遺跡第28住)、色麻古墳群第25住→五輪C遺跡第5住、佐内屋敷遺跡第33住、色麻古墳群第31住、(手取遺跡第3住)という変遷が提示されている。

註 2：10号住居跡の床面出土土器と外周溝底面出土上器は、須恵器坏では類似性がみられるものの、その他の器種では器形や製作技法に違いが認められる。これは住居存続の時間幅や、住居と住居外付属施設という生活空間の機能的差違から、それぞれの埋没状況が異なることに起因すると思われる。厳密には、出土状況の異なる両者を分離して考えなければならないのかもしれない。しかし、住居存続期間や、廃棄時点の共通性から、両者は大きな時間幅をもたないものと考え、一括の土器群として扱った。

註 3：抽出した各住居の土器組成は、本遺跡から検出した全遺構・全遺物間での比較・検討を行なっていないため、一様式として捉えるには十分といえない。また、宮城県内の遺跡と、簡単に検討したため、土器の地域性も除外して扱った。これらの不十分な要因は、今後、本遺跡の正式な報告書において、再度検討する必要がある。

註 4：本概報作成にあたり、再観察した。

註 5：このことは、単に、本遺跡 3 号窯に限定したことではない。本遺跡と須江糠塚遺跡の間に位置する、須江瓦山地区には、多数の須恵器窯、瓦窯の存在が確認されている。灰原が一部露出していた 1 地点から採集した遺物には、瓦や本遺跡 3 号窯に類似したもの、回転ヘラ切り底のもの、底部にケズリや回転ケズリ再調整の施されたものがある。採集品という資料的に弱い面をもつが、同一地点から採集されたものであり、長い時間幅をもたないものと考えられる。

註 6：仙台市教育委員会の厚意により該土器を観察させていただいた。遺物の観察にあたっては、小川淳一氏に有益な御教示をいただいた。

2. 遺 構

本遺跡から検出された遺構は、大きく二つに大別される。ひとつは住居跡などの、直接生活に関わる遺構であり、もうひとつは窯跡など、生産に関する遺構である。

生活に関する遺構では、先ず、住居跡があげられる。住居跡は31軒検出されており、特に調査区東側の南面する斜面に24軒が集中しており、集落を形成している。住居跡は斜面に立地しているためか、そのほとんどが削平されている。住居には外延溝や外周溝が付設されたものもある。次に、性格は不明であるが、多数の焼上遺構、土壙、溝跡が検出されている。土壙の中には、墓と考えられる合口甕棺が埋設されたものがある。

生産に関する遺構では、須恵器を焼成した窯跡、木炭を焼いた窯跡がある。須恵器生産に関するものとして、粘土採掘坑跡、粘土精製に関わると考えられる土壙がある。以上のように、須恵器生産において、粘土採取から焼成に至る一連の工程を考える上で、好資料が得られた。また、須恵器窯は1基づつ点在する傾向にあり、本遺跡の特徴といえる。

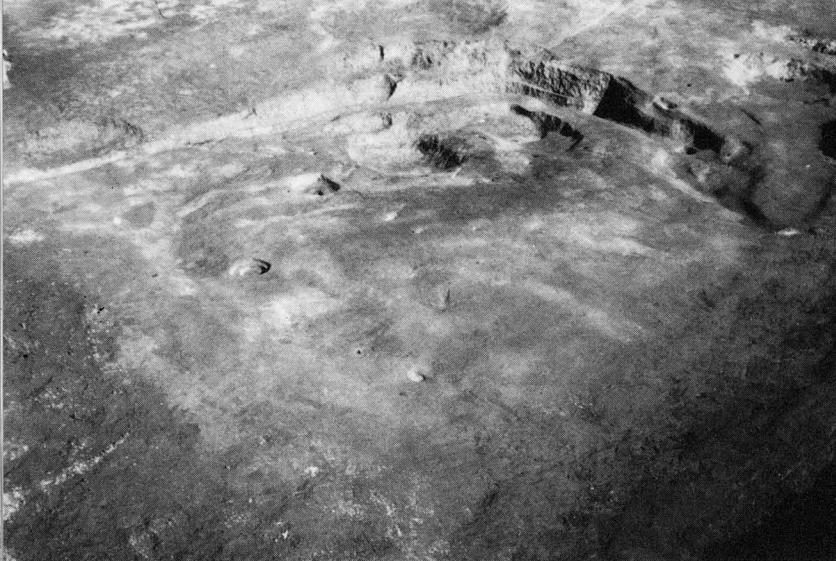
今後、各遺構の性格や年代を検討し、関ノ入遺跡の総合的な把握が必要とされよう。

引 用 文 献

- 阿部・赤沢(1983.3) :「大境山遺跡」『瀬峰町文化財調査報告書』第4集 濑峰教育委員会
- 阿部・赤沢・佐藤(1988.3) :「下藤沢II遺跡」『瀬峰町文化財調査報告書』第6集 濑峰教育委員会
- 阿部義平(1968.10) :「東国の土師器と須恵器—多賀城外の出土土器をめぐってー」『帝塚山考古』No.1
- 伊東信雄(1957.3) :「古代史」『宮城県史』第1巻 宮城県
- 氏家和典(1957.3) :「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯 東北史学会
- 氏家和典(1961.3) :「土器」『陸奥国分寺跡発掘調査報告書』宮城県教育委員会
- 氏家和典(1967.9) :「陸奥国分寺跡出土の丸底杯をめぐって」『柏倉亮吉教授還暦記念論文集』
- 小笠原好彦(1976.10) :「東北における平安時代の土器についての二、三の問題」『東北考古学の諸問題』
東北考古学会
- 小野寺祥一郎(1979.8) :「五輪C遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第61集 宮城県教育委員会
- 小山・竹原(1987.1) :『新版標準土色帖』日本色研事業株式会社
- 小山田正男(1985.8) :「二本松遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第112集 宮城県教育委員会
- 加藤・阿部(1980.9) :「観音沢遺跡—東北新幹線関係遺跡調査報告書IV—」『宮城県文化財調査報告書』第72集
宮城県教育委員会
- 加藤・佐藤(1980.3) :「藤屋敷遺跡—東北自動車道遺跡調査報告書II—」『宮城県文化財調査報告書』第63集
宮城県教育委員会
- 加藤孝(1954.7) :「塩釜市表杉ノ入貝塚の研究」『宮城学院女子大学研究論文集』V 宮城学院女子大学
- 菊地逸夫(1982.10) :「山下遺跡—松島有料道路関連調査報告書I—」『宮城県文化財調査報告書』第87集
宮城県教育委員会
- 菊地逸夫(1985.3) :「中峯A遺跡—中峯遺跡発掘調査報告書—」『宮城県文化財調査報告書』第108集
宮城県教育委員会
- 菊地逸夫(1988.12) :「郷楽遺跡—昭和63年度宮城県内発掘調査成果発表会発表要旨—」
- 熊谷幹男(1989.12) :「土手内遺跡—平成元年度宮城県内発掘調査成果発表会発表要旨—」
- 桑原滋郎(1969.12) :「ロクロ土師器环について」『歴史』第39輯 東北史学会
- 小井川和夫(1981.3) :「上新田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第78集 宮城県教育委員会
- 斎藤・後藤(1985.3) :「古川市宮沢遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第105集 宮城県教育委員会
- 佐藤・手塚(1978.3) :「天狗堂遺跡」『田尻町文化財調査報告書』第1集 田尻町教育委員会
- 佐藤則之(1988.3) :「三十三間堂遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第127集 宮城県教育委員会
- 佐藤雄一(1986.11) :「6板碑」『わがまち河岸の文化財』 河岸町教育委員会
- 清水東四郎(1924.12) :「中山柵址(佳景山)(桃生郡史跡)」『宮城県史蹟名勝天然記念物調査報告』2
- 庄子敦(1988.3) :「八幡崎B遺跡」『利府町文化財調査報告書』第4集 利府町教育委員会
- 新庄屋・真山(1985.3) :「小梁川遺跡—七ヶ宿関連遺跡発掘調査報告書I—」『宮城県文化財調査報告書』第107集
宮城県教育委員会
- 鈴木省三(1924.12) :「中山柵」『宮城県史蹟名勝天然記念物調査報告』1
- 瀬峰町教育委員会(1988.12) :「長者原II遺跡—昭和63年度宮城県内発掘調査成果発表会発表要旨—」
- 仙台市教育委員会(1986.11) :「五本松塗跡現地説明会資料」

- 高橋・阿部(1987.3) :「須江糠塚遺跡」『河南町文化財調査報告書』第1集 河南町教育委員会
- 高野・村田ほか(1989.7) :「東山遺跡Ⅲ」『多賀城関連遺跡発掘調査報告書』第14冊 宮城県多賀城跡調査研究所
- 滝沢・神戸・久保ほか(1984.3) :「石巻地域の地質」『地域地質研究報告』通商産業省工業技術院地質調査所
- 東北学院大学考古学研究部(1976.7) :「安養寺中囲瓦窯跡発掘調査報告」『温故』特集号
- 東北学院大学考古学研究部
- 中野裕平(1988.3) :「須江閔ノ入遺跡詳細分布調査報告書」『河南町文化財調査報告書』第2集
- 河南町教育委員会
- 中野裕平(1989.3) :「須江閔ノ入遺跡詳細分布調査Ⅱ」『河南町文化財調査報告書』第3集 河南町教育委員会
- 丹羽茂(1983.3) :「宮前遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第96集 宮城県教育委員会
- 丹羽茂ほか(1989.7) :「多賀城跡」『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1988 宮城県多賀城跡調査研究所
- 平沢・手塚(1980.3) :「佐野遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ－」『宮城県文化財調査報告書』第63集
- 宮城県教育委員会
- 藤沼・小井川ほか(1989.3) :「宮城県の貝塚」『東北歴史資料館資料集』25 東北歴史資料館
- 古川一明(1984.3) :「色麻古墳群－宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書－」
『宮城県文化財調査報告書』第100集 宮城県教育委員会
- 松本彦七郎(1919.5) :「陸前国宝ヶ峯遺跡の分層的小発掘成績」『人類学雑誌』34の5
- 松本彦七郎(1919.9) :「宝ヶ峯遺跡について」『考古学雑誌』第9卷第9号
- 真山悟(1981.3) :「東山遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書V－」『宮城県文化財調査報告書』第81集
- 宮城県教育委員会
- 宮城県教育委員会(1988.1) :「宮城県遺跡地図」『宮城県文化財調査報告書』第125集 宮城県教育委員会
- 宮城県教育庁文化財保護課(1987.3) :「硯沢・大沢窯跡ほか」『宮城県文化財調査報告書』第116集
- 宮城県教育委員会
- 宮城県多賀城跡調査研究所(1974.3) :「多賀城跡－昭和48年度発掘調査概報－」『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1973 宮城県多賀城跡調査研究所
- 三宅・佐藤ほか(1977.3) :「がんげつ遺跡－平安時代の堅穴造構－」『瀬峰町文化財調査報告書』第1集
- 瀬峰町教育委員会
- 三宅・進藤・茂木(1987.3) :「赤井遺跡第1次発掘調査報告」『矢本町文化財調査報告書』第1集
- 矢本町教育委員会
- 村田晃一(1988.3) :「宮城県黒川郡大衡窯跡群」『東北歴史資料館研究紀要』第14卷 東北歴史資料館
- 森貢喜(1982.1) :「水入遺跡発掘調査報告書」『宮城県文化財調査報告書』第84集 宮城県教育委員会
- 森貢喜(1983.3) :「佐内屋敷遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅷ－」『宮城県文化財調査報告書』第93集
- 宮城県教育委員会
- 渡辺・山田ほか(1983.3) :「宮城県志田郡松山町次橋須恵器窯跡発掘調査報告」『松山町文化財調査報告書』第1集 松山町教育委員会
- 渡辺・結城ほか(1980.3) :「枊江遺跡発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第18集 仙台市教育委員会

写 真 図 版



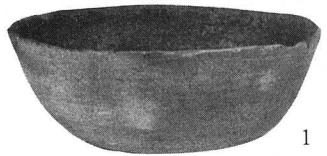
1号住居跡



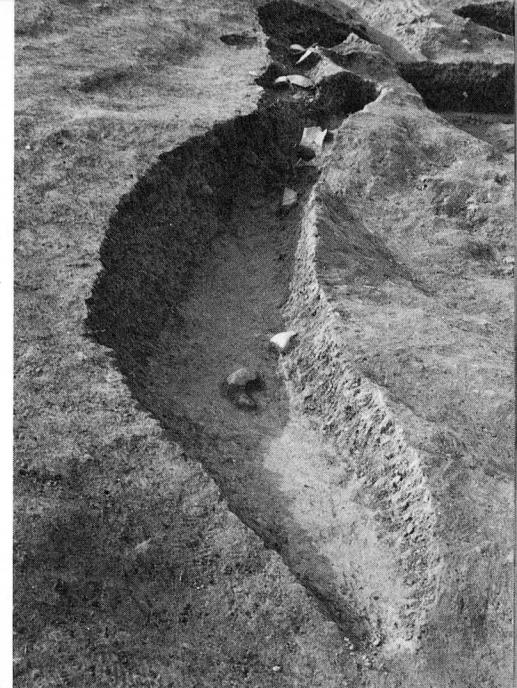
10号・11号住居跡



10号住居跡遺物出土状況



1号住居跡出土遺物



10号住居跡外周溝
遺物出土状況



12号・13号・14号住居跡



16号住居跡



17号住居跡遺物出土状況

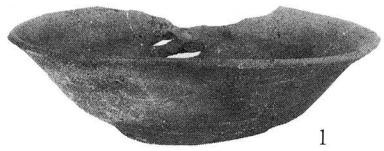
住居跡近景



17号住居跡



1号掘立柱建物跡



1



2



3



4



5



1号窯跡

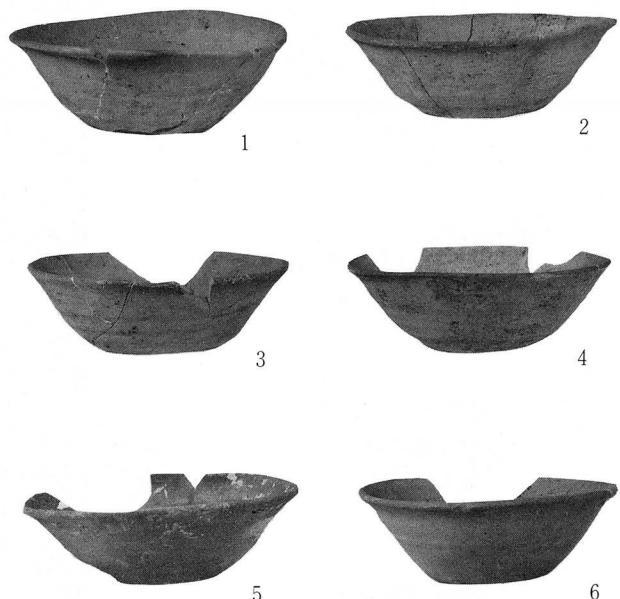
1号窯跡出土遺物



1号窯跡遺物出土状況



2号窯跡



2号窯跡出土遺物

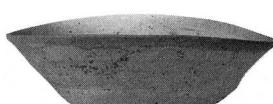


2号窯跡遺物出土状況



2号窯跡側壁から検出された
天井構築材の痕跡

3号窯跡全景



3号窯跡出土遺物



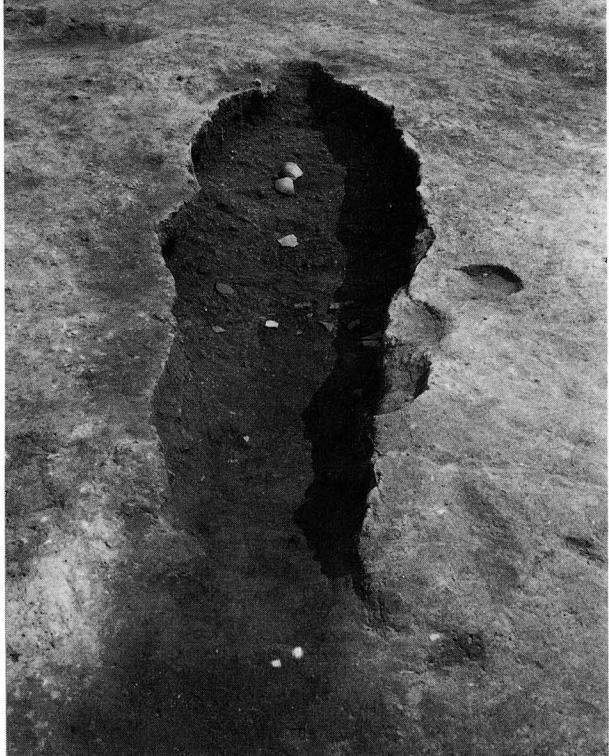
3号窯跡焚口部
側壁の石組



3号窯跡



5号窯跡



4号窯跡



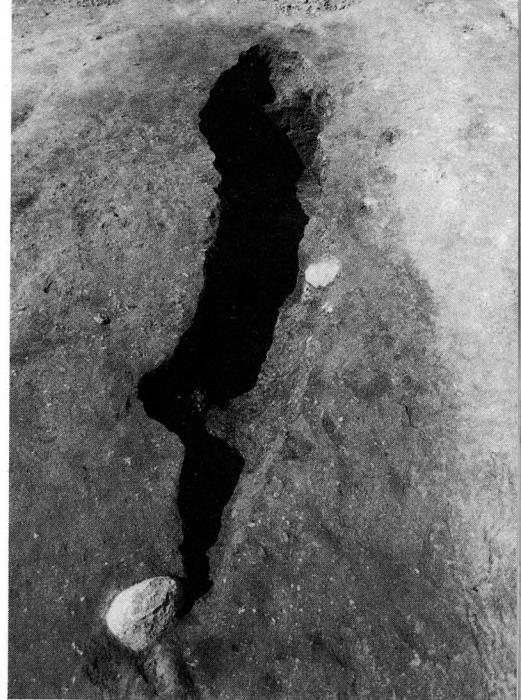
6号窯跡



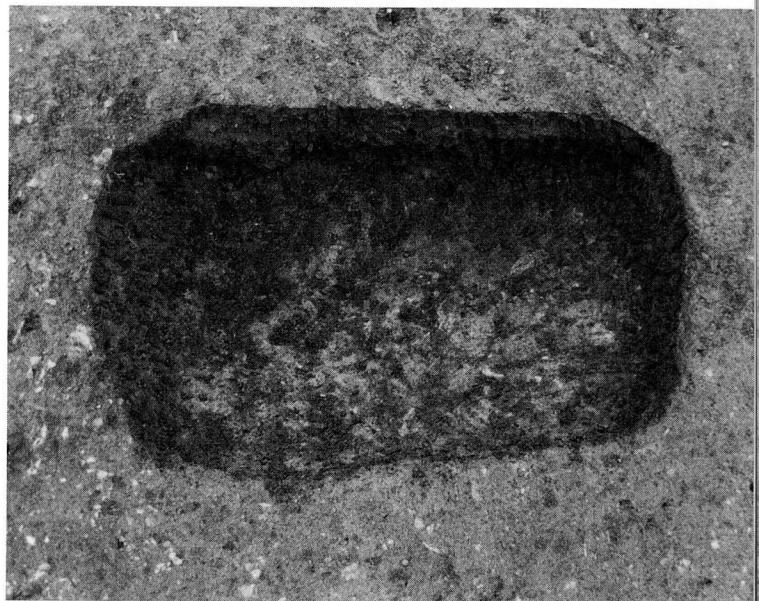
9号窯跡



7号窯跡焼成部正面



7号窯跡



47号焼土遺構



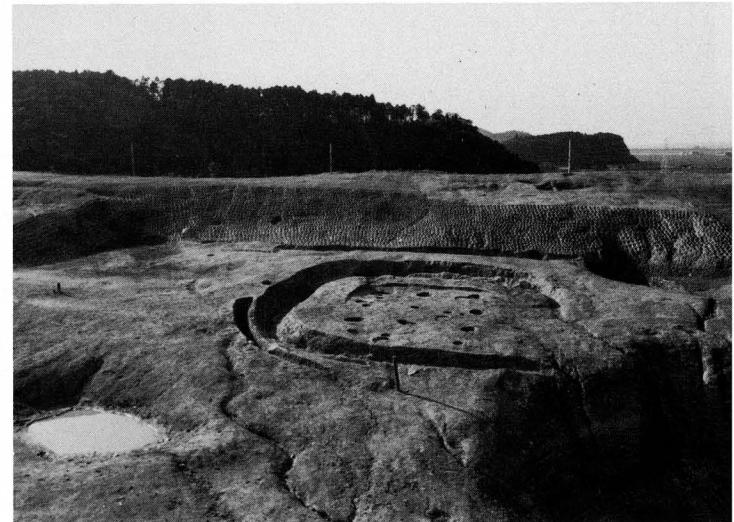
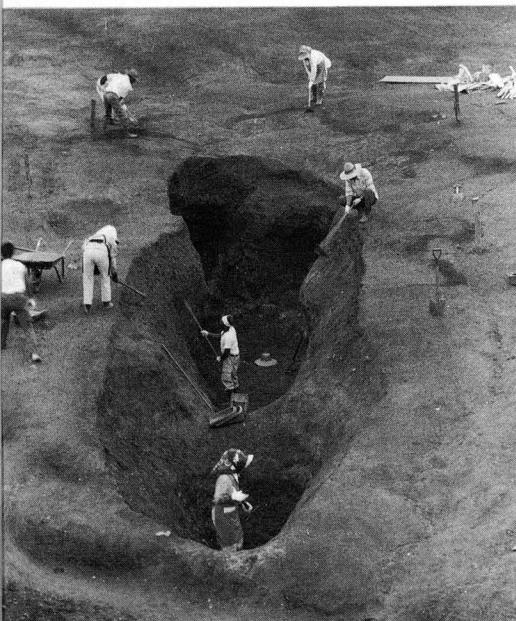
18号土壤



27号土壤



27号土壤完掘状況



4号粘土採掘坑跡(奥)と1号掘立柱建物跡(中央)

5号粘土採掘坑跡

河南町文化財関係出版物

『わがまち河南の文化財』昭和61年11月 P.1~201

『河南町文化財調査報告書』第1集「須江濠塚遺跡」昭和62年3月 P.1~110

『河南町文化財調査報告書』第2集「須江閑ノ入遺跡詳細分布調査報告書」昭和63年3月 P.1~27

『河南町文化財調査報告書』第3集「須江閑ノ入遺跡詳細分布調査Ⅱ」平成元年3月 P.1~25

『河南町文化財調査報告書』第4集「須江閑ノ入遺跡－工業団地造成に伴う発掘調査概報－」平成2年3月 P.1~67

河南町文化財調査報告書 第4集

須江閑ノ入遺跡

——工業団地造成に伴う発掘調査概報——

平成2年3月28日 印刷

平成2年3月31日 発刊

発行 河南町教育委員会

〒987-11 宮城県桃生郡河南町前谷地字黒沢前7

TEL 0225(72)2111

印刷 (株)松弘堂

〒986 宮城県石巻市門脇字本草園2番16

TEL 0225(96)5555㈹

